

569-14

9



1200501516888

14

岩波文庫

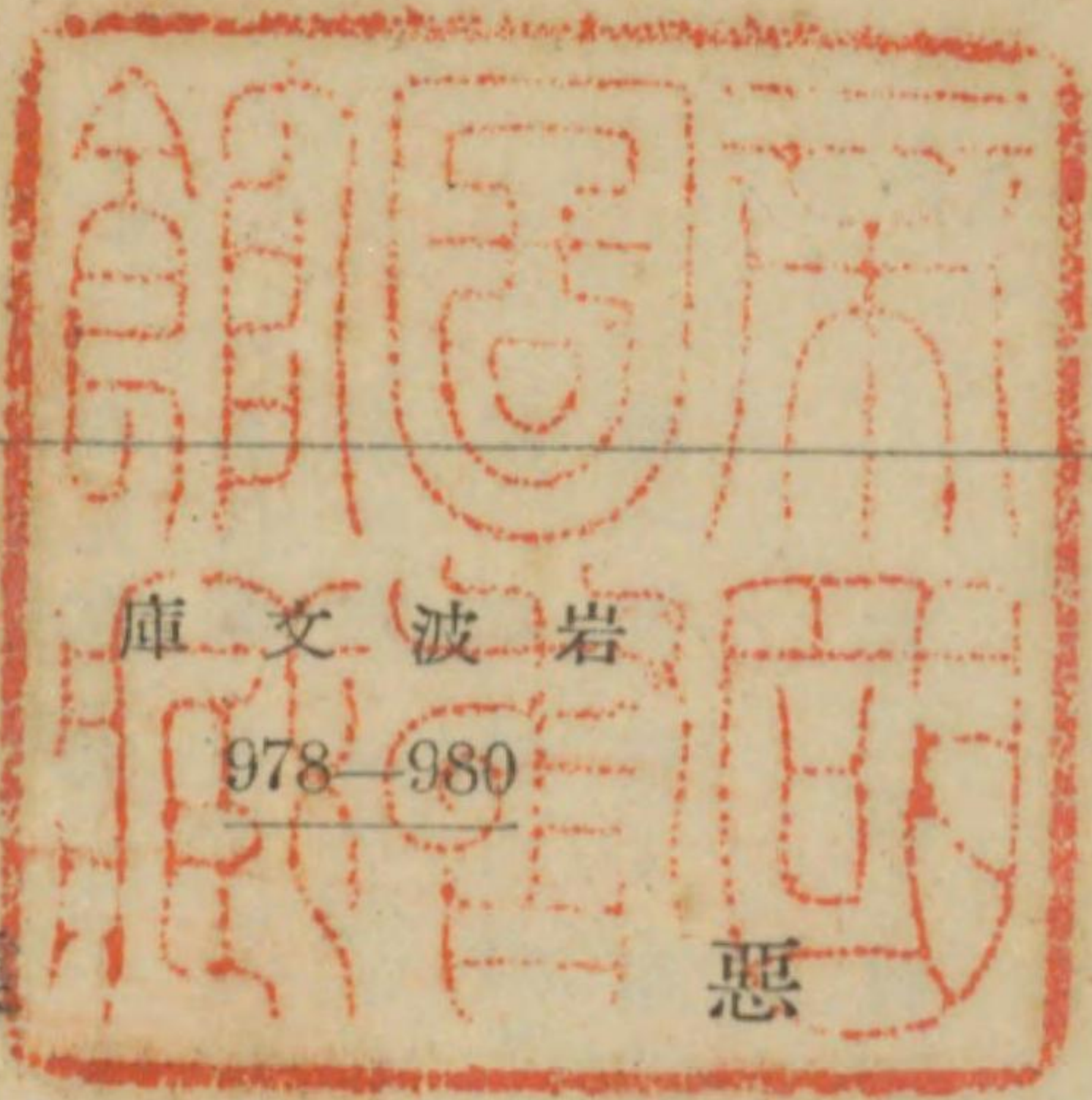
978-980

惡靈

第三編

作イキスフーエトスド  
譯夫正川米

岩波書店



岩波文庫

978-980

靈

惡

第三編

作イキスフーエトスド  
譯 夫 正 川 米



岩波書店



569-14

第三編 目次

第一章	祭——第一部	五
第二章	祭の終り	五八
第三章	破れたるロマンス	一一一
第四章	最後の決議	一五三
第五章	旅の女	一九八
第六章	多勞なる一夜	二五八
第七章	スチェパン氏の最後の放浪	三二八
第八章	終末	三八一

祭はジニビグーリン騒ぎの日の、さまざまな奇怪な出来事にも妨げられず、いよ／＼開催される事になつた。わたしなどの見る所では、よしやレムブケーがちやうど前の晩に死んでしまつても、祭はやはり催されたに相違ない——それくらゐユリヤ夫人はこの催しに、並々ならぬ意義を認めてゐるのであつた。悲しいかな、彼女は最後の瞬間まで目がくらんで了つて、社會の氣分が少しも分らなかつたのである。この祭の日に、何か恐ろしい大事件が起らないで濟まうとは、誰ひとり信じるものがないほどになつた。一部の人などは、何か『カクストロフ権事』が起るに相違ないと、前から揉手をして待ちながら、話し合つてゐた。尤も、大抵の人は氣難かしげな、外交的な様子をつくらはうと努めてゐたが。ぜんたい露西亞人といふものは、全社會を引つくり返すやうな見苦しい騒動を、夢中になつて悦ぶ癖がある。とはいへこの町には、單なる醜聞を待設ける渴望以上に、もつと／＼眞面目な何ものかがあつた。それは世間一般の焦燥である、何かしら醫し難い毒心である。なんだか誰も彼も、すべての物にあき／＼してゐるやうな具合だつた。何だか世間一般に妙にくらつき易い皮肉——やつと無理に持ちこたへてゐるやうな皮肉が瀰漫してゐた。ぐら

第三編  
第一章 祭——第一部

つかないのは婦人連ばかりだつた。但し、それもユリヤ夫人に對する容赦のない憎悪といふ、ただ一つの點のみである。この點で、婦人社交界の各派が、ことごとく結束したのである。ところが、こちらは夢にもそんな事を知らなかつた。彼女は最後の瞬間まで、自分は全社會に『取巻れて』ゐる、すべてのものが自分に『狂信的に信服してゐる』と思込んでゐたのである。

この町に色々なやくざな連中が姿を現はした事は、もう前にちよつと仄めかして置いた。總じて混亂した動搖時代、過渡時代には、常にどこでもいろんなやくざ者が現れるものだ。わたしが言ふのはいはゆる『先達者』連中の事ではない。いつでも人より先へ駆抜けようと急いで（それが彼らの第一の苦心である）、いつも大抵ばかげ切つてはゐるが、その代り多少とも一定した目的を有する連中のことを言ふのではない。わたしはたゞほんのやくざ者の事を言つてゐるのだ。すべて過渡期には、どんな社會でもこのやくざ者がゐる。彼らは何の目的も持つてないばかりか、思想の兆候らしいものの持合せさへなく、たゞ一生懸命に不安と焦燥を體現するのみである。その癖、これ等のやくざ者は知らず識らずのうちに、一定の目的をもつて行動してゐる少數の『先達者』の指揮下に落ちて了ふ。そして、この少數の一團は、よく／＼の馬鹿でない限り（尤も、かういふ事もよくあるのだ）、このごみ／＼した有象無象を、勝手放題に操るのである。

で、この町でも一切が終つた今日では、みんなかういふ風な事を言つてゐる。つまり、ピョートルを操つてゐたのは萬國労働協會であるが、そのピョートルはユリヤ夫人を操り、ユリヤ夫人はまたピョートルのさし金で、いろんなやくざ者を踊らしてゐたといふのである。町でも一ばん

頭のしつかりした人達は、どうしてあの當時ぼんやりしてゐたのだらうと、今更自分で自分に呆れてゐる。一體この地方の混亂時代といふのは、何をさすのだらう？ また過渡時代とは、何から何への過渡なのだらう？——それはわたしにも分らないが、また誰一人分るものはないと思ふ。もし分れば、それはよそからやつて來た、縁も何もない少數の人ぐらゐるものだらう。とにかく、思切りやくざな連中が急に幅を利かし出して、もとは口もろくに、開け得なかつたものが、誰はばからぬ大聲で、すべて神聖なるものを評價し始めたのである。しかも、今まで事もなく勢力を維持してゐた第一流の人々が、とつぜん彼らの言に耳を傾けて、自分たちは少しも物を言はなくなつたではないか。中には、おぞましくも調子を合せて、お世辭笑ひをする者さへあつた。

リヤムシンとか、チェリヤートニコフとか、地主のチェンチェートニコフとか、手製の涕つたらしのラヂーシチェフ（露國革命思想の先驅者）とか、愁はしさうな、そのくせ高慢ちきな薄笑ひを浮かべてゐる猶太人だとか、よそからやつて來た笑上戸の旅客だとか、都からやつて來た主義主張のある詩人だとか、主義や才能の代りに百姓外套を着込み、タールを塗りこくつた長靴を穿いた詩人だとか、自分の職務の無意味を嘲笑して、一留でも餘計な儲けがあれば、さつそく劍を棄て、鐵道書記か何ぞの椅子へ入りこまうとする少佐や大佐だとか、辯護士に鞍替へする將軍だとか、發達した仲買人だとか、發達しかけてゐる商人だとか、數限りない神學生だとか、婦人問題の權化でございと言ひたさうな女だとか、かういふものが急にこの町で威張り出した。しかも、誰に向つて威張るのかといふと、俱樂部とか、名譽ある政治家とか、義足を曳いて歩く將軍とか、傍へ

寄りつく事も出来ないほど厳正な、貴婦人社會に向つてなのである。ブルワーラ夫人さへ、息子に恐ろしい不幸の破裂するまで、このやくざ連の走り使まで、しかねないほどであつたから、當時その他のわが貴婦人たちが、悉く血迷つて了つたのも、いくぶん恕すべき點がある。

もう前に言つた通り、今では何もかも萬國勞働協會のせゐにしてつて、よそから來た無關係の人にさへ、この意味で話して聞かせるほどこの考へが深く根を張つてゐる。ついこの間の事だが、クリーブリコフといつて、スタニスラーフ章を頸に懸けた六十二歳の老官吏が、誰に呼ばれもしないのに、のこ／＼やつて來て、自分はまる三箇月間うたがひもなく、萬國勞働協會の影響を受けてゐたと、さも仔細ありげな聲で言ひ出した。人々は、彼の年齢や功績に深い尊敬を拂つてはゐたものの、もつとよく得心の行くやうに話して貰はると、わざ／＼招待したところ、彼は、『自分の全感覺で直覺した』とよりほか、何の證據も提出する事が出来なかつたが、とにかく斷然最初の宣言を變へないので、人々もそれ以上たつて追窮しようとしなかつた。

繰返して言ふが、初めからこの騒ぎを遠ざかつて、まるで鏡でも下したやうに家へ閉籠つてゐる、少數の用心ぶかい一團の人々が残つてゐた。しかしどんな鏡前だつて、自然律に抵抗の出來よう筈がない。どんなに用心ぶかい家庭の中にも、やはり同じやうに女の子が大きくなつて、舞踏の一つもしなければならなくなる。で、到頭かういふ人たちも、結局、婦人家庭教師のために寄附することになつた。しかも、舞踏會は思切つて華々しい、世にも類のないもの、と豫想されてゐた。まるで奇蹟のやうな噂が行はれた。柄付眼鏡を持つた來遊の公爵、左の肩にリボンを附

けた十人の幹事(みんな若い踊り手なのである)、彼得堡にゐるすべてを操つてゐる幾たりかの人、かういふ事が人々の話題に上つた。そればかりか、カルマジノフが上り高をふやすために、この縣獨特の婦人家庭教師の服装をして『メルシー』を讀む事に同意したのだ、全部假装づくめの文學四班舞踏といふものがあつて、一つ／＼の假装がそれ／＼文學上の流派を現すだの、まだその上に何かしら『露西亞の高潔な思想』とか云ふものが、同じく假装で踊るだのといふ噂があつた。これなどは全く珍と言はざるを得ない。どうして申込まずにゐられよう。人々は争つて申込んだ。

## 二

祭の一日は、番組に依ると、二部に分れてゐた。つまり、正午から四時までが文學部で、十時から以後は、夜通し舞踏會といふ事になつてゐた。しかし、この手配りその物の中に、混亂の原因が藏されてゐたのである。第一に、文學部が終るや否や、晝餐會が開かれるといふ噂が、最初から公衆の間に固く根を張つてしまつたのである。それどころか、文學部の終らない中に、特にこれがために定められた休憩時間に晝食が開かれる……勿論、それは番組の一部となつてゐて、料金不要、しかも三鞭酒さへ附く、といふ噂が立つたのである。三留といふ高價な切符代も、餘計にこの噂を助長したのだ。

『でなかつたら、たゞで寄附する事になつてしまふぢやないか? 會は一晝夜ぶつ通しの豫定

なんだから、食はしてくれるのが當りまへだ。でなけりや、みんな腹をへらしてしまはあ。』とこんな風に町の人は考へた。

實のところ、これは當のユリヤ夫人が、例の輕はずみな性質のために、自分からかういふ不利な噂のもとを作つたのである。一月ばかり前、まだこの偉大な計畫を思ひついたばかりのところ、嬉しさの餘り夢中になつてしまつて、會ふ人ごとに慈善會の事を喋つた。そして、當日は色々な意味の祝杯が擧げられる、といふやうな事まで喋り散らしたばかりか、ある首都の新聞にさへそれを報道したのである。當時、夫人は何よりもこの祝杯が嬉しくて、自分でその音頭が取りたくて堪らなかつたので、慈善會の日を待設けてゐる間に、いろいろな祝杯の數を考へ出したものである。これらの祝杯は同志の旗幟を鮮明にして（一體まあどんな旗幟だらう？ わたしは請合つて置くが、この哀れな婦人は何一つ考へつけなかつたに相違ない）、首都の各新聞の通信欄に掲載され、中央政府の人々を感喜讚嘆させ、驚異と模倣を呼起しつゝ、ほかの各縣へも擴つて行く筈であつた。しかし、祝杯のためには三鞭酒が必要である。ところで、三鞭酒は空腹で飲む譯に行かないから、従つて、食卓と晝食の必要が生じるのであつた。その後、夫人の運動で委員會が組織され、眞面目に仕事に著手したとき、もし宴會など空想してゐたら、たとへ上々のあがり高が得られるとしても、家庭教師に贈る金は幾らも残らないといふ事が、さつそく明白に證明されたのである。かういふ譯でこの問題の解決法は二つとなつた。盛んな饗宴を張つて祝杯を擧げ、家庭教師連には九十留かそこいらの金を贈るか、それとも莫大な寄附金を募つて、會の方はほんの

型ばかりのものにするか？ 尤も、これは委員會の方でちよつと夫人を脅して見ただけで、更に第三の折衷的な賢い方法を工夫した。つまり、饗宴はすべての點に於て相當なものにして、たゞ三鞭酒だけ抜きにすれば、九十留どころでなく、かなり纏つた金が残る事になる、とかういふのであつた。しかし、ユリヤ夫人は賛成しなかつた。彼女は生れつき町人根性から出た中庸を卑しんでゐた。で、彼女は即座にかう決めてしまつた——もし原案を實現する事が出来なければ、直ちに全身を擧げて、反對の極に投げなければならぬ。つまり、他縣でも羨むくらゐ、莫大な金を集めなければならぬ——

『世間の人だつて、それくらゐな事は理解してくれなくちやありません。』と彼女は委員會の席上で、熱烈火の如き調子で論結した。『一般人類の目的を達するといふ事は、刹那的肉體的快樂よりも、遙かに高尚なものでございます。今度の催しも、事實、偉大な理想の宣傳に過ぎないのですから、もしあんなばか／＼しい舞踏會なんでものが、なくて済まされないといふ事でしたら、たゞほんの申譯に、思ひ切つてつましい獨逸式の舞踏會で、辛抱しなくちやありません！』といつたやうな勢で、急に夫人は舞踏會を、不倶戴天の仇のやうに憎み始めた。

しかし、人々はやつとの事で夫人を押し宥めた。例の『文學四班舞踏』や、その他の藝術的な催しも、そのとき考へついて、これをもつて肉體的快樂に代へるやう、夫人に勧めたのである。カルマジノフがいよ／＼『メルシイ』の朗讀を承諾したのも、やはりその時なのである（それまでは何とかかとか、煮切らぬ事を言つてじらししてゐた）。さうすれば、たしなみのない町の人

達の頭に集つてゐる、食物うんぬんの考へも、自然消滅する道理である。かういふわけで、この催しはともかくにも、再び堂々たる華々しいものとなつた。尤も、以前とは少し意味が違つては来た。しかし、あまり浮世ばなれがしてしまつてはと云ふので、舞踏會の始めに檸檬入りの茶と圓い菓子を出し、それから巴且香水と檸檬水、さうして最後に、アイスクリームさへ出さうといふ事に決めた。が、それきりなのである。

ところで、いつ如何なる場所でも、必ず空腹——殊に喉の渴きを感じるやうな連中のためには、一番はじめの方に食堂を設けて、プローホルイチ（倶楽部の料理番頭）を、その掛りにする事とした彼は委員會の嚴重な監視の下に、何品でも註文のものを薦めて構はないけれど、たゞ別に代金を拂はねばならない。そのため、特に廣間の戸口に『食堂は番組の中に含まず』といふ張札をして置くことに決めた。けれど食堂は、カルマジノフが『メルシイ』朗讀を承諾した白廣間から、五つ間へだてて置く筈になつてゐたにも拘らず、第一部の間は朗讀の邪魔にならないやうに、全然食堂を開かないことにした。この事件、即ち『メルシイ』の朗讀を、委員會の人々がむやみに重大視したのは、全く不思議なくらゐである。しかも、極めて實際的な人達すら、その例に洩れなかつた。少し詩的趣味を持つ人々に至つては、もう論外である。例へば、貴族團長夫人などはカルマジノフに向つて、自分は朗讀が濟むとすぐ白廣間の壁に、大理石の板を嵌めるやうに云ひつける。その板には金文字で『何年何月何日この處に於て、露西亞および歐洲の文豪が一代の筆を擱くに際して『メルシイ』を朗讀し、これに依つて當市の名士を代表とする露國公衆に、

第一回の告別を行ひたり』と記すつもりだ。すると、この文句はすぐ舞踏會の席で、つまり朗讀が終つて五時間の後に、一同の眼に觸れるのだと豫告した。わたしは確實に知つてゐるが、カルマジノフが誰よりも先に立つて、自分の朗讀中はどうな事があらうとも、食堂を開かないやうにと主張した——尤も、二三の委員から、さういふ事は土地の風習に合はぬと、注意が出たのであるけれど。

かういふ事情になつてゐたにも拘らず、町ぢうのものはみんな依然として、ブルタサール式の饗宴——つまり、無料で委員會から提供する食堂を信じてゐた。全く最後の一時間まで、信じてゐたのである。若い令嬢たちまで菓子やジャムや、それから何かしら聞いた事もないやうなもの、山ほど出るやうに空想してゐた。人々は集り金が素晴らしい高に上つた事も、町ぢう大騒ぎしてゐる事も、郡部の方からさへ出かけるものがあつて、切符が足りないくらゐだといふ事も、よく承知してゐた。それからまた一定の入場料のほかに、相當な寄附があつた事も、一般に知れ渡つてゐた。例へばブルグラー夫人などは、切符代として三百ルーブリ拂つた上に、廣間の裝飾用と言つて、邸内の温室にある花をすつかり寄附して了つた。貴族團長夫人は會場として自分の家と、それに要する燈を提供するし、倶楽部は樂隊と召使を融通した上、終日プロホールイッチを譲る事にした。

まだそのほかに、金額はさまで大きくないが、様々な寄附があつたので、三留の切符を二留に減じよう、といふ考へさへ浮かんだほどである。實際、委員會の方でも初めの中は、三留の入場



料では令嬢たちがやつて来まいと心配して、何か家族切符とでもいふやうなものを拵へようではないか、といふ提案が生じたくらゐであつた。つまり一つの家族は、その中の令嬢一人だけの分を拂へば、その家庭に属するほかの令嬢たちは、たとへ十人ゐても、無料で入場できるやうにしよう、といふのである。しかし、すべての心配は杞憂に終つて、かへて令嬢たちが主な入場者であつた。ごく／＼貧乏な小役人でさへ、娘を連れてやつて来た。もし娘が居なかつたら、彼ら自身この催に申込みをしようなどは、夢にも考へなかつたに相違ない、それは火を賭るよりも明らか事だつた。ごく詰らない一人の書記などは、七人の娘をみんな連れて来た（もちろん細君は勘定に入れない）。しかもその上に、姪も一緒に引張つて来たが、この連中が一人々々、三留の入場券を手にしてゐたものである。

かういふあり様であるから、町ぢうがどんな騒ぎだつたか、想像するに難くない。祭が二部に分れてゐたから、婦人たちの著物も朗讀の時の朝衣モイニングドレスと、舞踏の時の夜會服と、二通り必要になつて来る。この一つだけでもたいい見當がつく。これは後で分つた事だが、中流階級の多數はこの日の用意に、家庭の肌衣から、敷布、布團の類に至るまで、何もかも町の猶太人どもに質入れし兼ねない勢であつた。またこの猶太人の連中が、まるでわざと狙つたやうに、三年ばかり前から市中に地盤を固めて行つて、なほも時と共に、いよく盛んに入込んで来るのであつた。役人どもは大方みんな月給を前借りするし、地主の中には、なくてはならない家畜を賣飛ばすものもあつた。それもこれも、娘をお姫様のやうに仕立てて行つて、たれにも劣を取らせまいがため

だつた。今度の衣裳の派手さは、こゝらあたりで今までに、例のないやうなものであつた。

もう二週間も前から、町は家庭内の悶着ばなしに充たされて了つた。しかもさういふ噂話は、すぐ町の金棒引によつて、ユリヤ夫人の邸へ傳はつて行くのであつた。それから、家庭内の紛擾を描いたカリカチュアも、人々の間を轉々し始めた。現にわたしもユリヤ夫人のアルバムの中で、かういふ風の畫を何枚か見たくらゐである。かういふ事がすつかり何もかも、逸話の出處の方へ知れてしまつたので、近ごろ町の各家庭内に募つて来た、ユリヤ夫人に對する烈しい憎悪も、こんな所に起因してゐるのではないかと思はれる。今ではみんなが夫人を散々に罵倒して、當時を思ひ出しては齒噛みしてゐる。とはいへ、もし委員會が何か公衆の氣に入らぬ事をしたり、舞踏會を疎かにするやうな事があつたら、それこそ未曾有の不平が爆發するに相違ない、それは前からちやんと見え透いてゐた。かういふ譯で、誰もかれもが心の中で、何かの騒ぎを期待してゐた。實際、それほど期待されてゐたのだから、騒ぎは實際おこらずに済む筈がないのである。

正十二時に奏樂際が轟き出した。わたしは幹事の一人だつたので、つまり『リボンを著けた十二人の青年』の一人だつたので、この汚はしい記憶すべき日が、どういふ具合に始つたかといふ事を、自分の眼でちやんと見たのである。まづ尋常一様でない入口の混雜から始まつた。どういふ譯で、警察を始めとして皆の者が、こんな點をうつかりしてゐたのだらう？ わたしは何も本當の意味の公衆を非難するのではない。一家の父たる人々は、相當の官位を持つてゐるにも拘らず、權柄づくで入口に押寄せたり、ほかの者を壓附けたりしなかつたばかりか、かへつて、往來

に立つたまま、この町に珍しい群衆の犇めきを眺めて、當惑したやうな風だつたといふ話である。實際、群集はぎつしりと車寄せを取圍んで、たゞ入るといふのでなく、まるで突撃でもするやうな勢で、飛びかゝるのであつた。その間に、馬車は絶間なく寄せて来て、つひには全く道を塞いで了つた。

この記録を綴つてゐる今日では、わたしも正確な材料を握つてゐるから、敢て斷言するけれど、町で層の屑とされてゐるやくざ者が、幾人となく、リヤムシンやリプーチンの手引きで、切符なしに入込んだのである。ことによつたら、わたしと同じ幹事役を勤めてゐる連中の中にも、かういふ手引をしたものがあるかも知れない。少くも、郡部の方や何かからやつて来た、まるで見覚えも何もないやうな手合まで顔を出した。かういふ野蠻人どもは廣間へ入るや否や、一せいに（まるで教へられでもしたやうに）、食堂はどこだと聞くのであつた。食堂はないと聞くと、少しも遠慮なしに、この町で聞いた事もないやうな無作法千萬な調子で、悪口雑言を放ち始めた。尤も、さうした手合の中には、酔つ拂つたものもあつた。なかにはまるで野蠻人のやうに、今まで嘗て見たことのない華美な廣間に驚嘆して了つた。そして、入つて来た瞬間に鳴りを静めて、ぽかんと口を明けたまま、邊りを見廻すのであつた。

この宏大な白廣間は古い建築ながら、全く壯麗なものであつた。まづ素晴らしい大きさで、窓は上下二列になつてをり、昔風にさまざまの模様を描いて、それに黄金をちりばめた天井を頂き、合唱隊席の設けもあり、窓と窓の間には鏡を張り、白地に赤の帷布を垂れ、大理石の彫像を並べ

（どんな作にもせよ、とにかく彫像である）、白地に金を施した柁に赤の天鵞絨を張つた、古い奈翁時代のどつしりした家具類を配置してある。この日は廣間の一端に、朗讀を行ふべき文學者たちの爲めに、ちやんと演壇がしつらへてあつた。そして廣間全體には、まるで劇場の平土間のやうに、椅子が一面に並べてあつて、その間々には聴衆のために、幾つかの通路が設けてあつた。しかし最初しばらくの驚嘆の後、思切つて意味のない質問や意見が聞え始めた。

『我々は朗讀なんか聞きたくない、と言ふかも知れないぞ……我々は金を拂つたんだ……世間の者をづう／＼しく瞞しやがつたのだ……主人役は我々なんだ、レムブケーや何かぢやありませんか！……』

手短かに言へば、この連中を會場へ入れたのは、たゞこんな無しつげな言葉を吐かせるためではないか、と思はれるくらゐであつた。特に今でも憶えてゐるが、このとき一場の衝突が起つて、昨日の朝ユリヤ夫人の客間に來てゐた、例の高い襟をつけた、木造りの人形みたいな來遊の公爵が、ぐつと器量を上げた。この人もユリヤ夫人の切なる乞に依つて、左の肩にリボンを着けて、幹事輔佐の役を勤める事を承諾したのだが、この啞のやうに口數の少い、彈條じかけの人形然とした男が、喋る方とはかくとして、一種獨特の働きをする能力を持つてゐることが分つた。ほかでもない、一人のあばた面をした、見上げるやうに大きい退職大尉が、後から續く一群の有象無象を恃んで、食堂へはどう行つたらいいかと執拗く訊ねた時、公爵は鷹揚に巡査の方へ目くばせした。この合圖は猶豫なく實行された。酔拂つた大尉の悪口雑言には耳も借さず、巡査は彼を

廣間の外へ引摺り出してしまつた。さうかうしてゐる間に、やつと『本當の』聴衆が顔を見せはじめた。彼らは長い三條の列を作つて、椅子の間に作られた三つの通路を、ぞろ／＼と動いて行つた。不穩な分子はだん／＼静まり始めたが、しかし群衆の顔には（一番とり澄ました連中の間にさへ）、不滿げな意外らしい表情が現れてゐた。婦人たちの中には、もうすっかり仰天してゐる者もあつた。

遂に一同は席に着いた。奏樂の音もやんだ。人々は鼻をかんだり、あたりを見廻したりしながら、餘りなと思はれるくらゐ、仰々しい顔つきで待設け始めた——これはどんな場合でも、よくない兆候なのである。しかし、レムブケー一家の者はまだ來なかつた。絹、天鵝絨、金剛石などが四方から燃え輝いて、あたりの空中にはえならぬ香りが漂つてゐた。男はありつたけの勳章を付けてゐるし、老人たちは大禮服さへ着込んでゐる。やつと貴族團長夫人が、リーザと一緒にやつて來た。この朝ほどリーザが目ばゆきばかり麗やかに見えた事は、今まで覺えないほどである。またこれほど華華な衣裳を著飾つて來たのも、これまでについてぞない事だ。髪は豊かな房をなして蛻り、眼はきら／＼と輝き、顔には微笑が照りはえてゐた。彼女は疑ひもなく一同を驚嘆させたらしい。人々は彼女を見廻したり、囁合つたりした。そして、『あれは目でスタヴローギンを捜してゐるのだ』と言合つたが、スタヴローギンも、ブルグラー夫人も、姿を見せなかつた。わたしはそのとき、彼女の顔の表情が分らなかつた。どういふわけであんなに幸福と、悦びと、精力とが、この顔に溢れてゐるのだらう？ わたしは昨日の出來事を思合せて、なにがなにやら分らな

くなつて了つた。

とは言へ、レムブケーは依然として顔を出さなかつた。これからして既に失策なのである。これは後で聞いた事だが、ユリヤ夫人はいよ／＼といふ間際まで、ピートルを待通したのださうである。自分で自覺こそしてゐなかつたけれど、もうこの頃夫人はこの人なしでは、一步も足を踏み出せなくなつたのである。ちやうど序でに言つて置くが、ピートルは前日最後の委員會があつた時、幹事のリボンを辭退して、ひどく涙の出るほど夫人を失望させた。そして驚いた事は（この夫人の驚きは後に狼狽と代つた）、彼はこの朝すつかり姿を晦ましてしまつて、文學會の間ぢう顔を出さなかつた。かういふ譯でこの日の晩まで、誰ひとり彼の姿を見た者がないのである。この事をさき廻りして斷つて置く。遂に公衆は明らかに焦燥の色を見せ始めた。演壇の方へもやはり上つて來る人はなかつた。うしろの列では、まるで芝居へでも來たやうに拍手を始めた。老人や夫人たちは眉を顰めて、『レムブケーは餘り勿體ぶり過ぎる』と呟いた。聴衆の中でも、人柄な連中の集つてゐる方面でさへ、事によつたら、本當にこの催しは立消えになるのかも知れない、もしかしたらレムブケーは、本當に氣がどうかしたのではないか、といつたやうな、馬鹿げ切つたひそ／＼話が始まつた。しかし仕合せと、遂にレムブケーが姿を現した。彼は妻の手を引いてゐた。實のところわたし自身も、非常に彼等の到着を氣づかつてゐたのである。けれど、これではかく／＼しい想像は自然に消滅して、事實が勝を占めた譯である。群集はほつと一息ついたやうな具合だつた。

レムブケー自身は、健康この上なしに見受けられた。わたしの憶えてゐる限りでは、みなもさう確信したらしい。多くの視線が、降るやうに彼の方へ注がれた。事態を闡明する便宜上、一言いひ添へて置くが、全體として町の上流社會には、レムブケーが何か特種な病氣に罹つてゐる、などと考へてゐる人は、非常に少數だつた。人々は彼の行爲を、全然ノーマルなものとして認めてゐたので、昨日の朝の廣場の出來事なども、かへつて賞讃の聲をもつて迎へたほどである。

『いや、實際はじめから、あんな風にやつた方がいゝのだ。』と上級官吏の連中は言つた。『普通はたいてい赴任の時には恐ろしい人道主義だが、結局あんな風のやり方で終るんだ、しかも、それが人道主義その物のためにも必要なのを、ご自分で氣のつかない人が多いんだからなあ。』  
 『あれはもう少し冷靜な態度でやる必要があつた。しかし、まだ著任早々の事だからね。』と事情に通じた人達はかう言つた。

それと同じくらゐ烈しい好奇の眼が、ユリヤ夫人の方へも向けられた。勿論、ある一つの點に關しては、何人と雖も説話者たるわたしに向つて、餘り精確な説明を要求する權利を持つてゐない筈だ。それは祕密である。婦人の一身に關した事である。しかし、たゞ一つわたしの知つてゐる事がある。ほかでもない、ゆうべ夫人はレムブケーの書齋へ入つて行つて、十二時過ぎるまで坐り込んでゐた。つまり、レムブケーは免され、慰められたのである。夫婦はすべての點で一致した。何もかも忘れられた。そして、話の終りにレムブケーが、突然をとゞひの晩の幕切れの一段

を思ひ出し、慄然として妻の前に跪づいたとき、夫人の美しい手と、それに續いて美しい口が、古の騎士のやうに優雅な、とは云へ、感激に心弱つた男の熱した懺悔を、押し止めてしまつた。

人々は彼女の顔に幸福の色を認めた。彼女は見事な衣裳をつけ、はれ／＼しい面もちで、しづと進んだ。今や夫人は、希望の頂上に立つてゐるかのやうであつた。自分の政策の目的であり榮冠である慈善會が、遂に實現されたではないか。演壇のすぐ手前にある自席まで辿りつくと、レムブケー夫婦は小腰を屈めて答禮した。二人は忽ち人垣に圍まれた。貴族團長夫人は立上つて、彼らを出迎へようとした……が、その時一ついやな手違ひが生じた。奏樂隊が出し抜けに祝賀曲を轟かし始めた。それは決して進行曲や何かでなく、全く食堂向きの祝賀曲であつた。よく町の俱樂部で、一同が晴れの食卓に向つて、誰かの健康を祝しながら、乾杯を唱へるときなどに使ふやつである。わたしも今ではよく知つてゐるが、これはリヤームシンが幹事といふ資格で、入り来る『レムブカー』夫婦に敬意を表するため、餘計な骨折りをしたとの事である。勿論、彼はよく知らなかつたからとか、または餘り一生懸命になり過ぎたからとか言つて、辯解する餘地があつたのだ……ところが、悲しいかな、わたしは當時すこしも知らずにゐたが、彼等はもう辯解の事など、まるで心配してゐなかつた。この一日で何もかも片を附けようと、考へてゐたのである。けれど、祝賀曲ばかりでは濟まなかつた。聴衆のいま／＼しさうな怪訝の色と薄笑ひにつれて、突然ホールの方と合唱席で、萬歳の聲が響き渡つた。やはりレムブケーに敬意を表するものらしい。それは餘り多人數の聲ではなかつたが、正直に言ふと、ちよつと暫く鳴りも止まなかつ

た。ユリヤ夫人はかつとなつて、その目はぎら／＼輝き出した。レムブケーは自席に近く立止つて、聲のする方へ振向きながら、物々しく嚴めしい態度で、廣間を見廻した……が、人々は急いで彼を席に著かせた。彼の顔にはまたしても、昨日の朝夫人の客間でスチエパン氏の傍へ近寄る前に、ちつと相手の顔を見つめてゐた時と同じやうな、例の危険性を帯びた微笑が浮かんでゐた。わたしはそれに気がついて、心もとなく思つた。實際、いま彼の顔は、何かしら不吉な表情があるやうに思はれた。何よりもいけないのは、その表情がいくぶん滑稽じみてゐた事である。——つまり、たゞ妻の高尙な目的に副はんがために、一身を犠牲に捧げようとしてゐる人の表情なのであつた……ユリヤ夫人は手早くわたしを傍へさし招いて、これからすぐカルマジノフの所へ走つて行つて、早く始めるやうに頼んでくれと囁いた。で、わたしがやつと體を轉じようとする間もなく、またもや新しい醜事件が始つた。しかも、前よりもつと／＼酷いのである。

演壇の上に——今まで一同の視線と、一同の期待が集中されてゐた空しい演壇の上に——今まではたゞ小さな卓と、その前に置かれた椅子と、卓に載せられた銀盆上の水呑コップのほかには、何一つ目に入るものなかつた空しい演壇の上に、とつぜん燕尾服に白い頸飾を締めた、レビヤードキン大尉の魁偉な姿がちらと映つた。わたしはもう仰天して了つて、我とわが目を信ずる事が出来ないほどだつた。大尉はちよつと鼻白んだらしく、演壇の奥深いところに立止つた。とつぜん聴衆の中から、

『レビヤードキン！ 君は一體？』といふ叫聲が聞えた。

大尉の愚かしい眞赤な顔は（彼はすっかり酔食らつてゐた）、この叫びを聞くと齊しく、鈍さうな薄笑ひがぱつと擴つたやうに思はれた。彼は手を舉げて額を押拭ふと、もしや／＼した頭を一振した。そして、もうどんなことだつてやつて見せるぞ、と決心したやうに、づか／＼と二歩まへへ踏出した——が、急にぶつと噴出して了つた。餘り大きくはないが、引伸したやうな、高く低く揺れるやうな、さも幸福げな笑ひ聲を立てながら、肥満した體をゆり立てて、眼を細めるのであつた。この光景を見て、殆ど聴衆の大半が笑ひ出した。二十人ばかりの者は、手さへ叩いた。聴衆の中でも眞面目な人々は、浮かぬ顔つきで互に目と目を見合せてゐた。尤も、これはほんの三十秒たらずの間だつた。突然、例の幹事のリボンを附けたリプーチンが、二人の小使を連れて演壇へ駈上つた。小使が用心ぶかく大尉の兩手を取ると、リプーチンは何やらその耳に囁いた。大尉は眉を顰めながら、

「ふん、さういふ譯ならどうも。」と呟いて片手を振ると、幅の廣い背中を聴衆の方へ向け、三人の者に伴はれて姿を隠した。しかし、すぐにまたリプーチンは、演壇へ飛上つた。彼の顔には、思切つて甘つたるい微笑が浮かんでゐた。（一體、いつもの彼の笑ひ方は、ふつう砂糖酔みみたいな感じのするものだつた。）手には一葉の書簡紙を持つてゐた。小刻みな忙しい足どりで、彼は演壇の端へ進み出た。

「諸君」と彼は聴衆にかう呼びかけた。「ちよつとした不注意のために、滑稽な手違ひが生じましたが、それも既に片づいてしまひました。ところで、わたくしはこの土地に於ける詩作家の

一人から、極めて懇切丁寧なる依頼を受けまして、成功の希望を抱きながら、その任を引受けたのであります……それは外形こそなんでありませうけれど……人道的な高尚な目的……つまり本縣に於ける教育のある、貧しい少女たちの涙を拭うてやらうといふ、われ／＼一同をこゝに結束させたと同じ目的を、深く心にしめたこの紳士は、いや、その……この土地の詩人は……なるべく名を出したくないといふ、平素の希望にも拘らず……この舞踏會の始めに……いや、その、朗讀會の始めに當つて、自作の詩が朗讀されるのを見たいと、熱望してをる次第であります。尤も、この詩は番外で、プログラムに入つてはをりませんが……なぜと言つて、手に入つてから、まだやつと三十分ぐらゐにしかならんからで……しかし我々は（一體われ／＼とは誰の事だらう？）とにかく、わたしはこの途切れ／＼な、覺束ない演説を、一語々々そのまゝに記して置かう、驚くべき快活と同様に驚くべき無邪氣な感情を結合した點に於て、この詩の朗讀も或ひは妙かも知れんと思つたのであります。もちろん眞面目な作品としてでなく、たゞこの盛會にふさはしいある物として……殊に中の數行に至りましては……かういふ譯で、敬愛すべき公衆諸君のお許しを乞はう、と思つた次第なのであります。

「讀み給へ！」廣間の向うの端で、一人の聲がかう怒鳴つた。

「では、讀むのでございますか？」

「讀み給へ、讀み給へ！」といふ大勢の聲が響いた。

「それでは、公衆諸君のお許しを得て、讀み上げる事と致しませう。」相變らず例の甘つたる微笑を浮かべたまゝ、リプーチンはまたもや口をひん曲げた。

彼はそれでも、何となく決して兼ねた風であつた。わたしの見たところでは、わく／＼してゐるやうにさへ思はれた。かういふ連中は、思切つて傍若無人な振舞をするくせに、やはりどうかすると、何かに躓く事があるものだ。尤も、神學生だつたら躓く事はないだらうが、リプーチンは何と言つても、舊社會に屬する人間だつた。

「わたしはちよつと斷つて置きますが、いや、ちよつとお斷りをしときますが、これはよく祝祭などに當てて書かれてをつた以前の頌歌のやうなものではありません。これは殆どまあ、狂歌と言つたやうなものであります。しかし、遊び好きな心持と結び合つた、眞摯なる精神もあれば、最も現實的な眞理も含まれてをるのであります。」

「讀め、讀め！」

彼は紙片を擲げた。無論、誰ひとり彼を止める暇がなかつた。それに、彼は幹事の徽章を付けて現れたのである。彼は聲高らかに朗讀を始めた。

祖國なる婦人家庭教師へ、祭の庭にて、詩人より。

ご機嫌よろしう家庭教師さん

うんと騒いでお祝ひなされ

退歩主義者かジョルジ・サンドか

何でも構はぬお浮かれなされ!

「あゝ、これはレビヤードキンだ! レビヤードキンの仕事に相違ない!」といふ幾たりかの聲が聞えた。

どつと笑ひ聲が起つた。人数は少かつたけれど、拍手の音さへ聞えた。

涙つたらしの子供らに

佛蘭西のいろはを教へちやをれど

誘ふ水ありや寺男にさへも

色目つかふも厭やせぬ

「萬歳、萬歳!」

とは言ふものの、大改革の今の世にや

寺男さへ貰うちやくれぬ

錢が要ります、お嬢さん、それが駄目なら

やはりいろはと首つ引き

「その通り、その通り、なるほどこれは現實的だ、金がなくちや二進も三進も行きやしない!」

ところが今日は酒もり半分

わし等がお金を集めて上げた

ダンスしながら持參の金を

こゝの廣間で贈りませう

退歩主義者かジョルジ・サンドか

何でも構はぬお浮かれなされ!

お前は持參金つきの

家庭教師ぢやないかいな

何に遠慮があるものか

さあさ祝うた祝うた!

正直に言ふと、わたしは自分の耳を信じてることが出来なかつた。そこにはたとへ無智をもつて辯明するとも、到底リプーチンを赦す事の出来ないやうな、見え透いたづら／＼しい企らみがあつた。目的とするところは、少くもわたしに取つて、極めて明白だつた。まるで誰もかれもが我さきにと、混亂を醸し出さうとしてゐるやうであつた。この馬鹿げ切つた詩の幾聯かは(例へば、

一番しまひの一聯の如き)、どんな無智の輩と雖も、黙過する事の出来ない性質のものだつた。リプーチン自身も、かういふ殊勳は樹てて見たものの、自分一人であんまり責任を負ひ過ぎたな、と感じたらしく、自分で自分の無鐵砲に臆氣おそげついて、演壇を去る事も出来ず、まだ何か言ひ足したさうなに立竦んでゐた。きつと何かもつと違つた結果を豫想してゐたのだらう。ところが、朗讀の間ぢう喝采してゐた一團の無頼漢でさへ、やはり同様に臆氣おそげついたものらしく、急にしんと静まり返つて了つた。何よりもばか／＼しいのは、彼らの多數がこの朗讀を、夢中になつて歓迎した事である。つまり、下らない落首だなどは毛頭かんがへないで、婦人家庭教師に關する真正銘の現實的眞理、語を變へて言へば、立派な傾向詩と合點したのである。けれど、餘りと言へば餘りな、この詩の無しつけない調子は、遂にかういふ連中さへひやりとさせた。

一般聽衆はどうかと言ふに、彼らは氣色きしきを悪くするのを通り越して、目に見えて侮辱を感じたらしかつた。わたしはこの時の印象を傳へるのに、決して過たないつもりである。ユリヤ夫人は後になつて、もう一分間あのまゝで過ぎたら、氣絶して倒れたに相違ないと語つた。中でも、取分け地位の高い一人の老人は、老夫人を扶け起して、人々の不安げな視線に送られながら、二人ともさつさと廣間ひろまを出て了つた。或ひは、ほかに幾たりかの人、この例に倣つたかも知れないが、丁度よりよく、この瞬間に當のカルマジノフが、燕尾服に白い頸飾ちびりをしめ、ノートを手にして、演壇へ姿を現した。ユリヤ夫人は、まるで救ひ主か何ぞのやうに、歡喜に溢れた目をその方へ向けた……けれど、わたしはもう樂屋の方へ入つてゐた。リプーチンに話がしたかつたので

ある。

「君あれはわざとしたんでせう！」憤懣の餘り彼の手を掴みながら、わたしはいきなりかう言つた。

「どうして、どうして！ 思ひもそめないこつてすよ」彼はさつそく嘘をつき出した。そして、さも不仕合せな人間らしい表情をしながら、體をくね／＼させるのであつた。「あの詩は、たつた今もつて来たばかりなので、僕はたゞほんの座興ざきやうによからうと思つて……」

「君はまるでそんな事を思やしなかつたのです。一たい君はこの愚にも附かないやくざな詩を、罪のない座興と思ふんですか？」

「え／＼、さう思ひますよ。」

「君はなんの事はない、たゞ嘘を吐いてるんです。それにこの詩は、決してたつた今もつて来たばかりぢやありません。これは君が自分で、レビヤードキンと一緒に作つたのですよ。事によつたら、もう昨日あたり出来たのかも知れない。つまり、見苦しい騒ぎが起したかつたんだ。最後の一聯は確かに君の作です。寺男の條じやうもやはりさうです。一體あの男はどういふ譯で、燕尾服なぞ著込んで出たんです？ つまり、あの男に朗讀させようといふ、君たちの狂言なのです。たゞあの男がぐ／＼に酔拂つたもんだから……」

リプーチンは冷たい毒のある目つきでわたしを見つめた。

「一體それが君にどういふ關係があるんです？」妙に落ちつき拂つて、彼は突然かう聞いた。



「どういふ関係がある？ 君だつてやはりこのリボンを着けてるんでせう……ピョートル君はどこにゐるんです？」

「知りません。どこかその邊にゐるでせうよ。一たい何用です？」

「ほかぢやありませんよ、僕は今こそ何もかも、すっかり見え透いて來ました。これはつまり、みんなが申合はせて、今日の催しにけちをつけるために、ユリヤ夫人を陥れる陰謀に相違ないです……」

リプーチンはいま一度わたしを尻目に懸けた。

「それが君に取つてどうだと言んです？」彼はにたりと笑つて、肩を竦めると、そのまゝわきの方へ行つてしまつた。

わたしはまるで冷水でも浴せられたやうな氣がした。わたしの疑惑は悉く事實となつて現れたのである。あゝ、それだのにわたしは、どうか思違ひであれかしと、祈つてゐたのだ！ 一體どうしたらいゝだらう？ ステュパン氏に相談しようかと思つたが、彼は姿見の前に立つて、色々な笑ひ方の研究をしながら、ノートの上にある紙きれを、しつきりなしに覗き込んでゐた。彼は今すぐカルマジーノフの後で、演壇に上らなければならぬので、もうわたしと話などしてゐる餘裕がなかつた。では、ユリヤ夫人の所へ駆けつけたものだらうか？ しかし夫人に告げるには、まだ時期が早かつた、彼女の病氣を癒すには——自分はみんなの者に『取巻かれて』ゐる、みんな自分に對して『狂信的な信服を示して』ゐるといふ迷ひを醒すには、もつと／＼酷い目に合は

なくてはならないのだ。彼女は到底わたしの言葉を信じないで、わたしを妄想狂だと思ふに違ひない。それに夫人だつて、どうとも仕様がなはないではないか？ 『えゝ、まゝよ』とわたしは考へた。『全くのところ、俺にどういふ関係があるんだ。いよ／＼おつ始つたら、リボンを外して家へ歸るまでだ。』わたしはこのとき本當に『いよ／＼おつ始つたら』と言つた。わたしはそれを覺えてゐる。

が、とにかくカルマジーノフの朗讀を聞きに、行かなければならない。最後に樂屋を振返つて見たとき、用もない人達がかなり大勢、出たり入つたり、うろ／＼してゐるのに氣がついた。中には女さへ交つてゐる。この『樂屋』といふのは、幕で嚴重に仕切られた、かなり狭くなるしい場所で、うしろの方は一筋の廊下に依つて、ほかの部屋々々へ通じて居る。そこで講演者が番を待つ事になつてゐた。

しかし、このとき特にわたしの注意を惹いたのは、ステュパン氏の次に講演する筈になつてゐる人だつた。それはやはり大學教授といつたやうな人で（わたしは今だにこの人がどういふ人物なのか、はつきり知らない）、かつて學生間に騷擾のあつた時、進んである學校を退いたが、こんど何用があつたか知らないが、つい二三日前の町へやつて來たのである。この人も同じくユリヤ夫人に紹介されたが、夫人はまるで神様のやうに彼を迎へた。今ではわたしもよく知つてゐるが、彼は朗讀會の前にたつた一晚、夫人の所へ出かけたばかりである。しかも、一晚ぢやむつつりと黙り込んで、ユリヤ夫人を取巻く一座の諧謔や、全體の調子に對して、うさん臭い薄笑ひを

洩してゐた。その高慢げな、と同時に、臆病なほど自尊心の強さうな様子は、人々に不快な印象を與へた。こんど彼に朗讀を依頼したのは、ユリヤ夫人自身の所望なのであつた。

いま彼はスチエパン氏と同様に、部屋の中を隅から隅へと歩き廻りながら、何やら口の中でぼそぼそ呟いてゐたが、鏡を見ないで、ちつと足もとを見つめてゐた。彼はしよつちう貪婪な薄笑ひを浮かべてゐたが、笑方の研究などはしなかつた。この男にも話が出来ないのは、一見して明瞭だつた。見たところ四十恰好の年配で、背は低い方、頭は禿げて、頤には灰色がかつた髯を蓄へ、みなりはきちんとしてゐた。しかし、何よりも面白いのは、くるりと一廻りする度に、右の拳を振上げて、頭の上で空に一振りすると、誰か目に見えぬ敵を粉碎するやうに、勢込んでその手を打下す。この藝當をのべつ幕なしに繰返すのであつた。わたしは妙に息窒るやうな氣がしたので、急いでカルマジノフの講演を聴きに飛び出した。

## 三

廣間の方でも、何やら不穩な空氣が漲つてゐた。前もつてお断りして置くが、わたしは無論、天才の威光に跪拜するものである。しかし、どういふ譯でわが露西亞の天才諸氏は、その光榮ある生涯の終りに際して、時々ちつぽけな子供みたいな眞似をするのだらう？　むろん彼が文豪カルマジノフとして、五人の侍従を束にしたやうな氣取方で出たからつて、そんな事は別にどうから言ふものはない。しかし、たつた一つの文章で、この町のやうな聴衆を、一時間以上も惹き

つけることがどうして出来るものか！　全體として、わたしの觀察する所では、たとへどんな素晴らしい天才にもせよ、かういふ肩の凝らない公けの朗讀會では、二十分以上、無事に聴衆の注意を惹きつけることはまあ不可能である。尤も、この大天才の登壇が、極めて敬虔な態度で迎へられたのは事實である。ごく／＼やかまし屋の老人連でさへ、好意と興味の色をあらはした。婦人たちに至つては、ある程度まで歡喜の情さへ浮かべたほどである。とは言へ、拍手はあつさりしたもので、何だか不揃ひな、ちぐはぐな感じがした。しかし、カルマジノフ氏が口を利くまでは、うしろの方でも、別に突飛な半疊を入れるものは、一人もなかつた。とにかく、どこがどうといふほど、不都合な事は起らなかつた。たゞまあ、何となく得心の行兼ねるやうな色が見えただけである、わたしはもう前にもちよつと言つて置いたが、彼の聲は餘りきい／＼して、いくぶん女じみた感じさへする上に、きつ粹な貴族特有のしゆつ／＼といふやうな、洒落た發音がついて廻るのであつた。

彼がやつと二ことか三ことしか言はない中に、とつぜん誰か後列の方で、無遠慮にも大きな聲で笑ひ出した——多分それは、今まで上流社會の端くれも覗いた事のない、おまけに元來をかしがりに生れついた、立派な社交界を知らぬ馬鹿者に相違ない。しかし示威などの意味は、これから先もなかつた。それどころか、かへつてこの馬鹿者は、ほかの人からしつ／＼と制止されて、それきりぐうの音もたて得なかつた。ところがカルマジノフ氏は、氣取つた身振り聲色で言ひ出した。『自分は始めどうしても朗讀したくないと言つたのだ』(そんな事を廣告する必要がどこ

にある！』中でもある數行の如きは、眞に肺腑を衝いて迸り出たもので、殆ど言葉で形容できないほどである。それ故、かういふ神聖なものを公衆に晒すに忍びない（それでは何のために晒したのだ？）しかし、人々の乞ひ黙し難く、遂に斷然さらす事にした。その上、自分は永久に筆を擱いて、今後いかなる事があつても、書かない事に決心したから、つまり、これが自分に取つて絶筆となる譯である。また自分は今後どんな事があらうとも、公衆の面前で朗讀しないやうに誓つたから、即ちこの一文が公衆に向ふ最後の朗讀なのである』といふやうな事を、くどくどと述べ立てた。

けれどこんな事は、まあどうでもいゝのだ。誰だつて、作者の前置がどんなものかつてことは百も承知してゐる。尤も、ついでにちよつと言つて置くが、町の聽衆の教養の不十分な事や、後列の人々の氣短かな點などを考へたら、かういふ事もやはり影響しないとは言へない。實際、何か短い物語でも讀んで置いた方が、よくはなかつたらうか？もと彼がよく書いてゐたやうな小短篇などは、よしんば餘り磨き過ぎて厭味になつてゐるとは言へ、それでも時には機智に富んだものがあつた。さうしたら、何もかも埋合せが附いたに相違ないのだ。ところが、さうでない、まるでそんな事ぢやないのだ！長たらしいお説教が始つたのだ！おまけにその中には、一切合切みんな詰込れてゐるのだ！わたしはきつぱり斷言するが、この町の人ばかりでなく、首都の聽衆だつてうんざりして了ふに相違ない。まあ、假りに氣取つた役にも立たない世迷ひことが、印刷で三十頁も續くやうな文章を想像して見るがよい。おまけに、この人はまるで同情の餘りお

慈悲でもつて、高い處から見おろすやうな態度で讀んだのだから、聽衆に對して殆ど侮辱に當るくらゐだつた……

ところで主題は？……こいつがまた誰にだつて分りつこないのだ！それはまあ、言はば、いゝろんな印象や追憶の總締めめやうなものであつた。しかし、何の印象だらう？何の追憶だらう？——一同は朗讀の半ば頃まで、額に皺を寄せて、一生懸命に意味を掴まうとしたけれど、田舎者の悲しさで、何一つ呑込めなかつたので、後の半分はほんのお義理で聞いてゐるだけであつた。尤も、戀のことがたくさん書いてあつた。それはある婦人に對する天才の戀だが、正直なところ少々おちつきが悪かつた。わたしの見る所では、この文豪の小柄なづんぐりした姿に對して、最初の接吻の物語りは、どうもうつりが悪かつた……それにまた癢に觸るのは、この接吻の仕方が、一般人類のそれと違つてゐる事である。まづ邊りには必ず一面に、金雀枝が生えてゐなければならぬ（是非とも金雀枝か、あるひは植物學の本でも調べねばならぬやうな草である事を要する）。それから、空にはぜひ紫色の陰影が必要である。これなどは勿論、凡人どものかつて氣づかなかつたものだ。つまり、見てはゐたけれど、氣をつける事が出来なかつたのである。ところで、文豪は『それ見ろ、おれは一目でちゃんと見て取つて、お前たち馬鹿者のために、ごくくあり觸れたものとして、描いて見せてゐるのだ。』といつた風である。

この興味ある一對の男女が、根もとに座を占めた木は、必ず香橙か何かの色をしてゐなければならぬ。二人が坐つてゐるのは、獨逸のどこかである。とつぜん彼等は、闘ひの前夜のボムベイ



ウスかカッシウスを見て、歡喜の冷感が骨髓に滲入るやうな気がした。何か水精ニムフみたいなものが、藪の中で啼き出すと、突然グリニック(一七一四—八七年、獨の作曲家)が、葦の茂みでパイオリンを弾き始める。彼の奏した曲は *en toutes lettres* (すつかり、完全に) 名を呼びあげられたのだが、誰一人知つたものは無い。音楽辭典でも調べて見なければならぬ。やがて霧が渦巻き始めた。その舞ふこと舞ふこと、まるで霧といふよりは、數百萬の枕といつた方が、適切なくらゐる。と、不意に何もかも消えてしまつて、今度は冬の暖い上溶けの日に、文豪はヴォルガの河を櫓で渡つてゐる。この渡河に二頁半つひやしてあるが、それでもたうとう氷に明けた穴へ落つちて了ふ。天才は沈んで行く——そして遂に溺死して了ふ、と讀者諸君は思はれるかも知れないが、どうして、どうして、そんな事は夢にも考へてゐないのだ。それはたゞ、彼が水の底へ沈んで了つて、あぶくもがいてゐる時、不意に目の前へ一塊の水を浮かばせるためなのである。それは極めて小さな、豌豆くらゐの大きさだが、まるで「凍れる涙」とでも言ひたいほど、清らかに透過つてゐる。この一塊の水の中に獨逸——と言ふより、寧ろ獨逸の空が映つてゐるのだ。この映像の虹のやうな閃めきが、ある一滴の涙を思ひ起させたのである。それは——

『お前は憶えてゐるか、わたし達がエメラルド色をした木の下に坐つてゐると、お前は悦しげな聲で、「罪なんてものはありません！」と叫んだ。「さうだ、しかし、もしさうだとすれば、この世に正しき者もなくなる譯だ。」とわたしは涙のひまから答へた。と、この時お前の目から轉まび出た涙なのだ。二人は烈しく慟哭して、そのまゝ永久に別れて了つた。』

つまり、女はどこかの海岸へ、彼はある洞窟の中へと、別れて行つたのだ。で、いま彼は洞窟の下を一生懸命に下りて行く。莫斯科のスヘレワ塔の下あたりを、三年の間ひたすら下り續けてゐる。すると、不意に土の懐のたゞ中とおぼしき邊りで、彼は一つのともし火を見いだした。燈火の前には一人の隠者がゐる。隠者は祈禱を捧げてゐる。天才はさゝやかな格子窓へ近づいた。と、思ひがけなく吐息の聲が聞えた。讀者諸君はこれを隠者の吐息と思はれるか？ なんの、彼はそんな隠者などに少しも用はないのだ！ たゞ／＼この吐息が、三十七年前の彼女の最初の吐息を、思ひ出させたばかりなのだ。

『お前は憶えてゐるか、わたし達が獨逸で、瑠瑪色の木の下に坐つてゐると、お前はわたしにから言つた。「一體なんのために愛するのでせう？ ご覽なさい、邊りにはヅフラの花が咲いてゐます。あの花が咲いてゐる間は、わたしもあなたを愛します。けれど、あの花が咲かなくなつたら、わたしの愛も醒めるのです。」このとき再び霧が渦巻いて、ホフマンが現れた。水精ニムフがシヨパンの何かを笛に吹き始める。と、霧の中から忽然としてアックス・マルシウス(紀元前六三八—六四年、羅馬四世の帝王と)が月桂冠を戴いて、羅馬の空高く立現れた。歡喜の冷感がわたし達の背筋を走つて、二人は永久に別れた。』云々、云々。

手つ取り早く言ふと、わたしの話が間違つてゐるかも知れないし、またわたしにかういふ話をする能がないのかも知れないが、このお喋りの意味はこんな風のものでした。それに全體として、露西亞の天才の有する、高等地口ちぐちぐを弄びたがる性癖は、何といふ淺ましい事だらう！ 歐羅巴の

大哲學者も、碩學も、發明家も、奮闘家も、殉教者も——すべてかういふ重荷を背負つて努力してゐる人々も、わが露西亞の天才に取つては、全くわが家の臺所にうよくしてゐる料理人同様である。つまり彼が旦那さまなのだ。彼らは手に白頭巾を持つて、彼のもとへ伺候し、その命を待つてゐるやうな鹽梅である。勿論、彼は露西亞そのものをも、高慢ちきに冷笑してゐる。そして、歐羅巴の天才の面前で、あらゆる點に於ける露西亞の破産を宣告するのが、何より愉快な事に相違ないのだが、しかし彼自身に至つては、最早これら歐羅巴の天才さへ、眼下に見おろしてゐるのだ。そんなものは、みんな彼の地口の材料に過ぎない。彼が何か他人の思想を取つて、それに對する對句をくつ附ければ、もうちやんと地口が出来る譯なので。犯罪は存す——犯罪は存せず、眞理は存せず、正しきものは存せず、そのほか無神論、ダーギニズム、莫斯科の鐘……（しかし悲しいかな、彼はもう莫斯科の鐘を信じてゐないのだ）、羅馬、月桂冠……（しかし、彼は月桂冠さへ信じてゐないのだ）……それから、お定りのバイロン式憂愁、ハイネから借用して來た澁面、ペチョーリン（レルモントフ「現代の英雄」の主人公）式の味などを、ちよいと添へる——と、もう文豪の機械はしゆつくと、風を切つて動き出すのだ……

『しかし、とにかく褒め給へ、褒め給へ、僕はそれが大の好物なんだから。なに、一代の筆を擱くといふのは、たゞちよつとさう言つて見るだけさ。待つてゐ給へ。僕はまだ三百篇くらゐ書いて、君達を惱まして上げるよ。讀むのにあきくするくらゐね……』とでも言ひたさうであつた。

勿論、餘り無事には濟まなかつた。が、何よりもいけないのは、彼自身から騒ぎを起した點である。もうだいたい前から足をこそく言はせたり、鼻をかんだり、咳をしたりする聲が聞え出した。つまり、どんな文學者にもせよ、朗讀會で二十分以上、聴衆を引止めた時に起る現象が、ここでも始つたのである。けれど、天才はそんな事には少しも氣がつかかなかつた。彼は聴衆の方なぞ少しもお構ひなしに、相變らずしゆつとといふ音を立てたり、口の中でむにや／＼言つたりしてゐるので、到頭みんなは呆氣に取られて了つた。その時とつぜん後列の方で、たつた一人きりではあるが、大きな聲でかういふのが聞えた。

「まあ、何といふ馬鹿げた話だ！」

これは自然に口を迂り出た言葉で、そこに何ら示デモンストレーションの意味を含んでない事は、わたしの固く信ずるところである。たゞもうがつかりしたのだ。けれど、カルマジノフ氏は朗讀を止めて、嘲るやうに聴衆を一瞥した。そして、威嚴を傷つけられた侍從官といった態度で、突然しゆつしゆつと云ふ音を立てながら、口を切つた。

「諸君、諸君は大分わたしの朗讀に退屈されたやうですね？」

つまりかうして、彼の方から先に口を切つたのが悪かつたのだ。かうして答を求めるやうな言葉を發したために、かへつてゐる破戸漢どもに、大威張りで口を出す機會を與へたからである。もし彼がちつと押しこたへてゐたら、みんな無性に鼻をかんだかも知れないけれど、とにかく何とか無事に濟んだ筈なのである……事によつたら、彼は自分の間に對して、拍手を期待して

るたのかも知れない。ところが、拍手の音は響かないで、かへつてみんなびつくりしたやうに、小さくなつて静まり返つて了つた。

「あなたはアックス・マルシウスなんか、まるで見た事もないのだ、そんな事はみんな美文ですよ。」一人のいら／＼した惱ましげな聲が、だしぬけにかう響き渡つた。

「その通り、」といま一人の聲がすぐに引取つた。「今の世の中に、幻なんかありやしない、今は自然科学の時代だ。少し自然科学でも調べてご覧。」

「諸君、わたしはそんな抗議を受けようとは、夢にも思はなかつたですよ。」カルマジノフは恐ろしく面くらつてしまつた。

大天才はカルルスルーエにゐる間に、すつかり祖國の事に疎くなつてしまつたのである。

「今の時代に、世界が三匹の魚で支へられてるなんて、本で讀むのも恥かしいくらゐです。」不意に一人の娘が、甲高い聲でかう言ひ出した。「カルマジノフさん、あなたは洞穴の中へ入つて、隠者に出あつたりなんか、出来ない筈ぢやありませんか。それに今の世の中で、隠者の話なんかするものはありやしませんよ。」

「諸君、諸君がさう眞面目に解られるといふ事は、わたしの何よりも驚愕に堪へないところであります。尤も……尤も……全く無理はありません。何人と雖も、わたし以上に現實的リアリスチックな眞實を尊ぶ者はないのですから……」

彼は皮肉な微笑を浮かべてはゐたがそれでも酷く狼狽してゐた。その顔の表情はまるで、『わ

たしは、諸君の思つてをられるやうな人間ぢやありません。わたしは諸君の味方です。たゞわたしを讃めて下さい、もつと讃めて下さい、出来るだけ讃めて下さい。わたしはそれが大好きなんですから……』とでも言つてるやうだつた。

「諸君、」たうとうすつかり自尊心を毒されてしまつて、彼はかう叫んだ。「見受けたところ、わたしの詩は不幸にも、発表の場所を誤つたやうですな。それにわたし自身も出るべき場所を誤つたやうです。」

「からすを狙つて、かけすを打つたのかね。」と誰か馬鹿なやつが、大きな聲を一杯に張上げてかう怒鳴つた。きつと酔拂ひに相違ない。従つて、こんなやつにはぜん／＼注意を拂ふ必要はなかつたのだ。

尤も、不躰な笑ひ聲が響いたのは事實だ。

「かけすですつて？」とカルマジノフはすぐに抑へた。彼の聲は段々きい／＼して來た。

「からすとかけすの事に就ては、わたしはわざと口を噤む事にします。たとへ無邪氣なものとは言ひながら、そんな比較を口にするべく、餘りに聴衆を尊敬してゐます。よしやどのやうな種類の聴衆でも……しかし、わたしはかう思つてゐました……」

「しかし、君は餘り口が過ぎやしないかね。」と誰やら後列の方から喚いた。

「けれど、わたしは一代の筆を擱くに際して、讀者に別れを告げようとしてゐるのですから、とにかく聽いて頂けることと思つてゐました……」

「聴きます、聴きます、わたし達は聴きたいのです。」思切つて勇を鼓したやうな二三の聲が、やつと前列の方から響いて來た。

「読んで下さい、読んで下さい。」と幾たりかの有頂天になつた婦人連の聲が、それに合槌を打つた。たうとう拍手の音も起つたが、併しあつさりした勢のないものだつた。

カルマジノフはひん曲つたやうな微笑を浮かべて、椅子から體を擡げた。

「全くでございますよ、カルマジノフさん、わたし達はみんな名譽と思つてくるくらゐなのですから……」たうとう貴族團長夫人も、我慢し切れなくなつてかう言つた。

「カルマジノフさん、」廣間の奥まつた方から、出しぬけに若々しい聲で、かう呼びかけるものがあつた。それは郡部の小學校の若い教員で、この地方へはつい近ごろ來たばかりの、おとなしい人柄な青年だつた。彼は堂々と自席から立上つた。「カルマジノフさん、もしわたしが、今あなたの朗讀されたやうな、愛の幸福を惠まれたとしても、全くのところ、朗讀會の席で讀上げる文章の中へ、自分の戀物語を藏めようとは思ひませんね……」

彼は顔を眞赤にしてゐた。

「諸君、わたしはもう朗讀を了へたのです。もうこれでお了ひとして、退席します。しかし、ただ最後の六行だけ讀まして頂きます。」

『さらばわが友よ、讀者よ、さらば！』彼はさつそく原稿を手にして、讀み始めた。が、もう肘椅子には腰をおろさなかつた。『さらば讀者よ。とはいへ、余は強ひて友として、袂を別たう

と主張するものではない。實際、このうへ諸君を煩はす必要がどこにあらう。もし幾分たりとも、諸君の慰みになる事なら、余を罵られても厭はない、おゝ、余は甘じて罵られよう。けれど、もし我々が永久に忘合ふ事が出來れば、それがなにより一番である。そして、假りに讀者諸君が突然やさしい心になつて、わたしの前に膝を突いて、涙をこぼしながら、「書け、カルマジノフよ、おお、我らのために書け、祖國のために書け、子孫のために書け、月桂冠のために書け」と乞ふにしても、余は禮節を守つてその好意を謝しながらも、なほ諸君にかう答へるだらう。「いや、愛すべき祖國の同胞よ、我々はもう互に十分面倒を懸合つた、メルシイ、今はめい／＼思ひ思ひの道を取るべき時だ！メルシイ、メルシイ、メルシイ、メルシイ！」

カルマジノフは恭しく一揖すると、まるで茹つたやうに眞赤になつて、樂屋の中へ入つてしまつた。

「ふん、誰が膝を突いたりなんかするものか。何といふ馬鹿げた想像だらう。」

「實にどうも豪い自惚だね！」

「あれはたゞの諧謔だよ。」誰やら少し物の分るのが、かう訂正した。

「ちよつ、そんな諧謔なんぞ眞つ平ご免だよ。」

「だが、それにしてもあれは生意氣だよ、諸君。」

「けれど、まあ、とにかくやつと済んだよ。」

「ほんとに睡くなつちやつたあ！」

しかし、かうした無作法な後列の（尤も、後列ばかりではなかつた）高ごゑは、別な方面の聴衆の拍手に消された。それはカルマジノフを呼出したのである。ユリヤ夫人と貴族團長夫人を頭にかしもした幾たりかの婦人が、演壇の傍へ押寄せた。ユリヤ夫人の手には、白い天鷲絨ビロイドの臺をつけた見事な月桂冠と、いま一つ薔薇の生花せいけわで作つた花環があつた。

「月桂冠！」とカルマジノフは微妙な、やゝ毒を含んだ薄笑ひを浮かべながら、かう言つた。「わたしはもちろん感謝の情に堪へません。豫め用意されたものではありませんが、まだ凋れる暇のない、生きた感情の籠つたこの花環を受納いたしましたませう。しかし、淑女イデム方、全くのところ、わたしはこんど急に現實主義者リアリズムになりましたので、今の世の中では、月桂冠もわたしの手にあるよりは、熟練した料理人の手にある方が、遙かに處を得たものと思はれます……」

「さうとも、料理人の方がずつと役に立たあ。」ギルギンスキイの家で『會議』に列した、例の神學生がかう叫んだ。

會場の秩序は少からず破られた。月桂冠の贈呈式を見ようとして、方々の席から跳上るものが大分あつた。

「僕はこれから、料理人に三ループリ増してやつてもいゝ。」いま一人が大きな聲で合槌を打つた。その聲は餘りだと思はれるくらゐ大きかつた。これでもかと言ふやうな大きな聲だつた。

「僕もさうだ。」

「僕も。」

「一體こゝに食堂フッフエイはないのか？」

「諸君、つまり我々は詐欺にかゝつたのだ……」

しかし、序でに斷つて置くが、かういふ無作法な連中も、まだやはり町の上級官吏や、同じく廣間ホーメルに居合はした警部などを、酷く恐れてゐたのである。十分ばかり経つてから、やつと人々は元の席に著いたが、以前の秩序はもう恢復できなかつた。可哀さうにステュパン氏の講演は、丁度かうした混亂が、そろ／＼きざし始めた時に當つたのである。

#### 四

けれど、わたしはも一ど樂屋へ駈込んで、もう前後を忘れながら、彼に忠告した。わたしの考へでは、もう何もかも破裂して了つたのだから、この際ぜん／＼演壇に上らないで、腹痛か何かを口實に、さつそく家へ歸つた方がよからう。さうすれば、わたしもやはりリボンを捨てて、一緒に出かけても構はない、と言つた。彼はこの瞬間、演壇の方へ向つてゐたが、急にその足を停めて、傲然たる目つきでわたしを頭から足の爪先まで見おろすと、勝誇つたやうにかういつた。

「君、君は一體どういふ譯で、わたしをそんな卑怯な事の出来る人間だと思ふのです？」

わたしはそのまゝ引下つてしまつた。この人が何か恐ろしい騒動を起さないで、無事にあすこから歸つて来る筈はないと、わたしは信じて疑はなかつた。それは二二が四といふくらゐ明瞭だつた。わたしはすつかり悄氣て了つて、ぼんやり立つてゐると、ステュパン氏の後で登壇する順



序になつてゐる、來遊の教授の姿がちらと目に映つた。例の拳を上へ振りあげては、力任せに打下してゐたさつきの人である。彼は相變らず自分の仕事に夢中になつて、意地悪げなしかも勝誇つたやうな薄笑ひを浮かべ、何やら口の中でぼそ／＼言ひながら、あちこち歩き廻つてゐる。わたしは殆ど無意識に彼の傍へ寄つた。こゝでも餘計なおせつかいをしたものである。

「あなたご存じですか」とわたしは言つた。「いろんな例から推して見るのに、講演のとき二十分以上も聴衆を引止めると、もうそれから先はてんで聴いて貰へませんよ。どんな名家でも、三十分と持ちこたへる事は出来なひです……」

彼はとつぜん立止つて、憤怒の餘り全身を慄はしたか、と思はれるほどであつた。量り知れない傲慢な表情が、彼の顔に浮かんだ。

「ご念には及びません。」と彼は吐出すやうに呟いて、わたしの傍を歩み去つた。

この時ホールで、ステュパン氏の聲が響き出した。

『えゝつ、お前たちはみんなどうともなるがいゝ……』と考へながら、わたしは廣間へかけだした。

ステュパン氏は、先ほどの混亂の名残の收らぬ中に、肘椅子に腰を下ろしたのである。前列の人人は、餘り同情のない眼つきで彼を迎へたらしい（最近クラブではどうしたのか彼を嫌ひ出して、前のやうに尊敬しなくなつた）。しかし、それでも叱々の聲がかゝらなかつたのが、まだしもなのである。わたしの頭の中には昨日あたりから、妙な考へがこびり附いてゐた。ほかでも

ない、彼が壇に登るや否や、一齊に口笛の音が響き出すに相違ない、といふやうな気がしてならなかつたのだ。ところが、先刻の混亂の名残で、聴著もすぐには彼の登壇に氣づかなかつた。實際、カルマジノフでさへあんな目に會つたのに、一體この人は何をあてにしようと言ふのだ？ 彼は蒼白い顔をしてゐた。何しろ、もう十年も公衆の前に現れた事がないのだ。その昂奮した態度と云ひ、またわたしに取つて馴染の深いすべての素振りと云ひ、彼自身この登壇をもつて自己の運命の解決とか、またはそれに類した行爲と見做してゐるのは、もう明々白々の事であつた。つまり、これをわたしは恐れてゐたのだ。この人はわたしに取つて大切な人なのである。それゆゑ、彼がまづ口を開いたとき、彼の最初の一句を聞いた時、わたしの心持はまあどんなだつたらう！

「諸君！」もう何もかも決心したといふ調子で、とつぜん彼はかう口を切つた。が、それでも聲は大分かすれてゐた。「諸君！ つい今朝ほどわたしの前には、近頃この地に撒布された、無法な刷りものが一枚おかれてゐました。わたしは幾度となく、自分で自分にかういふ問を發しました。この紙片の有する祕密は、果して何であるか？」

大きな廣間は忽ち聞として、一同の目は彼の方へ向けられた。その中には、慥えたやうな目つきも交つてゐた。結構な事だ、一語にして興味を惹きつける腕があるのだ。樂屋の方からも、首を突き出すものがあつた。リプーチンやリヤムシンは、貪るやうに耳を澄してゐた。ユリヤ夫人は再びわたしを小手招きして、

「やめさして下さい、どうしてもやめさして下さい！」と彼女は不安げに囁いた。わたしはたゞ肩を疎めるのみであつた。決心して了つた男を留めるなんて、果して出来る事だらうか？ 悲しいかな、わたしにはスチエパン氏の氣性が、餘りに分り過ぎてゐた。

「へえ、檄文の事だぞ！」と呟く聲が聴衆の中で聞えた。廣間がざわ／＼し始めた。

「諸君、わたしは祕密の存する所を明かにしました。彼らの奏しつゝある効果の祕密は、要するに、彼らの愚といふ點に歸するのであります！（彼の目はぎら／＼輝き出した）。それでですね、諸君、もしそれがわざと企らんだ偽りの愚なら、それこそ實に天才の業と言つてもいゝくらいです！ ところが、彼らの長所をも、十分に認めてやらなければなりません。彼らは別に少しも企らんだものではありません。それは思切つて剃き出しの、思切つて正直な、思ひ切つて單純な愚であります——c'est la bêtise dans son essence la plus pure, quelque chose comme un simple chimique（それは最も純粹な愚のエッセンスであります）これがもしほんの滴ほどでも、伶俐な言方がしてあつたら、誰だつてこの單純な愚のやくざ加減に、すぐ氣がつくに相違ありません。ところが、いま人々はげん／＼に思ひながら、躊躇してゐるのです。つまり、それほどまで原始的に愚なものだとは、どうしても信じられないからです。『この中に、これ以上の意味が全然ない筈はない』とかう思つて、誰でも祕密を探り出さうとする。言葉の裏を讀まうとするのです——かうして、効果は奏せられたのであります！ あゝ、これほどに愚昧が華々しい報酬を受けた事は、今まで嘗てないのであります。尤も、ちよい／＼した報いは屢々受けてをりました……つまり、

アンバランティヌが、愚昧は大天才と同様、人類の運命に取つて、均しく有益なものだからであります。

「四十年代の地口だ！」といふ誰かの聲が聞えた。が、ごくおとなしい調子だつた。

しかしそれに續いて、すべてが堰を破つたやうになつて了つた。烈しい喧囂と騒音が起つた。

「諸君、萬歳！ わたしは愚のために祝杯を提議したいと思ひます！」もうすつかり激昂して了つて、ホール全體を呑んでかゝりながら、スチエパン氏はかう絶叫した。

わたしは水を注ぎ添へるのを口實に、彼の傍へ走り寄つた。

「スチエパン・トロフイムイチ打つちやつてお了ひなさい、ユリヤ夫人の頼みですから……」

「いや、君こそわたしを打つちやつといってくれ給へ、本當にこの輕薄才子が！」と彼は一杯に聲を張上げて、わたしに食つてかゝつた。

わたしは匆々に逃げ出した。

「諸君」と彼は語を次いだ。「その昂奮はなんのためです？ わたしの耳にする憤慨の叫びは何のためです。わたしは橄欖の枝をもつて來たのであります。わたしは最後の言葉を齎らしたのであります。實際、わたしはこの問題に就いては、最後の言葉を握つてゐるのであります——さうして、お互に和睦しようではありませんか。」

「そんな物は要らない！」と一方で叫ぶと、

「しつ、言はして見ろ、了ひまで言はして見ろ。」とまた一方で金切聲を立てた。

取分け昂奮してゐるのは、もう一ど口を切つた若い教員だつた。彼はもうぢつとしてゐられないやうな風であつた。

「諸君、この問題に對する最後の言葉は——一切を救す事であります。わたしは既に生活を終へた老人として、憚るところなく堂々と斷言しますが、生命の靈氣は依然躍動してゐます。生の力は若き時代の中にも涸渇してをりません。現代の青年の感激は、わたし達の時代と同様、清淨にして光明に充ちてゐます。變つたのはたゞ一つだけです。即ち、目的の移動、美の轉換であります！すべての疑惑は、たゞ一つの間に含まれてゐます。つまり、どちらがより多く美であるか——セークスピヤか靴か、ラファエルか石油か？」

「それは誣告だ！」ある一群が喚いた。

「そんな質問は、人に鎌を掛けるといふものだ！」

「煽動者だ！」

「ところで、わたしはかう斷言する。」もう憤激の極に達して、ステュパン氏は癩走つた聲を振絞つた。「わたしはかう斷言する。セークスピヤやラファエルは、農奴の開放より尊い、國民性より尊い、社會主義より尊い、若き時代より尊い、化學より尊い、殆ど全人類より尊いのだ。なぜなれば、彼らは既に全人類の得た果實——眞の果實だからである。いな、或ひはこの世に存在し得る最高の果實かも知れないのだ！彼らは既に獲得されたる美の形體だ。この美の獲得を外にしたら、わたしは生きることすら潔しとしないのだ……おゝ、何といふ事だ！」彼は兩

手をぱちりと鳴らした。「十年前ベテルブルグで、わたしは丁度今と同様に演壇に立つて、丁度これと同じ言葉をもつて叫んだ事がある。が、丁度これと同じやうに、彼らはわたしの言葉を解しないで、笑つたり叱聲を發したりした。あゝ、單純なる人々よ、諸君は何が不足してゐるために、この言葉の意味を解しないのか。しかし、記憶して置くが、記憶して置くが、英吉利人はなくても、なほ人類は存在し得る、獨逸人がなくとも大丈夫だ、露西亞人がなくとも猶さら大丈夫だ、科學がなくとも構ひはせぬ、麵麩がなくともなほ可なりだ。たゞ一つ美がなくとも、絶対に不可能だ。なぜなれば、人々はこの世で、何等なすべき事がなくなるからだ！一切の秘密はこゝにある、一切の歴史はこゝにあるのだ！科學すらも美がなかつたら、一刻も存在する事が出来ないのだ——笑ふ者よ、君たちは果してこれを知つてゐるか——美がなかつたら、科學は一介の奴隸と化して、釘一本も發明することが出来ないのだ！なんの譲るものか！」最後に彼は愚かしくかう喚きながら、拳を固めて力任せに卓を叩いた。

しかし、彼が意味も順序もなく喚き立ててゐる中に、廣間の秩序も次第に亂れて來た。多くの者は席を飛上つた。中には、演壇へぢり／＼押寄せて來るものがあつた。全體として、かういふ風の出來事は、わたしがこゝに描寫してゐるよりも、ずつと迅速に進行して行つたので、對應策を講ずる暇がないくらゐであつた。いや、事によつたら、誰もそんな事をしようとしなかつたのかも知れない。

「ふん、何もかも据膳で暮してゐる君たちは、それで結構だらうよ、吞氣なものさ！」例の神

學生が演壇のすぐ傍に立つて、さも快げにスチエパン氏に齒を剝いて見せながら、かう怒鳴つた。こちらはそれに氣がついて、一番はじの方へ飛び出した。

「一體あれはわたしぢやないのか？ 若き時代の感激も、以前と同じやうに清淨で光明に充ちてるが、たゞ美の形式を誤つたために、墮落してると言つたのは、あれはわたしぢやないか？ 君たちはあれでまた不足なのか？ それに、これを叫んだのが、打たれ辱められた一個の父親だといふ事を考へたら、これ以上公平冷靜な意見を求める事は、出来ない筈ではないか！……あゝ、何といふ恩を知らない……非道なやつ等だらう……どうして、まあどうして君らは和解が厭なのだ……」

といふや否や、彼はだしぬけに歇私的利な聲で泣出した。彼はせぐり来る涙を、指で拂ひ拂ひした。肩と胸は歎歎に慄へた……彼はもう何もかも忘れてしまつたのである。

喩へやうのない驚愕が廣間を襲つた。殆どみんな席を立つて了つた。ユリヤ夫人も夫の手を取つて、肘椅子から引立てながら急に立上つた。容易ならぬ騒ぎが始つた。

「スチエパン氏！」と神學生がさも嬉しさうにかう怒鳴つた。「今この町から近在へ掛けて、脱獄囚のフェーヂカといふ奴がうろついてゐます。こいつは方々で強盜を働いてゐますが、ついでこの間もまた新しく殺人を遂行しました。ところで、一つお訊ねしますが、もしあなたが十五年以前、骨牌の負債を償却するために、あの男を兵隊にやつてしまはれなかつたら、いや、分りよく言へば、もしあなたが歌留多に負けなかつたら、あの男が懲役にやられるやうな事になつたで

せうか？ え、今のやうに生存のための争闘に、人を斬つたりするやうなことが起つたでせうか？ え、ご返答はどうです、もし耽美派先生？」

わたしはもう、次に起つた情景を描く事が出来ない。まづ第一に兇猛な拍手の聲が響いた。尤も、皆が皆拍手した譯ではなく、せいゝ廣間の五分の一ぐらゐに過ぎなかつたが、とにかくその拍手は兇猛なものだつた。その餘の聴衆は、どつと出口の方へ押寄せたが、拍手をした一部の聴衆が頻りに演壇の方へ押して來るので、遂に廣間全體の大混亂となつた。婦人連は金切聲を立てるし、娘たちの中には、家へ歸らうと泣出すものもあつた。レムブケーはげん目つきできよろきよろあたりを見廻しながら、自席の傍に立つた。ユリヤ夫人は、もうすつかり途方に暮れてしまつた。それは、夫人が町の交際場裏に立つてから、始めてであつた。スチエパン氏はどうかと言ふに、彼は始め文字通りに、神學生の言葉に打挫がれたやうな風であつた。が、とつぜん彼は聴衆の上にさし翳さうとでもするやうに、両手を高くさし上げながら、叫び出した。

「わたしは足の砂を拂つて、咀つてやる……もう駄目だ……もう駄目だ……」  
かう言つて、くるりと向きを變へると、威嚇するやうに両手を振廻しながら、そのまま樂屋へ駆込んで了つた。

「あれは社會を侮辱した！……ゾルホーエンスキイを捕まへろ！」兇猛な聲がかう咆哮し始めた。

實際、樂屋へ追つかけても行兼ねない勢だつた。少くも、その瞬間には、會場を取り鎮めるな

どといふ事は、てんで不可能だつた。と——不意に最後のカタストロフが、まるで爆弾のやうに、會衆の頭上に落ちかゝつて、そのたゞ中で破裂した。三番目の講演者——樂屋でしじう拳固を振廻してゐた例の畸人<sup>マニヤク</sup>が、とつぜん舞臺へ駈出したのである。

彼の顔つきは全く氣ちがひじみてゐた。底知れぬ自信を湛へた、勝誇つたやうな微笑を、顔一面に浮かべながら、湧立つ廣間<sup>ホール</sup>を見廻してゐたが、自分でもその混亂を悦んでゐるやうであつた。彼は、こんな騒動の中で演説するやうになつたのに、少しも當惑した風はなく、かへつてこれ幸と思つてゐるらしかつた。これが餘りにもあり／＼と見え透いてゐたので、すぐに一同の注意を惹いた。

「あれはまた何物だ？」と聞く聲が聞えた。「あれはまた誰だい？　しつ！　一たい何を言はうといふんだい？」

「諸君！」殆ど演壇の突端<sup>ちゆうたん</sup>に立ちはだかりながら、カルマジノフと同じ女のやうな黄色い聲で（但し貴族的なしゆつ／＼といふ音は出さなかつた）、畸人<sup>マニヤク</sup>は力の限りにかう怒鳴つた。「諸君！二十年以前、歐羅巴の半ばを敵とする戦ひの前夜に當つて、露西亞はすべての官僚派の眼に、立派な理想的國家と映りました！　文學は檢閲局のご奉公をし、大學では訓練が教へられ、軍隊は舞踏團と化し、人民は農奴制度の笞<sup>しもと</sup>の下に、年貢を納めて無言の行をしてゐた。愛國主義は生きた者からも死んだ者からも、遠慮なく賄賂を取るといふ事になつてしまつて、賄賂を取らないものはかへつて反逆者と見られてゐた。つまり、一般の調和を破るからであります。白樺の森は、

秩序維持といふ名目のために倒された。かくして歐羅巴は慄然として、恐れをなしてゐたのであります。しかし、露西亞は譯の分らぬ過去一千年の存在の間にも、かういふ恥づべき状態に陥つた事は、かつてなかつた……」

彼は拳を振上げ、有頂天になつて、物凄い勢で頭上<sup>づじやう</sup>に一振すると、まるで敵を粉碎しようとするかのやうに、いきなり猛然と打ちおろした。兇猛な叫喚が四方から起つて、耳を聳するやうな拍手の音が降りかゝつた。もう殆ど廣間半分まで拍手したのである。まるで子供のやうに罪もななく、夢中になつて了つたのだ。露西亞が公衆の面前でおほつびらに侮辱されたのだもの、有頂天になつて怒鳴らずにゐられる筈がない。

「ふん、そりやその通りだ！　全くその通りだ！　萬歳！　いや、これはもう美學や何かぢやない！」

畸人<sup>マニヤク</sup>は有頂天になつて叫び續けた。

「それ以來、二十年の星霜を経ました。大學は諸所に開設せられて、その數を増し、訓練は變じて傳説と化し、將校の定員は幾千となく不足を生じ、鐵道はすべての資金を啖<sup>く</sup>ひ盡して、露西亞全國に蜘蛛とかゝり、いま十五年も経つたら、まあどこへでも旅行できるやうにならうか、と豫想されてゐます。橋はごく時たまにしか焼ける事がないが、町は一定の順序に依つて、火事の季節<sup>シキゴ</sup>に規則たゞしく焼けて行つてゐます。また裁判所では、ソロモンも三舎を避けるやうな判決が下され、陪審員は自分が饑死しさうな時でなければ、つまり、生存競争に餘儀なくされた場合

でなければ、決して賄賂を取らぬ、と誇稱してをります。そして、農奴は自由になりながら、以前の地主に代つて、今はお互同志を撲り合つてゐる。火酒は政府の豫算を不足させないために、大海の水もたゞならぬほど消費され、ノゾゴロドでは、古い役にも立たないソフィヤ寺院の向ひに、過去の動亂と混沌との一千年記念として、老大な青銅の地球儀が据ゑられた。かくして、歐羅巴は眉を顰めながら、再び心配を始めたのであります……あゝ、改革に着手して十五年！しかも露西亞は、鳥羽繪めいた混沌の時代に於てすら、いまだ嘗てかくの如き……」

最後の言葉は聴衆の咆哮で、聞取る事が出来ないくらゐだつた。たゞ彼が再び手を振上げていまいど勝誇つたやうに、打下すのが見えたばかりである。聴衆の歡喜は、もう常軌を逸してしまつた。人々は喚いたり、拍手したりした。中には『もう澤山！もうなんにも言はないで下さい！』と叫ぶ婦人もあつた。辯士は一同をじろり見廻したが、自分の大成功に溶けさうだつた。レムブケーが言ひやうのない昂奮のさまで、何か誰やらに指さしてゐるのが、ちらとわたしの目に入つた。ユリヤ夫人は眞蒼になつて、傍へ駈け寄つた公爵に、何やら急しげな口調で言つた……けれど、この瞬間一群の人が——多少とも公職の意味を有する人々が、六人ばかり、樂屋からどや／＼と演壇へなだれ込むと、いきなり辯士を引つ摺んで、樂屋へ引摺つて行つた。どうしてこの人たちを振放したのか、わたしはいまだに合點が行かないが、とにかく彼は巧く迂り抜けて、再び演壇の突端へ跳り出た。そして、例の拳を振廻しながら、あらん限りの聲を振絞つて、やつとこれだけ怒鳴つた。

「しかし、露西亞はいまだ嘗てかくの如き……」

けれど、彼はまたもや引摺られて行つた。わたしは、十五人ばかりの者が彼を救ふために、樂屋へ押掛けたのを見た。しかし、それは演壇を通らずに、ちよつとした仕切りのある横手へ抜けようとしたので、仕切りはめり／＼と破れて倒れてしまつた……續いて、ギルギンスキイの妹の女學生が、例の巻いた書類を小脇に抱へ、あの時と同じ服装で、あの時と同じ赤い顔をして、あの時と同じむつちり肥つた體で、二三人の男女に取巻れながら、不意にどこからか演壇へ飛上つた時には、わたしは殆ど我とわが目を疑つた。うしろからは、かの不俱戴天の仇なる中學生が隨つてゐる。わたしは次のやうな言葉さへ耳にしたほどである。

『皆さん、わたしは不幸なる大學生の苦痛を訴へて、到るところ彼等に抗議を提出させるために、こゝへ來たものであります』。

が、わたしはもうそのとき駈出してゐた。リボンは衣囊の中へ隠して、勝手を知つた裏口から往來へ拔出した。勿論まづ第一に、スチエパン氏のところへ志した。

## 第二章 祭の終り

彼はわたしに會はなかつた。彼は閉籠つて、何か書いて居た。わたしが幾度も續けざまに、戸を叩いたり、呼んだりすると、戸の向うからたゞかう答へた。

「君、わたしはもう何もかも片づけて了つたのだ。もう誰だつて、この上わたしに用のある筈はないぢやないか？」

「あなたは何も片づけやしません、たゞ何もかも滅茶々々になるやうに、仕向けただけです。スチエパン・トロフィームイチ、後生だから地口は抜きにして、開けて下さい。何とか方法を講じなきやならないぢやありませんか。事によつたら、またこゝへぞろ／＼押掛けて、あなたを侮辱するかも知れませんか……」

わたしはこの際特にやかましく、命令的になる権利があると思つた。彼が何かもつと氣ちがひじみた事を仕出來しはしないか、とかう心配したのである。けれど驚いた事に、わたしは並々ならぬ斷乎とした返答にぶつ突かつた。

「どうか君から先に立つて、僕を侮辱しないでくれ給へ。これまでの事に對しては、厚く君にお禮を言ふ。しかし、繰返していふが、わたしはもう人間と縁を切つたのだ、善い人間とも、悪い

人間とも。今ダーリヤさんに手紙を書いてる所だ。わたしは今まであの人の事をすっかり忘れてしまつて、實に申譯のない事をしてゐた。もし好意があつたら、明日にもこの手紙を届けてくれ給へ。が、今は『メルシイ』だ。」

「スチエパン・トロフィームイチ、本當のところ、これはあなたの考へてをられるより、ずつと重大な事です。あなたは、誰かを滅茶々々に粉碎したつもりでゐるんでせう？　ところが、あなたは誰も粉碎しやしない、かへつてあなたの方がまるで空の硝子壺みたいに、碎けて了つたんですよ（おゝ、わたしは何といふ粗暴な、失禮な事を言つたのだらう。思ひ出す度に、慚愧の念を禁じ得ない！）ダーリヤさんの所なぞへ、あなたが手紙を出す事は少しもありません……それに、わたしと言ふものがなかつたら、あなたは二進も三進も行かないぢやありませんか？　あなたに世間の事が分ります？　あなたはきつと何か企らんでゐますね？　本當に、あなたがこのうへ何か企らんだら、それこそ失敗を繰返すだけです……」

彼は立上つて、戸のすぐ傍へ近づいた。

「君はあの連中と附合つてさう長くないが、言葉も調子もすつかり感染されて了つたね。 Dieu vous pardonne, mon ami' et Dieu vous garde (どうか神が君を赦し、君を護り給はん事を)。しかし、わたしは常に君の

中に、紳士の素質の萌芽を認めてゐたから、またその中に悟る事もあるだらう——但し、すべて我々露西亞人の癖として、遅れ馳せにだね。ところで、わたしの非實際的性質に關する君のご注意に對しては、わたしが前から抱いてゐた一つの思想を、君にご紹介しよう。ほかぢやない、わ

が露西亞の國では、殆ど數へ切れぬほどの人達が、實にどうも恐しい權幕で、しかも夏の蠅ほどうるさく執拗に、人の非實際的性質の攻撃を唯一の仕事にしてゐる。そして、自分以外の人間を誰かれの差別なく、手當り次第に『非實際的だ』と言つて、非難するんだからねえ。君、わたしはいま昂奮してゐるんだから、その事を頭に置いて、わたしを苦しめないでくれ給へ。いろ／＼君にはお世話になつた。もう一度メルシイを言ふよ。そして、カルマジノフが公衆と別れたやうに、別れようぢやないか。つまり、出来るだけ寛大な心をもつて、お互に忘れようぢやないか。尤も、あゝしつこく昔の讀者に、忘れてくれと頼んだのは、あれはあの男の細工なんだが、わたしに至つては、あんなに見得坊ぢやないから、何よりもまづ君の心の若さに——まだ誘惑に毒されない心に、望みを囁してゐるんだよ。實際君などが、こんな老人を永く憶えてる必要がないものね。君、『永く永く生きて下さい』だ。これは前の命名日に、ナスターシヤがわたしに言つてくれた言葉だ。ces pauvres gens ont quelquefois des mots charmants et pleins de philosophie

(あゝ、いふ詰らない人間が、どうかすると、哲(理)に富んだ美しい言葉を持つてゐるものだね) 君には餘り多くの幸福を望ままい、うき／＼して來るからね。しかし、不幸をも望みやしない。たゞ平民哲學の眞似をして『永く永くお生きなさい』とだけ繰返して置かう。そして、どうか餘り退屈しないやうに努め給へ。この空しい希望は、わたしのものとして附けたして置くのだよ。ぢやさよなら、本當にさよなら。もう戸の傍に立つのを止し給へ、わたしは開けやしないから。」

彼は向うへ行つて了つた。で、わたしは到頭なんら獲る所なしに終つた。彼のいはゆる昂奮に

も拘らず、その言ふ事は滑らかで、悠々として重味があり、明らかに人の肺腑を貫かうと努めてゐるらしかつた。勿論、彼はわたしに少し憤る所があつて、間接に復讐したものに相違ない。事に依つたら、昨日の『囚人馬車』や、『ばつと兩方へ割れる床』に對する復讐かも知れない。殊にけふ公衆の前で流した涙は、ある勝利を獲得させたとは言ひながら、やはりいくぶん滑稽な立場に彼を陥れたのである。彼もこれを承知してゐた。ところが、ステュパン氏のやうに、友人同志の關係で、形式の美と嚴正を氣に掛ける人は、またとほかに類がなかつた。あゝ、わたしは彼を責める事が出来ない！ しかし、あゝした惑亂にも拘らず、あの細かい心づかひや皮肉が残つてゐるといふ事實は、わたしをそのとき安心させて了つたのである。不斷とあまり變りのない人間が、その瞬間に何か悲劇的な、思切つたことを仕出かすやうな氣分になつてゐないのは、勿論わかり切つた話である。かうわたしはそのとき考へたのだが、あゝ、何といふ考へ違ひだつたらう！ わたしはあまりに多くの物を見のがしてゐたのである……

續いて起つた出來事を記すに當つて、翌日ダーリヤが本當に受取つたこの手紙の最初の數行を、こゝに引いて置かうと思ふ。

『わが子よ、わが手は戦きつゝあり。されど余は一切を破棄せり。君は世人を敵とする余の最後の白兵戦に、姿を示し給はざりき。君はかの『朗讀會』に出席し給はざりしが、まことによくぞせられたり。されど、剛直の士に乏しきわが露西亞の國に、たゞ一人の勇士毅然として立ち、四方より起る威嚇の聲にも動ずる事なく、これらの衆愚に向ひて彼らの眞相、即ち彼らの愚人な



る事を喝破せし次第を、君は後に聞き給ふなるべし。お、彼らは憫むべき小無頼漢、小愚人に過ぎず——*voilà le mot* (あ、如何にこの語の適切なることよ) かくして籤は抽かれたり。余は永久にこの町を去らんとす。しかも、そのいづくへ行くやを知らず。かつて余の愛したるものは、悉く余に背を向けたり。さはれ君よ、君は清淨無垢の人なり、謙抑なる人なり。かつて心變り易く我意つよき女のころに依りて、殆ど余と生涯を共にせんとしたる人なり。遂に成就せざりし二人の結婚の前に當りて、余が心狭き涙を流したるとき、君は侮蔑の眼をもつて余を見給ひしなるべし。君はその美しき心根をもつてしても、なほかつ笑ふべき人物とよりほかには、余を眺め得ざりし事なるべし。されど、君にこそ余はわが心の最後の叫びを送らん。君にこそわが最後の務めを果さん。お、そはたゞ君一人のみ！ 余は恩を知らざる痴呆漢、下司なる自己主義者と、余をさげすみ給へる君を後にして、永久に別れ去るに忍びざるなり。惟ふに、かの忘恩の情なき女は、日毎にこれらの言葉を君の耳に囁けるなるべし。さはれ悲しい哉、余はこの女を忘るゝを得ざるものなり……』云々、云々。

かういふ風な事が、大判四頁も書き連ねてあるのだ。

彼の『開けやしないから』の答へに、三ど拳で戸を叩いて、その後から、あなたは今日の中に三度ぐらゐ、ナスターシャを使に寄越すだらうが、わたしは決してもう來やしないから、と怒鳴つて置いて、そのまゝ彼を見棄てて、ユリヤ夫人のところへ駆けつけた。

## 二

そこでわたしは、一つの苦々しい場面の實見者となつた。不幸な婦人は、みす／＼皆に騙されてゐるのであつた。しかも、わたしは何とも手の出しやうがなかつたのだ。それに實際、わたしは夫人に向つて何が言へたらう？ 落ちついてよく考へて見ると、わたしの心にはたゞ一種の感覺、疑はしい豫感のほか、なんにもありやしないのだ。わたしが入つたとき、夫人は殆ど歇私的利のやうになつて泣きながら、オデコロンで額を濕したり、コップの水を吞まして貰つたりしてゐた。彼女の前には、のべつ喋り立てるピョートルと、まるで口に錠でも下されたやうに押黙つた公爵が立つてゐた。彼女は泣いたり喚いたりしながら、ピョートルの『裏切り』を責めてゐた。夫人はこの日の失敗と恥辱とが、すべてピョートルの不在のみに起因したと考へてゐる、それがすぐわたしの注意を惹いた。

ピョートルに就ては、ある一つの重大な變化が目についた。ほかでもない、彼は何だか恐ろしく心配さうな、殆ど眞面目くさつた様子をしてゐるのであつた。ふだん彼は眞面目な様子をしてゐる事は決してない。いつでも笑つてゐる。怒つた時でさへ笑つてゐるのだ。ところで、彼はよく怒つた。實際、今も意地悪で、無作法で、亂暴で、いま／＼しく自烈たさうだつた。彼はけさ早く、偶然ガガーノフの家へ出かけた所、そこで頭痛がして、嘔氣を催して來たのだと、一生懸命に辯解してゐた。あゝ、不幸な婦人はまだこのうへ騙されたかつたのだ！ わたしが入つたと

き、一座を占めてゐた重なる問題は、舞踏會——即ち慈善會の第二部を開いたものか、どうかと言ふ事だつた。ユリヤ夫人は『さつきのやうな侮辱』を受けた後で、舞踏會に出席するのは、どうしても厭だと言つた。別の言葉でいへば、夫人は無理やり出席させられたかつたのである。しかも是非とも、ピートルにさう仕向けて貰ひたかつたのだ。夫人はまるで豫言者か何ぞのやうに、彼を見上げてゐた。もし彼がすぐこの場を去つたら、夫人は病の床に就いて了ふだらう、と思はれるくらゐだつた。しかし、彼は立去らうなどと考へもしなかつた。彼自身、是が非でも今日の舞踏會が成立して、どうしてもユリヤ夫人に出席して貰はなければならなかつたのである。

「ちよつ、何だつて泣くんです？ あなたはどうあつても不體裁な場面が演じたのですか？ 誰かに鬱憤がはらしたのですか？ ぢや、僕にそれを霽して下さい。たゞお早く願ひますよ。何しろ時間はどん／＼経つて、何とか決めなきやならないんですからね。朗讀會で味噌をつけたら、舞踏會で取返すんですよ。そら、あの公爵もご同意です。あゝ、公爵がをられなかつたら、まあどんな事になつたか分りやしない！」

公爵は舞踏會に反對だつたが（といふより、ユリヤ夫人が舞踏會に出席するのに反對だつた。なぜと言つて、舞踏會はいづれにしても、開かなければならないからである）、しかし、二三自分意見なるものが引用されたとき、彼もだん／＼同意の印に、ふむ／＼と言ふやうになつた。

それからまた、ピートルの一通りならぬ無作法な調子にも、わたしは一驚を吃したのである。これは大分のちの話だが、ユリヤ夫人がピートルと何か妙な關係がある——などといふ下劣な

誹謗も行はれたが、わたしは憤然としてこれを斥けた。そんなことは決してない、またあり得べき筈がないのだ。彼はたゞそも／＼の始めから、社會と本省に對して勢力を得ようといふ、夫人の空想に一生懸命で合槌を打つたり、夫人の計畫に立入つて世話をやいたり、自分から夫人のためいろいろな計畫を立ててやつたり、下劣な阿諛で取入つたりして勢力を占め、遂には頭から足の爪先まで丸め込んで、夫人に取つてまるで空氣と同じくらゐ、なくてならぬものとなり終せたのである。わたしの姿を見ると齊しく、夫人は目を輝かせながら、かう叫んだ。

「あゝ、あの方に聞いてご覧なさい。あの人もやはり公爵と同じやうに、始終わたしの傍を離れずにあて下すつたんですから。ねえ、あなた、これが企らみだといふ事は、ちやんと見え透いてるぢやありませんか。えゝ、わたしやアンドレイに、出来るだけ悪い事を仕向けようといふ、いやしい狡猾な企らみなんです。えゝ、みんなが申し合せたんです！ ちやんと計畫が立つてゐたんです。みんなぐるなんです、立派にぐるなんです！」

「あゝ、またいつもの癖で、仰山に考へ過ぎてゐるんですよ。あなたの頭には、永久に詩がこびりついてゐるんですね。しかし……なにのお見えになつたのは好都合です……（彼はわたしの名を忘れたやうな振をした）。この方に一つご意見を伺ひませう。」

「わたしの意見は、」とわたしは急ぎ込みながら、「わたしは萬事ユリヤ夫人と同意見です。企らみだといふ事は、見え透き過ぎるほどです。奥さん、わたしはこのリボンをお返しに來ました。舞踏會を開いたものかどうかといふ問題は、勿論わたしの容喙すべき事ではありません。わたしに

そんな権限がないのですからね。しかし、幹事としてのわたしの役目は、もう済みました。短気な點はどうぞお赦しを願ひますが、どうも自分の常識と信念を傷つけるやうな、行爲をする譯に参りません。」

「お聞きになつて、お聞きになつて？」と夫人は兩手を拍つた。

「聞きましたよ。ついては、あなたに申上げる事があります。」と彼はわたしの方へ振向いた。「察するところ、あなた方はみんな何か變な物を喰べたんですね。それでみんな譚ごとのやうな事を言つてるんでせう。僕に言はせれば、何事も起りやしなかつたんですよ。この町で今までになかつたやうな事は、またこの町で起り得ないやうな事は、決してもちあがりやしなかつたのです。企らみとは何ですか？ もちろん見苦しい、言ふに堪へない、ばか／＼しいことになつて了つた。けれど、企らみがどこにありますか？ それは一體、ユリヤ夫人を苦めようといふ企らみですか？ あの連中のいたづらを寛大に恕して、甘やかしてをられた、彼等に取つて大切な保護者を、苦めようといふ企らみですか？ ねえ奥さん！ 一體わたしが一箇月の間、口を酸つぱくして言つたのは何でせう。何をご注意したのでせう？ まあ本當に、本當にあんな連中が、何のために必要だつたのですか？ あんな有象無象にかゝり合ふ必要が、どこにあつたのですか？ なぜです、何のためですか？ 社會を結合するためですか？ なんの、あんな連中が結合して堪るものですか、冗談ぢやない！」

「いつあなたがわたしに注意して下さつて？ いゝえ、あなたはかへつて賛成なすつたのです、

いゝえ、要求なすつたのです……わたし正直なところ、すつかり面くらつて了ひました……だつて、あなたが自分で奇妙な人達を、大勢つれて來たんぢやありませんか。」

「飛んでもない、僕はあなたと争つたのです。賛成などしやしません。ところで、連れて來たには——なるほど連れて來たに相違ありませんが、しかしあの連中が自分の方から、一打ぐらゐ押しかけて來たからですよ。それもごく近頃の事で、『文學四班舞踏』をするのに、あゝいふがらくたが、ぜひ必要だつたからです。けれど僕うけ合つて置きますが、今日はあゝいふ風ながらくたを、十人か二十人、切符なしで引張り込んだものがあるのです！」

「間違なしです！」とわたしは合槌を打つた。

「そらご覽なさい、あなたはもう僕に同意してるぢやありませんか。それに一つ思ひ出してご覽なさい、近頃のこゝの風儀はどんなものです、つまりこの町ぜんたいの事ですよ。ねえ、何も彼も鐵面皮と、破廉恥に化して了つたぢやありませんか。あれは全く見苦しいばか騒ぎを、のべつ樂隊で囃し立てるやうなものです。あれは一たい誰が奨励したのです？ 自分の權威で擁護したのは誰でせう？ 世間の者を間違つかせたのは誰でせう？ 町のわい／＼連中を怒らしたのは誰でせう？ ねえ、あなたの家のアルBUMには、この町のあらゆる家庭の祕密が、詩や畫になつて載つてるぢやありませんか。その詩人や畫家の頭を撫で、やつたのは、あれはあなたぢやなかつたでせうか？ リヤームシンに手を接吻させておやりになつたのは、あれはあなたぢやなかつたでせうか？ 一介の神學生が堂々たる四等官を罵倒して、その令嬢の着物をタール塗の靴で汚

したのは、あなたの目の前で起つた事ぢやありませんか。ですもの、町の人があなたに反抗的の氣勢を示したからつて、お驚きなさる事は少しもありませんさ。」

「だつて、それはみんなあなたが自分でなすつた事ですよ！ あゝ何といふ事だらう！」

「いゝえ、僕はあなたに注意したのです。あなたと議論までしました。憶えてゐらつしやいませるか、議論までしたのですよ！」

「まあ、あなたは面と向つて嘘をつくんですか！」

「えゝ、まあ何とでも仰しやい。あなたはそんな事を言つても平氣なんですから。あなたはいま犠牲が要るので、誰にでもいゝから、鬱憤が霽したいのです。さあ、僕にそれを霽して下さい、さつきもさう言つたぢやありませんか。しかし、僕は君にお話した方がいゝやうだ、あの……（彼はいまだにわたしの名が思ひ出せないやうな風をした）。一つ指を折つて、勘定して見ようぢやありませんか。僕は斷言して置きますが、リプーチン以外には、たくらみなんてものは少しもありません、決してありません！ それは僕が證明してお目にかけてますが、まづリプーチンを解剖して見ませう。あの男は、レビヤードキンの馬鹿者が作つた詩を掲げて登壇しました——ところで、どうでせう、君のご意見ではこれが企らみなんですか？ しかしねえ、リプーチンに見れば、あれが單に氣の利いた洒落のやうに思はれたかも知れませんよ。眞面目に、全く眞面目にさう思つたかも知れませんよ。あの男は、みんなを笑はせてやらうといふ目的で、登壇したばかりです。第一に、自分の保護者たるユリヤ夫人を、慰めて上げようと思つたのです、それ

つきりですよ。君、本當にしませんか？ だつて、この一月ばかりの間、こゝでやつてゐた事を考へると、これなぞも同じ調子のもぢやありませんか？ それになんなら、すつかり言つて了ひますがね、全くの所ほかの場合だつたら、或ひは問題にならずに済んだかも知れないくらゐですよ！ もちろん無作法な洒落です、いや、むしろ藥の利き過ぎた洒落です。が、全く滑稽な洒落ぢやありませんか？」

「え？ ぢやあなたはリプーチンの行爲を、氣の利いた洒落だと思つてゐるんですか？」恐ろしい憤懣のさまで、ユリヤ夫人はかう叫んだ。「まあ、あんな馬鹿な、あんなへまな、あんな下劣な、卑怯な——あれはわざとした事です、えゝ、あなた方がわざと仕組んだ事です——そんな事を仰しやる以上、あなたもやはりその仲間です！」

「さうでせうとも、うしろの方に隠れてゐて、あの機關をすつかり操つてゐたのでせうよ。しかし、もし僕がその企らみに加擔してゐたとすれば——ねえいゝですか——到底リプーチン一人で濟みやしなかつた筈ですよ！ かう言へばあなたは、僕が親父と謀し合して、わざとあんな醜體を演じさせた、とでも仰しやるのでせう。ところが、親父に演説なんかさしたのは、一體まあ誰の責任なんでせう？ 昨日あなたを止めたのは誰でせう、ついほんの昨日の事です！」

「あゝ、昨日あの人（オイエル）はあれほどの才氣（イラキ）をお見せになつたのに。わたしそれを當にしてゐたんですの。それに、あの人の態度も立派ですから、わたしもよもやあの人とカルマジノフに限つて……ところが、あの通りの始末です！」

「え、あの通りの始末です。しかし、そのあれほどの才氣にも拘らず、親父は會を滅茶々々にしてしまひました。ところで、もし親父が會を滅茶々々にするつて事を、僕が始めから知つてゐたとすれば、僕はあなたのご意見に依ると、明かにこの催しをぶつ毀す企らみに加擔してゐるだから、山羊を畠へ放つやうな事をしてはいけないなどと、昨日あなたを留める筈がないに、決つてゐるぢやありませんか、ね、さうでせう？」

ところが、僕は昨日あなたを留めました——つまり、蟲が知らせたから留めたのです。尤も、何もかも見抜くなんて事は、不可能でした。たぶん親父も一分まへまでは、何を言ひ出すか、自分でも分らなかつたのでせう、全體あんな神経過敏な老人連に、人間らしい所でもありませんか？

しかし、まだ應急の方法があります。明日にも公衆の憤慨を満足させるために、法定の手續を踏んで、あらゆる禮儀を失はないやうに、親父の所へ二名の醫師をやつて、健康診斷をさせたいです。何なら、今日でも構ひません。すぐに病院へやつて、冷濕布でもさせるんです。さうすれば、少くとも、みんなお笑ひぐさにしてしまつて、何もむきになつて怒る事はない、と悟りますよ。僕は今日さつそく舞踏會で、この事を披露させよう。だつて、僕は親父の子ですからね。しかし、カルマジノフの方は違ひます。あの男は全く馬鹿げきつた様子で登壇して、まる一時間あの文章を讀續けたんですからなあ——これなどはもう明白に、僕とぐるになつてたのです！

さあ、一つユリヤ夫人をへこますために、一騒ぎ起してやらうかな！

「いふ腹で。」

「お、カルマジノフ、何て恥ざらしたらう！ わたしは顔から火が出るやうでした。聽手

の心を想像すると恥しくつて、まるで顔から火が出るやうでした！」

「ふん、僕は顔から火を出すどころぢやない、自分であいつを烙殺してやりたいくらいでしたよ。全く聽手の方がもつともなんです。ところで、執拗いやうですが、カルマジノフの一件は誰の責任なんでせう？

僕があつた男をあなたに押しつけたのでせうか？

あの男の崇拜に、僕もお仲間入をしたのでせうか？

いや、まあ、あんな奴なんかどうでもいふ。さて今度は三番目に出た變人、あの政治氣ちがひですが、これはちよつと種が違ひます。あれは皆が揃つて失敗したのです。何も僕の企らみばかりのせぢやありません！」

「あ、もう言はないで下さい、恐ろしい、恐ろしい！

それはもうわたし一人の責任です。」

「勿論です。が、こゝで僕はあなたの辯護をしませう。全くあゝいふ無作法な連中の監督は、誰にだつてし切れるもんぢやありません！

彼得堡の會だつて、あゝいふ連中を防ぎきれやしませんよ。それに、あの男は紹介状を持つて來たんでせう、しかも立派な紹介状を！

そこで、あなたも合點が行つたでせう。あなたはどうしても、今夜の舞踏會に出席する義務があります。ね、こゝが肝腎な處なんです。だつて、あなたが自分であの男を、演壇へ引出したのも同じわけなんですから。だから、あなたは今夜公衆に向つて、自分はあの男と共同で仕事をしつてゐる譯ぢやない、あの亂暴者はもう警察の手に渡されてゐる、自分はいつともなしに瞞されてゐたのだ、とかう言つて置く義務があります。あなたは自分が氣ちがひの犠牲になつたといふ事を、憤慨の語氣をもつて告げなければなりません。だつて、あの男は氣ちがひぢやありませんか、それつきりで

すよ。あの男の事は、そんな風に言つて置く必要があります。僕はあゝいふ咬みつき屋が厭で堪らないんだ。尤も、僕の方がより以上ひどい事を言つてるかも知れません。しかし、演壇に立つてるのと違ひますからね。それに、この頃ちやうど元老院議員の噂が喧しいをりですから……」

「元老院議員で誰の事？ 誰がそんな事を言つてますの？」

「實は、僕自身なんにも知らないんですが、奥さん、あなたは元老院議員とかいふやうな噂を、少しもご存じないのですか？」

「元老院議員？」

「まあ、お聞きなさい、世間ではね、ある元老院議員がこゝの知事に任命される事になつた。つまり、本省の方であなた方を交送させようとしてゐる、とこんな風に信じきつてゐるんですよ。僕いろんな人から聞きましたよ。」

「わたしも聞きました。」とわたしは裏書した。

「誰がそんな事を言つてました？」ユリヤ夫人は顔をかつと赫くした。

「つまり、誰が一番に言ひ出したか、と仰しやるんですね？……そんなこと僕が知る筈はありませんさ。たゞみんながさう言つてゐるんです。世間でさう言つてゐるんです。殊に昨日などは盛なものでした。どうもみんなが恐ろしく眞面目なんです。その癖、ちつとも取留めた所はないんですがね。無論すこし考へのある、物の分つた人は黙つてゐますけれど、それでも中には、世間の話に耳を傾ける人もあります。」

「何といふ卑劣な！ そして……何といふばか／＼しいこつたらう！」

「ね、だから、かういふ馬鹿者どもに思ひ知らせてやるために、あなたは今夜どうしても出席しなくちやなりません。」

「わたしも實のところ、さうする義務があると、感じてはゐるのですけれど、でも……もしまた新しく恥を見るやうな事があつたら、どうしませう？ もし人が集らなかつたら、どうしませう？ だつて、誰も來やしません、誰一人、誰一人……」

「どうしてあなたはさう熱くなるんです！ それは、あの連中が來ないといふ事ですか？ ぢや、新しく縫つた着物はどうするんです、令嬢方の衣裳はどうなるんです？ そんな事を仰しやるやうぢや、僕は婦人としてのあなたの資格を否定しますよ。人情通といふものは、そんなもんぢやありませんよ！」

「貴族團長の奥さんはお見えになりません、えゝ、お見えになりません！」

「だが、一たい何事が起つたと言ふんです！ なぜ人が出て來ないんです？」たうとう意地悪げな、いら立たしい調子で、彼はかう怒鳴つた。

「不名譽です、恥辱です——かういふ事が起つたのです。わたしも何が何だか、はつきり分りませんが、とにかくわたしとして出席できないやうな事があつたのです。」

「なぜです？ まあ、一體あなたがどうして悪いのです？ 何だつて自分ひとり悪者にしておしまひになるのです？ 寧ろ聴衆の方が悪いのぢやありませんか。あなたから見れば年長者で

あり、一家の主たる人達は、あゝしたやくざな破戸漢どもを制止すべきぢやなかつたのでせうか。實際、あいつ等はやくざな破戸漢で、少しも眞面目な分子はなかつたのですからね。いかなる社會にあつても、單に警察の力ばかりでは、決して制御しきれぬものぢやありません。ところが、露西亞では誰でも彼でも、社會へ入つて來ると、自分に巡查を一人特別に附けて保護してくれと、要求してゐます。何しろ、社會は自ら保護するものだといふ事が、分らないんですからね。今度のやうな場合一家の主とか、政治家とか、妻とか、娘とかいふ人達は、どういふ態度を取るでせう？ 黙つて脹れるだけです。全くいたづら者を取締るといふだけの範圍ですら、社會の自發的精神が缺けてゐるんです。

「まあ、何といふ穿つた言葉でせう！ 黙つて脹れて……そして、あたりを見廻してゐるんですわ。」

「それが穿つた言葉だとすれば、あなたはこの際、それを口に出して言はなきやなりません、傲然と嚴めしく……實際あなた、自分が敗北したのでないつて事を、示してやる必要がありますよ。あの老人連や、主婦たちに示してやらねばなりません。えゝ、あなたなら出來ますとも。あなたは頭のはつきりして居る時には、天賦の才能があるんですもの。あゝいふ連中を一纏めにして、大きな聲でやるんですよ、大きな聲で。それから後で、『聲』や『取引所報知』の通信欄へ寄稿するんですね。いや、お待ちなさい、僕が自分で仕事にかゝりませう、僕がすっかり巧く拵へて上げませう。勿論、一層の注意を要しますがね。食堂の監督もしなけりやなりません。そ

れには、公爵も願ひしなきやならないし、あの……なにも願ひしなきやありません。ねえ君、かうして何もかも、始めからやり直さなければならぬ時に、我々を見棄てたりなんか出來ませんよ。ね奥さん、かうして最後にあなたが、知事公に手を引かれて出る、といふ段です。ときに知事公のご容體はいかがですか？」

「あゝ、あなたはいつてもあの天使のやうな人に、何といふ不公平な、間違つた批判を加へてゐらしたでせう！」とつぜん思ひかけない發作に驅られて、殆ど涙をこぼさないばかりに、手巾を眼へ持つて行きながら、ユリヤ夫人はかう叫んだ。

ピョートルもちよつと毒氣を抜かれた。

「飛んでもない、僕は——まあ、一體どうしたといふんです！……僕はいつも……」

「いゝえ、あなたは一度も、一度もあの人を本當に認めなすつた事がありません！」

「女といふものは、とても分りつこありやしない！」ひん曲つたやうな苦笑を浮かべつゝ、ピョートルはかう呟いた。

「たくは類のないほど正直な、優しい、天使のやうな人です！ 類のないほどいゝ人です！」

「飛んでもない、知事公がいゝ人だつて事は、僕等にも……知事公がいゝ人だつて事は、僕も始終認めて……」

「いゝえ、一度だつてそんな事はありやしません！ だけど、もうその話は止めませう。わたしの口の出し方も、随分まづかつたのですから。さつきあの貴族團長の細君がね、本當に憎らし



い、昨日の事で、二こと三こと皮肉を言つたんですのよ。」

「お、あの女は今きのふの皮肉どころぢやありません。あの女には今日の心配が別にあるんです。それに、あの女が舞踏會に來ないからつて、どうしてそんなに氣をお揉みになるんです？ 無論あんな醜事件にかゝりあつた以上、決して來られやしませんさ、或ひはあの女に罪はないかも知れない。けれど世間が承知しませんよ。もう手が汚れてるんですからね。」

「何ですつて、わたしよく分りません。なぜ手が汚れてるんですの？」とユリヤ夫人は不審げに相手を見つめた。

「いや、僕は何も保證する譯ぢやありませんがね、しかし町ぢうのものが、あの女の手引だと言つて、囃し立ててゐますよ。」

「何ですつて？ 誰を手引したんですの？」

「へえ、一體あなた方はまだご存じないのですか？」彼は巧みに驚愕の表情を示しながら叫んだ。「スタヴローギンとリザエータさんですよ！」

「えつ？ 何ですつて？」とわたし達は口を揃へて叫んだ。

「ぢや、本當にご存じないのですか？ ふゆう！ (と彼は口笛を吹いた)。飛んでもない悲劇小説が持あがつたのですよ。リザエータさんがいきなり貴族團長夫人の馬車から跳び出して、スタヴローギンの馬車へ乗移ると、そのまま『相手の男』と一緒に、スクワレーシニキイへ突つ走つてしまつたんです、しかも晝の日中にね。つい一時間ばかり前です。いや、一時間にもならぬ

くらゐです。」

わたし達は化石のやうになつてしまつた。が、勿論すぐに先を争つて、詳しい様子を訊ねた。けれど驚い事には、自分で偶然その場に居合せたと言つてる癖に、彼は何一つ順序だつた話が出來なかつた。とにかく、事件は次のやうにして起つたらしい。貴族團長夫人が『朗讀會』から、リーザとマヴリーキイを連れて、馬車でリーザの母(彼女は依然として足を病んでゐた)の家へ著いたとき、車寄せから二十歩ばかり隔てた小わきの方に、誰かの馬車が待構へてゐた。リーザは車寄せへ飛び下りるや否や、いきなりこの馬車の方へ駆け寄つた。馬車の戸は開いて、またばたりと閉つた。リーザがマヴリーキイに向つて、『勘忍して頂戴！』と言つたかと思ふと——馬車はまじぐらにスクワレーシニキイへ駛せ去つた。

一體それには前もつて打合せがあつたのか？ 馬車の中には誰がゐたか？ といふやうなわたし達の性急な間に對して、ピートルは何も知らないと答へた。たゞむろん前から打合せはあつたものに相違ない。また馬車の中には、當のスタヴローギンの姿は見分けられなかつたが、たゞん老僕のアレクセイでもゐたのだらう、といふくらゐの事だつた。「どうしてあなたはその場に居合せたのです？ また、確かにスクワレーシニキイへ行つたといふ事を、どうしてご承知なのです？」といふ間に對して、彼はたゞ偶然そばを通りかゝつたために、居合せたのだと答へた。彼はその時リーザの姿を見つけたので、馬車の傍へ駆け寄りさへした、との事である(それなのに、あの好奇心の熾んな男が、馬車の中に誰がゐるのか、見きはめなかつたと言ふのだ!)マ



ヴリーキイは、跡を追はうとしなかつたばかりか、リーザを引止めようときへ試みなかつた。そして、一杯の聲を張上げて、『あの子はスタヴローギンの所へ行くんです！ スタヴローギンの所へ！』と叫ぶ貴族團長夫人を、自分の手で押止めたほどである。この時わたしは我慢しきれなくなつて、憤然とピョートルを怒鳴りつけた。

「このやくざ者め、それはみんな貴様の仕組んだ事だ！ 貴様はそのために今朝一杯つぶしてしまつたのだ。貴様がスタヴローギンの手傳ひをしたんだ、貴様がその馬車に乗つて来て、貴様が自分で乗せたんだ……貴様だ、貴様だ、貴様だ！ 奥さん、こいつはあなたの敵ですよ、こいつはあなたの一生も臺なしにしてしまひます！ 氣をおつけなさい」

かう言ふと、わたしは一散に家を駆け出した。どうしてあの時あんな事を怒鳴つたのか、今に到るまで合點が行かない。自分でも驚いてゐるくらいである。しかし、わたしの想像はすつかり的中した。殆どわたしの言つた通りであつた事が、後になつて判明した。何よりも、彼がこの出来事を語つた時のうさん臭い態度が、餘りにもまざまざと見え透いてゐたからである。彼はこの家へ来たとき、非常な出来事として、第一番にこれを報告すべき筈なのに、お前たちはもう自分の來ない先に知つてゐるだらう、といふやうな顔つきをしてゐた——そんな事があるだけの短時間の中に、出来る筈がないではないか。よしんば知つてゐたとしても、彼が口を切るまで、黙つてゐる譯がないのだ。また町で貴族團長夫人の事を『噓し立てゝる』事など、やはりあの短時間の中に聞込めるものでない。そればかりか、彼は

あの話をしてゐる中に、二度までも、何だか妙に卑しげな、輕はずみな笑をにたりと洩らした。多分わたしたち馬鹿者をすつかり騙し了せた、とても思つたのだらう。しかし、わたしはこんな男に構つてゐる暇がなかつた。大體の事實だけは信じたので、我を忘れてユリヤ夫人の家を駆け出したのである。

この大破裂はわたしの心臓を刺し貫いた。わたしは涙の出るほど苦しかつた。いや、或ひは本當に泣いたかも知れない。もうどうしたらいいかまるで分らなかつた。まづスチエパン氏の所へ飛んで行つて見たが、何といふいまいましい人間だらう、また開けてくれなかつた。ナスターシヤは恭しげな聲で、いま横になつて休んでをられますと囁いたが、わたしは本當にしなかつた。リーザの家では、召使の者に色々聞く事が出来た。彼らも家出の事は肯定したが、それ以外のことは、自分達でもまるで知らなかつた。家の中はごたごた混雑してゐた。病める老夫人が氣絶したのである。マヴリーキイはその傍に附添つてゐたので、彼を呼出す事は出来ないと感じられた。ピョートルのことに就いては、召使もわたしの執拗な問に對して、あの人はこの二三日しきりに家を出入りして、ときによると、日に二度も來た事があると答へた。召使たちは沈み勝ちな様子をしてゐて、リーザの事は特別うやくしげな調子で語つた。みんな彼女を好いてゐたのである。彼女が自滅したことは——すつかり自滅してしまつたといふ事は、もうわたしに取つて疑ふ餘地がなかつた。けれど、この事件の心理的方面に到つては、まるでわたしには見當が立たなかつた。殊にきのふ彼女とスタヴローギンの間に、あゝいふ場面があつたばかりだから、なほさ

らである。町ぢう駈けずり廻りながら、もう疾くはこの噂を聞込んで、意地悪い悦びを感じてに相違ない知己の家々で、様子をたゞすのは不快でもあつたし、第一リーザに取つて恥辱になることだつた。しかし不思議な事に、わたしはダーリヤのもとへ立寄つたのである。尤も、會つてはくれなかつた（スタヴローギン家では昨日の事があつて以来、誰にも面會しないのだ）わたしは何のためにこゝへ寄つたのか、何を彼女に話さうと思つたのか、今だに我ながら合點が行かない。彼女のもとを辭すると、わたしはその兄の家へ赴いた。シャートフは氣難かしさうな様子をして、無言のまま聞終つた。序でに言つて置くが、彼はこれまでにない沈んだ心持であるらしかつた。何だか恐しく考込みながら、わたしのいふ事なども、やつと努力して聞いてゐる様子だつた。彼は殆ど一言も發しないで、いつもより餘計に大きく靴音を立てながら、部屋の中を隅から隅へ絶間なく歩き廻つた。もうわたしが階段を下りかけてゐると、彼は後ろから聲をかけて、リプーチンの所へ寄つて見ると怒鳴つた。

『あすこへ行つたらみんな分るよ。』

けれど、わたしはリプーチンの所へ寄らなかつた。そして、もうだいたい離れてゐたのに、途中からまたもやシャートフの所へ引返した。そして、戸を半分開けたまゝ中へは入らないで、少しの説明もなく言葉少なに、

『君、今日マリヤさんの所へ行つて見ませんか？』と命令するやうに言つた。

この返答に、シャートフは散々わたしを罵倒した。が、わたしはそのまゝ立去つた。忘れない

やうに、ちよつとこゝへ書いて置くが、彼はその晩わざ／＼町はづれまで出かけて、だいぶ暫く會はなかつたマリヤを訪れたのである。行つて見ると、マリヤはその上なく丈夫で機嫌がよかつたが、レビヤードギンはとつ附きの部屋の長椅子の上で、死人のやうに醉拂つて寝てゐた。それは正九時だつたとの事である。翌日往來でわたしに出會つた時、彼は自分の口から忙しげにこの報告をした。

わたしはもう夜九時すぎになつて、舞踏會へ出かけようと決心した。しかし、それは『幹事たる青年』といふ資格ではなく（それに、リボンもユリヤ夫人の所に残して來た）、たゞ制し難い好奇心のためである。つまり、あゝした出來事を町の人はどう噂してゐるか、それを自分の耳から聞かないで、黙つて觀察したかつたからである。それに、遠くの方からでもいいから、一目ユリヤ夫人の顔が見たくもあつたのだ。先ほどあんな風に夫人の所を駈け出したのが、恐ろしく心に咎めてならなかつたのである。

### 三

殆どばか／＼しいくらゐの出來事に充ちたこの晩と、恐ろしい『大團圓』を齎したその明方とは、いまだにまるで醜い悪夢か何ぞのやうに、わたしの脳裡にちらついて、この記録の最も重苦しい部分——少くもわたしに取つては——を成してゐるのだ。わたしは舞踏會には遅れたけれど、それでも行きついた時には、まだ濟んでしまつてはゐなかつた（實際この舞踏は、そんなにも早

く終るべき運命を擔つてゐたのである。わたしは貴族團長夫人の家の車寄せに駐けつけた時は、もう十時過ぎてゐた。今朝ほど朗讀會の行はれた例の白廣間は、僅かの間にもうすつかり飾附が出来て、町ぢりの人の（といふ豫想だつたので）主な舞踏場として、準備が整つてゐた。わたしは今朝ほど随分この舞踏會の成功を危ぶんでゐたけれど、それでも事實に現れたやうな事は、豫期してゐなかつた。上流の家庭から、たれひとり姿を見せなかつたのは勿論、官吏仲間でもちよつと地位のある者はみな背を向けた——これなどは極めて重大な徴候である。夫人令嬢などはどうかと言ふに、先ほどのピョートルの豫想は、まるで間違ひだといふ事が分つた（今になつて見れば、それも狡猾な誤魔化しだつたに相違ない）。集つて來たのはごく小人數で、男四人あたりには婦人が一人あるかなしの有様だつた。しかも、その婦人といふのが大變な代物なのだ！『どの馬の骨か知れないやうな』聯隊つき尉官の細君や、郵便局員や小役人の家内といつたやうな、ごみ／＼した連中のほかに、娘をつれた三人の醫者の細君、二三人の貧乏地主の妻、前にちよつと紹介して置いた書記の姪と七人の娘、商家の内儀連——これがまあ、ユリヤ夫人の期待してゐたものだらうか？ 商人連でさへ半分もやつて來なかつた。

男の方はどうかといふに、町の名士は揃つて顔を見せなかつたが、それでも人數だけは、うよ／＼するほど集つてゐた。しかし全體の印象は、何だか妙なうさん臭いものだつた。勿論、幾人かの物靜かな將校達も、細君同道で來てゐたし、例の七人の娘をつれた書記のやうに、相當身分のある一家の主といつたやうな人もだいぶ見えてゐたが、かうしたおとなしい、ごみ／＼した連

中でさへ、言はば『止むを得ず』顔を出したに過ぎない。現にこの連中の一人がさう言つたのである。ところが、いま一方から見ると、わい／＼の彌次馬連や、今朝わたしやピョートルが、切符なしに入れて貰つたのではないかと疑つたやうな連中は、今朝よりずつと増えてゐた。彼らはまづ暫く食堂に坐り込んでゐた。それどころか、やつて來るといきなり、まるで前から謀し合せた場所か何ぞのやうに、ずつと食堂へ通つて行くのだ。少くもわたしにはさう思はれた。食堂は一番はじめの廣い室に設けてあつた。そこではプローホルイチが、俱樂部の庖廚のありとあらゆる誘惑を移して、下物や飲料をこれ見よがしに並べ立てながら、陣取つてゐた。

わたしはこゝでたゞ穴が明いてないと言ふだけのフロックや、思切つて舞踏會らしくない怪しげな服を著た連中が、いくたりかゝるのに氣がついた。彼らは幹事の恐ろしい骨折で、ほんのちよつとの間だけ、酔拂ひ騒ぎを我慢してゐるに相違ない。中にはどこからやつて來たのか、よその町の人間も少し交つてゐた。勿論、ユリヤ夫人の發議で、舞踏會は思ひきり民主的なものにする豫定だつたのは、わたしも承知してゐた。『もしたゞの平民でも、切符代を拂ひさへすれば、入場を拒絶しない事にしよう。』夫人は委員會の席上で、かういふ言葉を大膽に言放つた。しかし、それはこの貧しい町の平民がたゞの一人だつて、切符を買はうといふ氣を起す筈がないのを、十分信じ切つてゐたからである。が、いかに委員會が民主的傾向を持つてゐるにもせよ、こんな破れフロックを著た、あやしげな連中を入れようとは、思ひも寄らなかつた。一たい誰がどんな目的で入れたのだらう？ リプーチンとリヤムシンは、もう幹事のリボンを剝がれてしまつた

(尤も、『文學四班舞踏』に加つてゐるので、廣間の中に居合はしたけれど)。しかし、リプーチンの跡を襲つたのは、意外千萬にも、ステュパン氏との争ひに依つて、誰よりも一ばん朗讀會を汚した例の神學生だし、リヤームシンの後任は當のピョートルだつた。かういふ有様なもの、萬事はおよそ想像がつくではないか！

わたしは努めて、人々の會話に耳を澄したが、中には奇怪さに呆れ返るやうな意見もあつた。例へばある一團では、スタヴローギンとリーザの一件を仕組んだのはユリヤ夫人で、夫人はその禮として、スタヴローギンから金を取つたと斷言したばかりか、その金額さへ明かに名指すのであつた。彼等の話によると、この會もその目的で開かれたので、町の人も事の真相を悟つたために、半分以上顔を出さないのだ。ところで亭主のレムブケーは、あんまり小つぴどくやられるので、『頭の調子を變にしてみました。』そこで、ユリヤ夫人は氣のちがつた亭主を自由に操つてゐるのだ——この言葉と共に、粗野なしや腹れた、腹に一物ありげな笑ひ聲が、どつと起つた。舞踏會の事もやはり恐ろしくこき下してゐるが、ユリヤ夫人に至つては、もうまるつきり無遠慮に罵倒するのであつた。全體として、これらの會話はだらしのない、途切勝な、ざわ／＼した、一杯機嫌の饒舌なので、よく咀嚼して、何かの意味を掴まうなどといふ事は、不可能であつた。

この食堂には、たゞ何といふ意味もなく、陽氣に燥いでゐるやうな連中も陣取つてゐた。その間には幾たりかの婦人すら交つてゐるが、それはどんな事があつても、びくともしないしたゝか者らしかつた。おもに夫君同道の將校夫人で、恐ろしく愛嬌がよくて、陽氣さうにしてゐる。彼

らは組を作つて、別の卓に向ひながら、ひどく愉快さうに茶を飲んでゐた。かうして食堂は、集つて来た人々の半数のために、暖い避難所といふ形になつてしまつた。けれど、いままじ經つたらこの群集がどや／＼と、廣間へ押しかけて行くに相違ない、かう思つたばかりでも恐ろしい氣がした。

その間に、白廣間では例の公爵も加つて、三度ばかり貧弱な四班舞踏があつた。娘たちが踊ると、親はそれを見て悦んでゐた。しかし、こゝでもちよつと身分のある人々の中には、いゝ加減娘を悦ばせたら、『おつ始まらない中に』巧く逃出したいものだ、と考へてゐる連中が大分あつた。誰でも彼でも差別なしに、必ず『おつ始まる』に相違ないと固く信じてゐた。當のユリヤ夫人の心持を描き出す事は、わたしに取つて殆ど不可能である。わたしはかなりまちかく夫人の傍を通り過ぎたけれど、別に話しはしなかつた。入りしなに會釋をしたが、夫人はわたしに氣がつかないで、それに答へようとしなかつた(實際、氣がつかなかつたのだ)。その顔は病的な表情を呈して、目には嘲るやうな傲慢な色が浮かんでゐたけれど、きよと／＼と落ちつきがなくて、不安さうであつた。見受けたところ夫人は、自分で自分を抑制しようと苦しんでゐるらしい。一體それは何のため、誰のためだらう？ 彼女は是非この場を去つて、夫を(これが一ばん大切な事である)つれて行かなければならなかつたのだ。けれども、彼女は踏みとどまつた！ もう顔を見ただけでも、夫人の『目はすつかり明いて』しまつて、このうへ何物をも期待できないと覺悟してゐるのは、ちやんと見えてゐるのであつた。夫人はもうピョートルを、傍へ呼寄せようともしな

かつた。こちらでも自分から夫人を避けてゐるらしい（わたしは食堂で彼を見かけたが、恐ろしく陽氣らしい風であつた）。が、それでも夫人は舞踏會に踏止まつてゐた。そして、レムブケーをちよつとの間も放さないやうにした。あゝ、彼女は最後の瞬間までも、偽りならぬ心からの憤激をもつて、夫の健康を云々する當てこすりを、斥けたかつたのである、今朝ほどでさへさうだつたのだ。しかし、いま彼女の目はこの點に關しても、開かれなくてはならなかつたのである。

わたしはどうかと言ふに、一目見るなりレムブケーの様子が、今朝よりずっと悪くなつてゐるやうに思はれた。まるで茫としてしまつて、自分が今どこにゐるかといふ事すら、はつきり分つてゐないらしかつた。とき／＼彼は、思ひがけない嚴めしい顔をして、傍の人を振返つて見るのであつた。わたしなぞも二度ばかり睨まれた。一度は何やら話さうとして、大きな聲で口を切つたが、了ひまで言はずに止めたので、ちやうど傍に居合はせた一人のおとなしい老官吏などは、殆どおびえ上らないばかりだつた。しかし、白廣間に居合した公衆の中でも、このおとなしい部に屬する人達でさへ、沈んだ様子でこそ／＼と、ユリヤ夫人を避けて通つたが、それと同時に恐ろしく奇妙な視線を、知事公の方へ投げかけた。その露骨な刺すやうな光りは、これらの人々のびく／＼した様子と、餘りにも不調和な感じを與へるのであつた。

「その様子がわたしの胸へぐつと來ましたの。そのとき始めて、わたしもレムブケーの事を感じづくやうになりました。」とユリヤ夫人は後でかう自白した。

さうだ、夫人はこの點についても責任があるのだ。先ほどわたしの逃げ出した後で、夫人はビ

ートルと相談のうへ、舞踏會を開く事にしよう、そして自分も舞踏會に出席しようとした時、今朝の朗讀會で『理性を震撼されてしまつた』レムブケーの書齋へ入つて行つて、再びありとあらゆる祕術を盡して夫を誘惑し、一緒に引張り出したものに相違ない。しかし、いま夫人の苦しみはどれくらいか知れないのだ！ が、それでもこゝを去らうとしなかつた！ 矜持の惱みか、それとも單に分別を失くしてしまつたのか——それはわたしには分らない。彼女は不斷の傲岸な性質にも似ず、卑屈な微笑を浮かべながら、二三の婦人に話しかけようとした。が、こちらは妙にてれてしまつて、『は』とか『いえ』とかいふ迂散くささうな、簡単な返事で胡麻化しながら、なるべく夫人を避けようとする風だつた。

この町で金箔つきの名士とされてゐる人で、舞踏會に出席してゐたのは、前にちよつと話した事のある、勢力家の退職將官一人きりだつた。ほかでもない、スタヴローギンとガガーノフの決闘後、貴族團長夫人の所で、始めて『社會の焦燥のために扉を開けた』人だ。彼は物々しげに部屋を歩き廻りながら、耳を澄したり、目を敏てたりしてゐたが、その様子は如何にも『おれが來たのは、單なる氣晴しのためではなく、むしろ人心研究のためなのだ』といふ事を、見せたくて堪らないらしかつた。彼は到頭ユリヤ夫人のかたへに陣どつて、その傍を一足も離れようとしなかつた。察するところ夫人を勵まして、安心させようといふつもりらしかつた。疑ひもなく彼はごく好人物で、なか／＼地位のある人だし、それにもう餘程の老齡だつたから、この人の口から出た同情なら、黙つて聞いてゐても差支はないのだつたが、この老耄れたお喋りが、僭越に

も自分に同情して、『俺が同席してやるのは名譽だぞ』といふやうな見で、保護者氣取りであると思ふと、夫人はいま／＼しくて堪らなかつた。けれど、老人は少しも傍を離れないで、やみ間なしに喋り続けるのであつた。

「何でも、町は七人の聖者がなくては保たぬと言ふが……確か七人でしたな、正確な數は憶えてをらんですが。ところで、この七人の……正真正銘な聖者の中で……この舞踏會を訪ふの光榮を有した者は、果して幾人あるかは知りませんが、しかしさういふ人の出席があるにも拘らず、わたしは少しこゝろが險呑に思はれ出しましたよ。ご免なさい、奥さん、さうぢやありませんか。わたしは諷喻的に言つとるのですが、先刻食堂へ行つて、無事に戻れたのを悦んじますよ……あの大事なブローホルイッチは、自分の席にぢつと坐つてをられないのです。きつと朝までには、店ごと持つて行かれてしまひますよ。いや、これは冗談ですよ。わたしはたゞあの『文學四班舞踏』といふのは、どんなものかと待兼ねとるのです。それが濟んだら、寢床の中です。まあ、レウマチ病みの年寄のことだから、どうか赦してやつて下さい。わたしははやく寝る習慣でしてな。あなたも歸つて、『ねんね』なすつたら如何です、子供にいふ言ひ草ぢやありませんか……。實は、わたしは若い美人を見に来たんです……勿論、さういふのが豊富に揃つてゐるのは、こゝよりほかには見られませんからなあ……みんな川向ふから來るのですが、わたしはあちらの方へ出かけませんのでな。ある將校の……どうも獵兵隊のらしい……細君などはなか／＼悪くないですなあ、實際。そして……そして自分でもそれを心得とりますよ。わたしはそのお轉婆さんと話

して見ましたが、なか／＼活潑なもんですよ。そして……いや、所で、娘さん方もやはり生き生きしとりますなあ、しかし、それだけの事で、いき／＼しとると言ふほかには、なんにもありません。尤も、わたしは厭ぢやないですなあ。全く蕾のやうなのがあります、たゞ層が少し厚いですがな。全體として露西亞美人の顔には、整つたのが少いですなあ、そして……そして、幾分煎餅みたいにべちゃんこになつとりますよ……ご免なさい、しかしさうぢやありませんか。但し、いゝ目をしとります……笑つたやうな目付でね。かういふ蕾のやうな娘さん達も、若い盛りの二年……いや、三年ぐらゐは實に素つばらしいものだが、それからはもう段々ぶく／＼脹れて來て……夫の心にかの悲しむべき冷淡を起させるのです。こいつがまたずるぶん、婦人問題の發達を助長するものでしてな……尤も、わたしの婦人問題の解り方が違つとれば、この限りに非ずですよ……ふむ！ なか／＼いゝ廣間だ。部屋々々の飾も悪くない。もつと悪くたつてよかつたのだ。樂隊などは、ずつと悪くて構はなんだのだ……しかし、もつと悪くなくちやいかんとは言ひませんよ。が、全體として婦人たちの少いのは、よくない感じを與へますなあ。衣裳の事は申しますまい。あの鼠色の洋袴を穿いた男が、あゝ臆面もなしに、公然とカンカン踊りをやつとるのは、けしからん。もしあの男が嬉しくて夢になつとるのなら、それならわたしも免してやる、あれは町の藥劑師だから……しかし十時過ぎには、幾ら藥劑師だつて早過ぎる……さつき食堂で、二人のやつが喧嘩を押し始めたが、それでも引摺り出されはしなかつた。まだ十時頃だつたら、たとへ町の風がどうだらうと、あんな馬鹿者は引摺り出さなくちやいかんです……しかし、二時

すぎたら、わたしも敢て言ひませんよ。この時刻には、もう輿論に讓步せにやなりませんからなあ——但し、この舞踏會の命が、二時頃までであるとすればの話ですよ。ブルワー夫人はたうとう約束に背いて、花を寄越しませんでしたなあ。ふむ。あの人も花どころの騒ぎぢやないでせう、憫れな母よ！ときに、リーザは可哀さうな事をしましたなあ、お聞きでしたか？ 何でも秘密ないきさつがあるさうだが……役者はまたしてもスタヴローギンだといふ事ですな……ふむ！わたしはもう歸つて休みたいやうな氣がしますよ……船ばかり漕いどりますからなあ。一體あの『文學四班舞踏』はいつなんです？」

遂に『文學四班舞踏』が始つた。近ごろでは、來るべき舞踏會の噂がどこかで始ると、必ず話題はすぐ様この『文學四班舞踏』に落ちて行くのであつた。實際どんなものか、誰ひとり想像がつかないので、異常な好奇心を唆つたのである。かういふ譯で、成功は疑ひない筈なのに、まあ何といふ幻滅だつたらう！

今まで閉つてゐた白廣間の兩わきの戸がさつと開いて、突然いくたりか假裝の人が現れた。一同は夢中になつて、それを取巻いた。食堂にゐた連中も、一人のこさず一ときに廣間へなだれ込んだ。假裝の人は舞踏の用意にそれ／＼位置を定めた。わたしは巧く前へ潜り出て、丁度ユリヤ夫人と、フォン・レムブケーと、例の將軍の後に陣取つた。そのとき今まで姿を見せなかつたピートルが、ひよいとユリヤ夫人の傍へ飛び出した。

「僕はいままで食堂にゐて、觀察してたのです。」ちやうど悪い事をした小學生みたいな顔つ

きをして、彼は低い聲でかう囁いた。尤も、その表情は更に夫人を苛立たすために、わざと拵へたものだつた。

こちらは憤怒の餘りかつと赤くなつた。

「せめてかうなつてしまつたら、もう嘘をつかないやうにすればいゝのに、何といふ圖々しい人だらう！」夫人は怵へ兼ねて、思はず聲高にかう言つたので、はたの人にも聞えたくらゐである。

ピートルは自分の成功にしごく満足な體で、傍を飛びのいてしまつた。

この『文學四班舞踏』なるもの以上に、みじめで、俗な、愚にもつかぬ、味もそつけない譬喩は、ちよつと想像するのも難かしいくらゐであつた。これより以上町の人に不向きなものは、とても考へつく事が出来ない。ところで噂に依ると、これを考へつたのは、カルマジノフだとの事である。尤も、これを實際に組立てたのはリプーチンで、ギルギンスキイの家の會議に出てゐた、例の跛の教師も相談に乗つたのだ。しかし、カルマジノフは何と言つても、その立案者であるばかりでなく、人の話では、自分でも何かある特別な役を引受けて、假裝しようと思つたほどだとの事である。四班舞踏は、六組のみじめな假裝者から出來てゐた——尤も、本當の假裝といふ事も出來ないくらゐだ。なぜつて、みんな殆ど他の者と、變りのない假裝をしてゐるかである。例へば、一人の餘り背の高くない中年紳士は、燕尾服——つまり、他の者と同じやうな假裝をして、分別くさい胡麻鹽の頰髯を生やし（これは頸へ括りつけたもので、假裝と言へるものはこれ一つだつた）、殆ど少しもほかへ歩かないで、せか／＼と細かく足を刻みながら、物々

しい表情を顔に浮かべて、足ぶみをしいく踊つてゐた。彼は控へめな調子で、しや嘎れた低音を立てゝゐるが、この聲のしや嘎れたところが、ある有名な新聞を象徴する筈になつてゐた。この人に向ひ合つて、XとZの大入道が二つ踊つてゐた。この文字は、二人の燕尾服にピンで止めてあつたが、一體このXとZが何を意味してゐるのやら到頭わからずに済んでしまつた。

『潔白なる露西亞の思想』は、燕尾服に手袋と眼鏡、それに——枷（本當の枷なのだ！）を篋められた、中年紳士に依つて表はされてゐた。この紳士は、何か『一件書類』の入つた折靴を、小脇に抱へてゐた。衣囊からは外國から來たらしい封を切つた手紙が覗いてゐたが、これは疑をさし挟むすべての人に對して、『露西亞思想の潔白』を證明する證書だとの事だ。これは幹事が口頭で説明したので、實際衣囊から覗いてゐる手紙を、讀んで見る事は出來ない譯だ。潔白なる『露西亞の思想』は、祝杯の音頭でも取りたさうに、差上げた右手に杯を持つてゐた。兩側にはこの『露西亞の思想』と並んで、髪を短く切つた『虛無主義女』が二人、これもちよこくと足を刻んでゐる。ところが、相手にはやはり燕尾服を著た中年紳士が踊つてゐたが、これは重い櫂の棍棒を手にしてゐる。それがある新聞——彼得堡のではないが、なか／＼脅しの利く新聞を表したもので、『こいつで一つ見舞つたら、大分きゝ目があるぞ！』といふやうな顔をしてゐた。しかし、棍棒など持つてゐる癖に、この紳士は『潔白なる露西亞の思想』が、眼鏡ごしに自分の方へ注ぐ視線を、正視することが出來ないで、なるべくわきを見るやうに努めてゐたが、Pas de deux（舞の段になると、まるで身の置場がないやうに、體をひねつたり曲げたりした。きつと良心の苛責

に堪へなかつたのだらう……しかし、こんなばか／＼しい趣向を、みんな數へ上げるのは止さう。どれもこれも似たり寄つたりなので、しまひにはわたしも恥しくて堪らなくなつた。ところが、丁度これと同様な羞恥とも言ふべき心持が、ほかの人たちの心にも反射されたのである。食堂から現れた、取分けむづかしげな顔つきの人達にさへ、同じ表情が讀まれた。暫く一同はむつつき押黙つて、腹立たしげな怪訝の目で眺めてゐた。人間は羞恥を感じると、よく腹を立てゝ皮肉を弄したくなつて來るものだ。わが公衆も段々とざわついて來た。

「一體あれは何事だ？」とある一團の中で、食堂の給仕が呟いた。

「いづれ何か馬鹿げた事さ。」

「何か文學のことなんだ。『聲』（新聞）を批評してゐるのさ。」

「それが俺に取つてどうしたと言ふんだ？」

また別な一團では、

「馬鹿なやつらだ！」

「いや、あの連中は馬鹿ぢやない。馬鹿なのは我々だ。」

「なぜ君が馬鹿なんだい？」

「何も僕が馬鹿だとは言やしないよ。」

「君が馬鹿でなけりやあ、僕はなほさらの事ぢやないか。」

第三の團體では、



「あいつ等みんな蹴つ飛ばしてやるといふ。いや、しかし勝手にさしとけばいふのさ！」

「廣間ごと撼ぶつてやりたいなあ！」

第四の團體では、

「レムブケー夫婦は恥かしくもない、よく見てみられるなあ！」

「なぜあの二人が恥かしがるんだい？ 君だつて別に恥かしい事はないだらう？」

「いや、僕も恥しい。第一、あいつは縣知事ぢやないか。」

「君なんか豚だよ。」

「こんな思切つて平凡な舞踏會は、わたし今まで一度も見ることがない。」ユリヤ夫人のすぐ傍にゐた一人の婦人が、さも聞えよがしに毒々しくかう言つた。

それは四十ばかりのでつぷり肥つた婦人で、けばくしい著物をきて、頬に紅を塗りこくつてゐた。彼女は、町でも殆ど誰一人知らぬものがなかつたけれど、交際するものは一人もなかつた。さる五等官の未亡人で、夫の遺産としては木造の家一軒と、僅かな年金ばかりだつたが、相當の暮らしをして、馬車まで抱へてゐた。二箇月ばかり前、彼女は第一番にユリヤ夫人を訪問したが、玄關拂ひを食されてしまつたのである。

「こんな事とは、前から察しがついてたんだけど。」圖々しくユリヤ夫人の顔をまともに見据ゑながら、彼女はかう言ひ足した。

「そんなにお察しがついてたのなら、なぜ出かけていらしつたのです？」ユリヤ夫人は怵へ兼

ねてかう言つた。

「えゝ、元來が正直なもんですからね。」と元氣のいふ婦人は、斷切るやうにかう言つた。そして、恐ろしくそはく／＼と體を動かし始めた（どうかして突つかゝつて行きたくて堪らないらしい）。しかし、例の將軍が中へ割込んだ。

「奥さん」と彼はユリヤ夫人の耳に口を寄せた。「本當にお歸りになつた方がいゝですよ。わたし達はあの連中に窮屈な思ひをさせるばかりだ。わたし達がなくなつたら、みんな思ふ存分うかれませうて。あなたは何もかも、するだけの事をされたのです。あの連中のために、舞踏會を開いておやりになつたのだから、もうそれから後は勝手にさしといたらいゝです……それに知事公も、どうやら本當にお氣分がよくないやうだし……何か厄介な事が持上らん中に……」

けれどももう晩かつた。

四班舞踏の間ぢう、いきどほろしげな怪訝の表情で、踊手を眺めてゐたレムブケーは、見物の間で下馬評が始つたとき、不安さうに邊りを見廻し始めた。このとき始めて、食堂で騒いでゐた連中の顔が眼に映つたのである。彼の目は極度の驚愕を浮かべた。とつぜん聲高な笑ひが四班舞踏の一手と共に、見物の中につつた。例の棍棒を持つて踊つてゐた『脅しの利く地方新聞』の發行者は、たうとう『潔白なる露西亞の思想』の眼鏡ごしの視線に堪へ兼ねて、體の隠し場がなくなつたので、だしぬけに逆立で眼鏡の方へ歩き出した。それはつまり、『脅しの利く地方新聞』の常用手段たる、常識の逆立的曲解を象徴する筈なのであつた。ところで、逆立で歩けるのは、リ

チャムシンよりほかにないから、彼がこの棍棒を持った新聞の役を引受けたのである。ユリヤ夫人も、逆立ちで歩くななんて事は、夢にも知らなかつたのである。「あれはわたしに隠してたのです、隠してたのです。」と彼女は後でわたしに向つて、絶望と憤懣に悶えながら、かう繰返した。もちろん群集の哄笑は、誰に何の必要もない諷刺の意味を喝采したのではなく、単に裾のべらべらした燕尾服を着て、逆立するのを興がつかたに過ぎない。レムブケーはかつとなつて、體をぶるぶる慄はせ始めた。

「やくざ者め！」リヤムシンを指さしながら彼は叫んだ。「あの悪黨を掴まへて、引つくり返せ……足をひつくり返せ……頭を……頭を上に向けるんだ……上へ！」

リヤムシンはくるりと立上つた。笑ひ聲は一さう高まつた。

「あの笑つてる悪黨どもを、みんな追出してしまへ！」とだしぬけにレムブケーは命令した。群集は急にざわ／＼どよめき始めた。

「それはいけませんよ、閣下。」

「公衆を悪罵する事は出来ません。」

「自分が馬鹿なんだ！」といふ聲がどこか隅の方から響いた。

「海賊！」また別な隅から誰かがかう怒鳴つた。

レムブケーは聲のする方へくると振返つて、顔を眞蒼にした。と、鈍い微笑がその唇に浮かんだ——不意に何か思ひ出して、合點が行つたやうな具合だつた。

「皆さん。」ユリヤ夫人は、詰寄せて来る群集に向つて、かう言つた、それと同時に夫の手を引立てながら。「皆さん、アンドレイを容赦してやつて下さい、アンドレイは病氣なのです……容赦して下さい、赦してやつて下さい、皆さん！」

夫人が「赦してやつて下さい」と言つたのを、わたしは本當に自分の耳で聞いたのである。場面の變化は驚くばかり急激だつた。しかしわたしははつきり憶えてゐるが、丁度このユリヤ夫人の言葉と共に、見物の一部が物に摺おひえたやうに、急いで廣間ホールの外へ遁れ出したのである。誰か歇ヒキ私利らしい女の聲で、

「あゝまた今朝と同じ事になつた！」と涙を含んだ調子で叫んだのさへ、思ひ出すことが出来る。殆どおし合ひへし合ひと言つていくくらゐな、この混雜のたゞ中へ、全く「今朝と同じ」やうに、また一つの爆彈が投げられたのである。

「火事だ！ 川向う一面の火事だ！」

この恐ろしい叫びは、どこで一番に起つたのだらう——廣間ホールの中か、それとも誰か控室の階段から駈込んだのか、確かな事は記憶してゐないが、それに續いて起つた恐慌は、とても話しに出来るものでない。舞踏會に集つた群集の半分以上は、川向うからやつて來た、あの邊の木造の家の持主でなければ、その借家人であつた。人々は窓の方へ飛んで行つて、忽ちの中に窓かけを押し開き、帷カーテンを引きちぎつた。川向うは一面の火焰であつた。尤も、火事はまだ始つたばかりだが、まるで方角ちがひの場所が三ところも、焔ヒキに包まれてゐた——それが人々は戦慄ヒキしたのである。

「つけ火だ！ シュピグーリンの職工だ！」と叫ぶ聲が群集の中に起つた。中でも、極めて特色のある二三の叫び聲を、今でもよく憶えてゐる。「あゝ、俺はもうかうあるだらうと胸に感じてゐた、つけ火があるだらうと、この二三日蟲が知らせてゐた！」

「シュピグーリンの職工だ、シュピグーリンの職工だ、ほかに誰がするものか！」

「きつと留守の間につけ火をしようと思つて、わざとわたし達をこゝへ集めたんだ！」

この最後の最も驚くべき叫びは、女の聲であつた。それは自分の家を焼かれた『小箱夫人』の、企まざる自然の叫びに相違ない。すべてのものは出口へ雪崩れよせた。毛皮外套や、頭巾や、婦人外套を選分ける時の控室の雑沓、溜上つた婦人たちの金切聲、令嬢たちの悲鳴、こんな事はもう今さら書くまでもない。盜賊的行爲などがあつたらうとは信ぜられないが、何しろかういふ混雑の際だから、自分の外套が見つからないで、そのまますこすこ歸る人が出て來たのも、別に不思議な事ではない。これはその後長いあひだ町うちで、途徹もない馬鹿げた誇張や、いろんなおまけをつけて、言傳へられ事である。レムブケーとユリヤ夫人は群集のために戸口の處で、殆ど壓潰されさうになつた。

「みんな引摺まへろ！ 一人も出しちやいかんぞ！」ひし／＼と押掛けて來る群集の上に、嚴めしく手を差伸べながら、レムブケーはかう絶叫した。「みんな一人々々嚴重に身體検査をするのだ、今すぐ！」

廣間ホシムの中から亂暴な罵詈の聲が聞えた。

「アンドレイ！ アンドレイ！」もう極度の絶望に陥つてしまつて、ユリヤ夫人はかう叫んだ。

「この女を一番に捕縛しろ！」こちらは夫人の方へ、物すごく指を差向けながらまた喚いた。

「この女から一番に身體検査をするんだ！ この舞踏會は、明かに放火の目的をもつて開かれたのだ……」

夫人はあつと叫んで閑絶した。（おゝ、これは無論、本當の氣絶なのである！）わたしと將軍は救助に駆け寄つた。そのほかにもこの難關に當つて、わたし達を助けてくれた人があつた。その中には、幾たりかの婦人さへ交つてゐた。わたし達は不幸な夫人を、この焦熱地獄から救ひ出して、馬車の中へ擔ぎ込んだ。けれど、彼女が正氣に復したのは、やつと馬車が家へ近づいた時であつた。そして、彼女の最初の叫び聲は、またしてもアンドレイの事だつた。一切の幻がくづれ落ると共に、夫人の前に残つたのは、たゞアンドレイ一人のみとなつた。人々は醫師を迎へにやつた。わたしは夫人の傍に一時間からついてゐた。公爵もやはり同様だつた。將軍は寛大心の發作に驅られて（尤も、自分でもだいたい面くらつてゐたが）、夜つびて『不幸な夫人の病牀』を離れないと言つてゐたけれど、十分ばかり経つと、まだ醫者の來ない中に、肘椅子の上で寢込んでしまつた。で、わたし達はそのまま打ちちやつて置いた。

舞踏會から火事場へ駆けつけた警察署長は、わたし達の後から巧くレムブケーを連れ出して、一生懸命、閣下に向つて『お休みにならなければなりません。』と勧めながら、ユリヤ夫人の馬

車へ乗せようとした。どうして強つてもさうさせなかつたのか、わたしは合點が行かない。無論、レムブケーは休む事などには耳を借さうともせず、たゞ火事の方へ飛んで行かうとするのであつた。が、そんな事は署長に取つて理由にならない。たうとう彼は、自分の腰掛馬車ドロンキに乗せて、火事場へ連れて行つてしまつた。あとで彼の話した所に依ると、レムブケーは途中のべつ、何やら身振り手眞似をしながら、『たうてい實行の出来ないやうな突飛な事を』言ひ出したとのことである。その後になつて、閣下は『思ひがけない驚愕のために』、その時もう精神錯亂に陥つてをられた、といふ風に報告されたのである。

舞踏會がどんな風に終つたか？ そんな事などは、今さららしく言ふまでもない。幾十人かののらくら者と、それに幾たりかの婦人たちさへ一緒になつて、會場へ居残つたのである。警察の監督などは少しもなかつた。音楽隊は歸さなかつた。歸らうとしかけた樂手は、小つびどく撲りつけられた。夜明頃までには、殆ど『プロホルイッチの屋臺ごと』浚つて行つて、人々は滅茶滅茶に飲みまくつた。そして、誰はゞかることもなく、カマリンスキイ（卑俗な踊り）を踊つたり、廣間（広間）を汚したりして、やつと明方に近い頃、この連中の一部は、燃残つてゐる火事場の方へ、また新しく一騒ぎに出かけたのである……ほかの連中はそのまま廣間に泊り込んで、死人のやうに酔潰れたなり（その他の結果は推して知るべしである）、天鵞絨（ビロイ）の長椅子や床の上に倒れてしまつた。朝になつて、人々は早速この連中を、手取り足取り往來へ引摺り出した。縣内の婦人家庭教師扶助を目的とする慈善會も、かうして終りを告げたのである。

## 四

火事は放火といふ事が明瞭なために、一さう川向うの住民を驚かしたのである。こゝに注意すべきは、まづ『家が焼けてる』といふ最初の叫びと共に、すぐ後から『シェビグーリンの職工どもがつけたのだ』といふ叫びが起つたことである。しかし今では、實際もとのシェビグーリンの職工が三人だけ、放火に關係してゐたけれど、ほんのたゞそれだけで、他の連中の輿論にも官憲にも、全く無罪と認められてゐる。この三人のやくざ者の他に（そのうち一人は捕縛されて自由したが、後の二人は今だに姿を晦ましてゐる）、懲役人のフェーヂカも放火に關係してゐたのは、疑もない事實である。目下のところ、火事の原因について分明してゐるのは、まあこれくらゐのことである。尤も、いろ／＼な臆測となると、これはもう別な話だ。一體この三人のやくざ者は、どういふわけでこんな事をしたのか、誰かに使唆されたのか？ この間に答へることは、今でもしごく困難である。

火事は烈しい風と、川向う一帯が殆ど全部木造家屋なのと、そして、おまけに三方から火を放つたのとで、みる／＼急激に擴つて、殆ど信じられないやうな力で、一區劃全體を嘗め盡した（尤も、放火は寧ろ二方から、と言つた方が正確なくらゐる。第三の火の手は燃上ると同時に、素早く消し止めてしまつたからである。このことはまた後で書かう）。しかし首都の新聞では、この町の災厄をかなり誇張して書いたやうである。實際焼けたのは、ざつとした勘定で、川向う

全體の四分の一を出なかつた（或ひはそれより少いかも知れぬ）。消防隊は町の面積と人口に比較して、割に微力なものであつたが、極めて精確な犠牲的な働き振を示した。けれど、もし朝風が變つて、夜明ちよつと前にばつたり落ちてしまはなかつたら、住民と協力して活動した消防隊も、さしたる効果を齎らす事は出来なかつたに相違ない。

舞踏會を逃げ出してから一時間ほどたつて、わたしが川向うへ駆けつけたときには、火はもうその威力の頂上だつた。川に沿つた通りは、一面に焔の海となつて、晝のやうに明るかつた。火事の光景を詳しく描くのは止めしよう。露西亞で、そんな事を知らないものはないのだから。燃熾つてゐる町に近い横町々々は、名状すべからざる混亂と雜沓の巷と化してゐた。そこでもう火の襲來を覺悟して、住民は家財を引出してゐた。が、それでも住ひの傍を離れないで、みんな引張り出した箱や、羽根布團の上に坐つたまゝ、わが家の窓下で様子を見てゐた。男連の一部は、苦しい勞働に一生懸命だつた。容赦なしに扉を叩き毀したり、火に近い風しものぼろ小屋みたいなものさへ、どん／＼倒してゐるのであつた。眼を醒したばかりの子供が泣き出すやら、もう道具を引出した女どもが、唱ふやうな調子で訴へながら、喚くやらしてゐた。けれど、まだ運び出しきれなかつた女たちは、今のところ黙り込んで、せつせと働いてゐる。火花や火の粉が、遠くまで飛んで行つた。人々は出来るだけそれを消し止めてゐた。火事場の傍には、町の隅々から駆けつけた見物人が、うよ／＼するほどごつた返してゐた。中には、消す方の手傳ひをするものもあつたが、ほかの者は面白さうに見物してゐた。

夜の大火はいつでも人を苛立たすやうな、同時に浮立たすやうな印象を與へるものである。花火はこの理を應用したのだ。しかし花火の方は優美な、規則正しい一定の形を保つて擴る上に、全く危険の虞れがないから、三鞭酒シヤンパンを一杯かたむけた後のやうな、遊戯的な軽い印象しか起さない。ところが、本當の火事となると、まるで別である。こゝでは恐怖と個人的危険の感じとが（何と言つても、さういふ感じは幾分ある）、夜の火事に特有の浮立たすやうな印象の蔭から、見てゐる人に（もちろん、焼けた家の人ではない）一種脳髓の震撼ともいふべきものと、自分自身の破壊的本能を呼起すのである。しかもこの本能はどんな人の心にでも——どんなに意氣地のない、大勢の家族を抱へた下級官吏の心の底にも、潜んでゐるのだ——かうした陰慘な感觸には、如何なる場合でも、人を酔はすやうなところがある。

『わたしは火事といふものを、一種の満足感なしに、ぢつと見てゐられるかどうか、全く自分でも分らないやうな氣がするよ。』

これはスチエパン氏が、偶然ある火事に行會つて、その第一印象に支配されながら、歸つて來た後わたしに言つたのを、一言一句たがへずに引用したものだ。とは言へ、かうした夜の火事の讚美者でも、自分から火の中へ飛込んで、焼死なうとしてゐる子供や老婆を助け出す事もあるのは、無論いふまでもない話だ。が、それはぜん／＼別問題である。

彌次馬連の後から人波に揉まれながら、わたしはいろんな事をぐゞ／＼聞いて居ないで、一ぱん大切な、一ぱん危険な場所へ辿りついた。さうして、ユリヤ夫人の依頼で捜してゐたレムブケ

1を、到頭そこで見つけたのである。彼の位置は常軌を逸した、驚くべきものであつた。彼は堀の毀れた上に立つてゐた。三十歩ばかり隔てた左の方には、殆ど燃えつくした木造の二階家が、黒い骸骨のやうに立つてゐて、上も下も、窓の代りに穴がぼかんと開いて、屋根はすっかり焼落ちてゐた。そして、ところ／＼炭になつた梁を傳つて、いまだに焰の蛇がちよろちよろ這つてゐる。庭の奥の方では、焼盡した家から二十歩ばかりの邊に、同じく二階造の離れが燃出して、それに消防隊は一生懸命だつた。右の方では消防隊と住民が、だいぶ大きな木造の建物を守つてゐた。まだ燃えはじめはしないけれど、もう幾度か火がついたのである。いづれ、全焼の運命をまぬかれまい。

レムブケーは離れの方へ顔を向けて、喚き立てたり、手眞似をしたりしながら、誰ひとり實行するもののない命令を發してゐた。わたしは始め、皆の者が彼をこゝへうつちやつて、傍を退却してしまつたのではないかと思つた。少くとも、ぎつしり彼を取巻いた、恐ろしく種類のまぢまちな群集が（その中には、平民どもと交つて紳士連も立つてゐた。教會の助祭さへゐた）、物珍しげに呆れ顔をして、彼の言葉を聞いてる癖に、誰ひとり聲をかけようとする者も、つれて歸らうとするものもなかつた。レムブケーは眞蒼な顔をして、目を光らせながら、思切り突飛な事を口走つてゐた。おまけに、彼は帽子なしである。もう疾うに失くしてしまつたのだ。

「何もかもみんな放火だ！これは虚無主義だ。もし何か燃えてるとすれば、それはつまり虚無主義なんだ！」かういふ言葉を聞いた時、わたしは覺えず慄然とした。勿論、何も今さら驚く

には當らない事なのだが、しかし餘りに赤裸々な現實は、いつでも何かかう、人の心を震撼させるやうなところを持つてゐる。

「閣下、」彼の傍へ一人の巡査が現れた。「お宅へお歸りになつて、おやすみ遊ばしたら、いかがでございます……こんな處に閣下が立つてゐらつしやいましては、まことに危険でございますから……」

後で聞いた所では、この巡査は絶えずレムブケーの傍へ附添つて、彼を保護し、なるべく家へ連れて歸るやうに努力した上で、何か危険が生じた場合には、腕力にすら訴へなければならぬといふ、明らかにこの巡査には及びさうもない訓令を、警察署長から授つてゐたださうである。

「家を焼かれた者の涙は、拭いても貰へるだらう。しかし、町はすっかり焼拂はれるに相違ない。これはみんなあの四人の悪黨——四人半の悪黨の仕業だ。あの悪黨を逮捕してしまへ！あいつはよその家庭へ忍込んで、その名譽を蹂躪するやつだ。そして家を焼くために、家庭教師をだしに使つたのだ。卑劣だ、實に卑劣だ？あつ、あの男は何をしてるんだ？」ふと燃えさかる離れの屋根に、一人の消防手を見つけて、彼はかう叫んだ。火はその消防手の踏んでゐる屋根を突き抜けて、あたり一面に焰を吐いてゐた。「あの男を引摺り下ろせ、引摺り下ろせ。落ちてしまふ、焼けてしまふ、あれを消してやれ……一體あれはあすこで何をしてるんだ？」

「消してをるのでございます、閣下。」

「いや、そんな筈はない。火事は心の中にあるのだ、家の屋根の上ぢやない。あの男を引摺り

下せ。そして、何もかもうつちやつてしまへ！ 打つちやつた方がいゝ、うつちやつてしまつた方がいゝ！ 勝手にどうなとなるがいゝのだ！ あつ、まだ誰やら泣いてゐる！ 婆さんだ！ 婆さんが喚いてゐるのだ、どうして婆さんを忘れて来たんだ？」

實際、燃えさかる離れの階下の方で、置忘られた老婆が、聲を限りに叫んでゐた。これは家主の商人の親戚にあたる八十の老婆だつた。尤も、彼女は置忘られたのではなくて、まだ火の附いてない隅つこの小部屋から、自分の羽布團を引出さうといふ無暗な考へを起して、焼けてる家中へ我と引返したのである。その時はまだ入れた。が、すぐにその小部屋へも火がついたので、老婆は煙にむせ火氣に焙られて、喚き叫びながら、それでも毀れた窓硝子の間から、よぼ／＼した手で一生懸命に、羽布團を押し出さうと躁いてゐるのであつた。レムブケーはその方へ救助に飛びかゝつた。彼が窓の傍へ駆寄つて、羽布團の隅に手を掛けると、力任せに窓から引張り出しにかゝつたのは、一同の目にも映つた。と、運悪くもこの瞬間に、毀れた板が一枚屋根から落ちて来て、不幸なレムブケーに當つたのである。板は落る拍子に、ちよつと端が頸へ觸つただけで、別に命を取るやうな事はなかつたが、レムブケーの公生涯は（少くもこの町では）終りを告げてしまつた。この打撃に足を取られて、彼はそのまま知覺を失つて倒れたのである。

遂に暗澹とした氣むづかしげな朝が来た。火事はだいぶ勢を減じた。夜來の風の後で不意に風が来て、やがて細かい雨が、篩からおろすやうに徐かに降り出した。その時わたしはレムブケーの倒れた處からだいぶ離れた、同じ川向うでも區の違つた場所に立つてゐたが、ふとその群集

の中で、奇怪な話を耳にした。一つの不思議な事實が発見されたのである。ほかでもない、この區の一番はづれに當つて、ほかの建物からは少くも五十歩ばかり離れた、がらんとした野菜畑の傍に、ついこのあひだ出来たばかりの木造の小家が立つてゐたが、この一軒家にひとしい家が、火事の始めころ、殆ど第一番に焼け出したのである。もしこの家が焼拂はれたとしても、あれだけの距離がある事だから、火はほかの家へ一軒でも移る筈はなかつたし、またその反對に川向う全體が灰燼に歸したにせよ、どんな風の強い日でも、この家ばかりは助かつたに相違ないのだ。従つて、この家は獨立して燃え出したので、自然の理として、無意味に焼けたのではない、とかういふ事になる。しかし、何より不思議なのは、家は焼けないで済んだけれど、夜が明けてからその家の中で、驚くべき事實が発見されたのである。

この新しい家の持主は、市外の村に住んでゐる町人だつたが、新築の家が火事と見るより、さつそく飛んで来て、横手の壁際に積んだ薪に火がついたのを、近所の者と力を合せて投げ散して、無事に消し止めたのであるが、この家には借家人が住んでゐた——それは町でも知らぬ人のない大尉と、その妹、それにかなり年増の女中だつた。この借家人が三人ながら、その夜の中に斬り殺された上、明かに掠奪されてゐたのである。（レムブケーが羽布團を助けようとしたとき、警察署長が傍にゐなかつたのは、つまりこゝへ来てゐたからである）。朝になると、この出来事はばつと四方に擴つて、ありとあらゆる種類の人間が恐ろしい群をなして、この原つ場の新しい家をさして、潮のやうに押しかけて来た。家を焼かれた川向うの人さへ交つてゐた。その邊は、通

り抜けが出来ないほどの人ばかりであつた。

わたしはすぐにいろんな人から話を聞いた。始めて見つけ出したとき、大尉は晝着のまま床几の上に倒れて、咽喉を切られてゐた。たぶん死人のやうに酔潰れてゐるところをやられたので、何一つ知らずに死んでしまつたに相違ない。血はまるで『牛が殺されたやうに』流れてゐたこの事である。妹のマリヤは體ぢう刀の『突傷だらけ』で、戸口に近い床の上に倒れてゐた、これはきつとかなり苦しんで、うつゝに兇賊と闘つたに相違ない。女中も目を醒したもので、綺麗に頭を割られてゐたといふことである。家主の話によると、大尉は前日の朝、へべれけで彼の處へやつて来て、だいたい澤山の金——かれこれ二百ルーブリ近くの金をひけらかして、大得意でゐたとの事である。古いぼろ／＼になつた大尉の緑色の紙入は、空っぽになつて床の上に轉がつてゐたが、マリヤの箱には手も付けてないし、聖像に箆めてゐる銀の袈裟も、やはり手つかずであつた。大尉の衣類もそつくり無事で残つてゐた。察するところ、賊は大分いそいだものらしい。それに、家内の事情をよく心得た人間と見えて、たゞ金ばかりに目をつけて来た様子だし、そのありかもよく承知してゐたに相違ない。もし家主が駈けつけなかつたら、薪が一面の火となつて、必ず家も焼いてしまつたに違ひない。『さうしたら、黒焦げの屍體ばかりでは、事實の推定も難かしかつたらう。』

こんな風にこの出来事は傳へられた。またおまけとして、かういふ話も聞かされた。つまり、この家を大尉兄妹のために借受けたのはスタヴローギン——スタヴローギン將軍夫人の愛子ニコ

ライ・フセブーロドギッチで、彼自身家主を訪れたうへ懇々と説いて、やつと承知させたとの事である。家主はこの家を酒屋にするつもりだつたので、なか／＼貸さうと言はなかつたが、スタヴローギンは金に糸目を著けないで、たうとう半年分先拂といふ事で、話を決めたのである。

「これはたゞの火事ぢやないぞ。」といふ聲が群集の中で聞えた。

けれど、大多數は黙つてゐた。人々の顔は暗く沈んでゐたが、大して目に立つほどの昂奮は見受けられなかつた。とはいへ邊りでは、スタヴローギンの噂が絶えなかつた。殺された女は彼の妻だといふ事や、彼が昨日この町で一番の金持ドロズドフ將軍夫人の家から、『不正な手段』で令嬢を誘き出したについて、同家では彼得堡へ訴状を出すと言つてゐる事や、彼の妻が殺害されたのは、どうもドロズドフ嬢と結婚したいがためらしい、といふやうな事を話續けるのであつた。スクヴレーシニキイはこゝから二露里半(約二十)ほどしかないので、わたしは今でも覺えてゐるが、あすこへ知らせてやつたものかどうか、といふ考へが頭に浮かんだ。尤も、ほかに群集を煽動するものがあるやうには見受なかつた。實はさつき食堂で騒いでゐた連中の仲間が、二三人目の前をうろ／＼してゐるのに、わたしはすぐ氣がついたけれど、そんな罪な臆測を下したくはない。しかし、一人の瘠せた脊の高い、町人らしい若者だけは、今でも思ひ出す事が出来る。まるで煤を塗つたやうに眞黒な顔をした、髪の渦を捲いた、瘠せひよろけた男で、後で聞いたところに依ると、錠前屋だとの事である。べつに酔つてはゐなかつたが、沈んだ様子をして立つてゐる群集と反對に、まるで前後を忘れたやうな風であつた。彼はしよつちう皆に何やら言つてゐたが、



その言葉はよく憶えてゐない。たゞ彼のいつた言葉の中で、多少まとまりのあるものは、

『おい皆の衆、これは一體どうしたつてんだ？ 一體これから先もかうなんだらうか？』といふくらゐの事で、それより長くはなかつた。かう言ひながら、彼は両手を振廻した。

### 第三章 破れたるローマンス

#### 一

スクワレーシニキイの大廣間からは（これはヴルヴァーラ夫人とスチェパン氏との、最後の會見の行はれた部屋である）火事はまるで手に取るやうに眺められた。明方の五時ごろ、右の端の窓にリーザが立つてゐて、薄れ行く空明りを眺めてゐた。彼女はこの部屋にたつた一人きりだつた。彼女の身に著けてゐるのは、きのふ朗讀會に著て出た晴著で、一面にレースの附いた薄い緑色の華やかなものながら、もうすつかり皺くたになつて、おまけに急いでぞんざいな著方だつた。ふと胸の鉤フックがよくかゝつてないのを見ると、彼女は顔を眞赤にして、忙しげに著物を直した。そして、きのふ入りしなに抛り出して置いた、赤い頭巾カピを肘椅子から取上げると、それを頸にひつ掛けた。房々とした髪は亂れ解けて、頭巾カピの下から右の肩へはらりと溢こぼれた。顔はさも疲れたらしく不安げだつたが、眼は顰めた眉の蔭から燃えるやうに光つてゐる。彼女は再び窓に近寄つて、熱い額を冷たい硝子に押し當てた。と、扉が開いて、ニコライが入つて來た。

「わたしはいま使を馬に乗せてやりました。」と彼は言つた。「十分も経つたら、何もかも分ります。今のところ召使どもの話では、河岸に近い、川向うの一部が焼けたんださうです、橋の右側がね。もう十一時すぎに火が出たんですが、今ではもう下火になつてゐます。」

彼は窓に近寄らないで、リーザから三歩ばかり後に止つた。彼女は振向かうともしなかつた。「暦では、もう一時間も前に明ける筈なのに、まだやはり夜みたいだわ。」と彼女はいま／＼しさうに言つた。

「暦なんてみんな出たら目ですよ。」彼は愛想笑ひをしながら、かう言ひかけたが、急に恥かしくなつて、かう附け足した。「暦で暮すのは退屈なもんですよ、リーザ。」

けれど、または新しく口にした卑屈な言葉を、自分ながらいま／＼しく思つたので、彼はもうすつかり口を噤んで了つた。リーザは歪んだやうな薄笑ひを浮かべた。

「あなたは、わたしと向合つても話に困るほど、沈んだ気分になつてらつしやるのねえ。だけど、安心して下さい。あなたは本當に巧い事を仰しやつたわ。わたしいつも暦で暮してるんですの。わたしの生活は一步一步、みんな暦で繰つてありますのよ。あなたびつくりなすつて？」

彼女は急にくると窓から身を轉じて、肘椅子の上に腰を下した。

「あなたもどうか坐つて下さいな。わたし達はもう長く一緒にゐられる譯でないから、何でも思ふ存分いひたいんですの……あなただつて、何でも思ふ存分の事を、言つてならないつて法はないわ。」

ニコライは傍に並んで座を占めると、殆ど恐る／＼、そつと彼女の手を取つた。

「それは何て言方なんです、リーザ？ 何だつて急にそんな事を言ひ出したんです？ 『わたしたちは長く一緒にゐられる譯でない』といふのは、一體そりやなんの事ですか？ あなたがけさ起

きてから、謎めた事を言ふのも、それでもう二つ目ですよ。」

「まあ、あなたは、わたしの謎めいた言葉の勘定を、お始めなすつたんですの？」と彼女は笑ひ出した。「覚えてゐらしつて？ 昨日こちらへ入つて来る時、わたし自分の事を、死人だつて言つたぢやありませんか。あれは忘れた方がいゝと、お考へになつたんでせう。忘れるか、それでなければ、氣がつかないやうな振をした方がね。」

「憶えてゐませんか、リーザ、何だつて死人だなんて？ 何でも生きなきやあ……」

「また言ひさして、やめておしまひになりましたのね。あなたのいつもの雄辯は、まるでどこへやら行つてしまつたぢやありませんか。わたしはもうこの世の生涯を終つてしまつたんだから、それでもう澤山ですわ。あなたフリストーフォルさんを憶えてらしつて？」

「いや、憶えませんか。」と彼は眉を顰めた。

「フリストーフォルさんですよ、そらロザンヌ（瑞西）で會つた？ あの人は恐ろしくあなたを悩ましたものですわね。いつでも戸を開けて、『ほんの一分間だけ』と言ひながら、必ず終日（いちじつ）はり込んだものですわ。わたしあのフリストーフォルさんの眞似をして、一日日坐り込まうとは思ひませんの。」

病的な表情が男の顔に映つた。

「そのひねこぢれた言方が、わたしは痛ましくつて堪らないです。そんな皮肉はあなた自身に取つても、ずあぶん高價なものにつくでせうにねえ。そんな事をしてどうなるのです？ 一體な

んのためです？」

彼の目は燃えるやうに輝き出した。

「リーザ、」と彼は叫んだ。「僕は誓つてもいゝ、昨日あんたがこゝへ入つて来た時よりも、今の方が餘計あんたを愛してゐるんだよ。」

「何て妙な告白でせう！ 何だつて昨日だの今日だのと、そんな比較がいるんでせう？」

「あんたは僕を棄てゝ行きやしないだらうね。」殆ど絶望したやうな調子で、彼は語を續けた。

「僕等と一緒にこゝを發つのだらう、今日すぐにも、ね、さうだらう？ さうだらう？」

「あつ、そんなに握つたら、手が痛いぢやありませんか！ 一體けふすぐどこへ向けて行くんですの？ どこかへまた『甦り』に行くんですか？ いゝえ、もう試験は澤山です……それに、そんなまどろつかしい事は、わたしには向きませんの。そんな事わたしには出来ません。それはわたしには少し高尙すぎます。もし行くなら莫斯科ですわ。あそこで人を訪問したり、自分も人から訪問されたりね——これがわたしの理想ですの、ご存じ？ わたしも瑞西時分から、自分がどんな女かつて事を、あなたに隠し立てしなかつたでせう。けれど、あなたは奥さんがありになるんだから、莫斯科へ行つて人を訪問する譯に行かない。だから、そんな事は話すものもありませんわ。」

「リーザ！ 昨夜はどんな事があつたんだらう？」

「あつた事があつたんですわ。」

「それはひどい！ それは残酷だ！」

「残酷ならどうしたんでせう？ 残酷なら、ぢつと怵へてるよか仕方がないわ。」

「あなたは昨日の妄想を、僕に復讐してゐるんですね……」毒々しげに微笑しながら、彼はかう呟いた。

リーザはかつと赧くなつた。

「何て卑劣な考へでせう！」

「ぢや、なぜあなたは……『あんなに大きな幸福』を、僕に授けてくれたんです？ それをお訊ねする権利があるでせうか？」

「厭ですな、何とかして権利ぬきで話をして下さいな。あなたの想像の卑劣さに、愚かさを加へるやうな事をしないで頂戴。今日はあなたに取つて悪日なのね。ときに、あなたは世間の口を恐れてらつしやるんぢやありませんか。その『大きな幸福』のために非難を受けやしないかと、心配してらつしやるんぢやありませんか？ もしさうだつたら、後生ですから心配しないで下さい。あなたは何も仕出かしやしないのです。誰に對しても責任はありません。昨日わたしがあなたの部屋の戸を開けた時でさへ、誰が入つて来るかご存じなかつたくらゐですもの。それはつまり、今あなたの仰しやつたわたしの妄想です、それつきりですよ。あなたは大膽に傲然と、みんなの顔を見返していゝのですよ！」

「その言葉、その笑ひ、もう一時間ばかりといふもの、僕は恐ろしさに冷水を浴せられるやう

な気がする。あんたがあれほど憎々しさうに言ふ『幸福』は……僕のために一切を償してるのだ。一たい僕はあるたを失つてもいゝのだらうか？ 僕ちかつて言ふが、僕は昨日あんたを愛し方が足りなかつた。なぜあんたは今日になつて、何もかも僕から奪つてしまはうとするのだ？ あれが、この新しい希望が、僕に取つてどれだけ高い價を要したか、あんたはとても分らないでせう？ 僕は生命の犠牲を拂つたのだ。」

「ご自分の、それとも人の？」

悪

彼は素早く身を起した。

「それは一體なんの事ですか？」とつと相手を見つめながら、彼はかう言ひ出した。

「あなたのお拂ひになつた犠牲は、ご自分の命ですか、それともわたしの命ですか、とかうお訊ねしたかつたのです。それとも、あなたは今すつかり、理解力を失くしておしまひになつたのですか？」リーザはかつとなつた。「なんだつてあなたは急に飛上つたんです？ なんだつてそんな顔をしてわたしを睨むんですの？ 本當にびつくりするぢやありませんか。何をさうびくびくしてらつしやるんです？ わたしもう前から氣がついてましたが、あなたは何か恐れてますね、今、えゝ本當に今……あら、まあ、何て蒼い顔でせう！」

「リーザ、もしあんたが何か知つてるのなら、それなら僕ちかつて言ふが、僕は何も知らないのだ……そして、いま命の犠牲を拂つたと言つたのは、決してあの事ぢやないのだ……」

「わたしあなたの仰しやる事がまるで分らないわ。」おづ／＼と吃るやうな調子で、彼女はか

う言つた。

やがて緩やかな、物思はしげな微笑が、彼の脣に浮かんだ。彼は靜かに腰を下して、肘を膝の上につきながら、両手で顔を蔽うた。

「悪い夢だ、譫ごことだ……僕等はめい／＼別な事を話合つてゐたのだ。」

「わたしあなたが何を話してらしたのか、まるで分りませんでしたわ……ねえ、今日わたしがこゝから行つてしまふつて事を、きのふ本當に知らなかつたんですの？ さあ、知つてたんですの、知らなかつたんですの、嘘をつかないで、眞直に返事をして頂戴。」

「知つてましたよ……」と彼は靜かに答へた。

「ぢや、何も言ふ事はないぢやありませんか。前から承知して、一つの『瞬間』を自分の心に残して置いたんですから、そのうへ何も算盤をはぢく事はない筈ぢやなくつて？」

「さあ、本當の所を正直に言つて下さい。」深い苦悶の聲で彼はかう叫んだ。「一體あんたはきのふ僕の部屋の戸を開ける時、ほんの一時だけだつて事を、自分でも承知してたんですか？」彼女は憎惡に充ちた目で男を見つめた。

「ごく眞面目な人でも、思切つて突飛な問を持出すものだといふのは、本當のことなのねえ。それに、何をそんなにびく／＼してらつしやるの？ それとも、女の方から先に捨てられて、自分から先に捨てなかつたといふ、その自尊心のためなんですか？ ねえ、ニコライさん、わたしお宅にゐる間に、いろんな事を考へましたが、その中でかういふ確信を得ましたの。ほかぢやあ

りませんが、あなたはわたしに恐ろしく寛大なんです。それがわたし厭で堪らないんですの。」  
彼は席を立つて、部屋の中を幾足か歩いた。

「よろしい。ぢや、かういふ風に終るべきものとして置かう……が、どうしてこんな事になつてしまつたらう？」

「まあ、ご心配なこつてすねえ！ それに第一、こんな事はみんなあなたご自身で、五本の指を敷へるやうに、知りぬいてらつしやるんですよ。世界中の誰よりも一番よく合點して、而もご自分でそれを望んでらしたんぢやありませんか。わたしはお嬢さんです。わたしの心は歌劇で養はれて來たんですからね、それがつまり事の起りなんですわ。それですつかり謎が解ける譯よ。」

「違ふ。」

「だつて、あなたの自尊心を傷つけるやうな事は、何も無いぢやありませんか。何もかも正真正正の事實ですわ。まづ最初美しい瞬間から始つたのです。それをわたし持ちこたへる事が出来なかつたんですの。をとゝひ、わたしが皆の目の前であなを『侮辱した』とき、あなたは立派な騎士のやうな態度でお答へなすつた、あの後でわたしは家へ歸つて來ると、すぐなるほどと合點が行きました。あなたがわたしを避けるやうに、避けるやうになすつたのは、あなたに奥さんがおありになるからで、決してわたしに對する輕蔑のためぢやない、とかう思つたんですの。何しろ社交界の令嬢となつて見ると、この輕蔑といふものが、何より一番おそろしいんですからね。」

わたしはその時、あなたの方がかへつて、わたしみたいな無分別な女を、逃廻りながら守つてく  
だすつたのだ、といふ事を合點しましたの。ね、随分あなたの寛大心を頂いてるでせう。そこへ  
ピョートルさんが横合から飛出して、何もかもすつかり説明してくれました。あの人はわたしに  
向つて、あなたは偉大な思想のために動搖を感じてゐらつしやる、その思想と言つたら、わ  
たしでもあの人でも、その前へ出ると、まるで一文の値うちもないほど立派なものだが、それで  
もやはり、わたしがあなたの行手の邪魔になるつて、かう打明けてくれたんですの。あの人は自  
分もその仲間に入れてるんですよ。あの人は是が非でも三人一緒になりたがつてね、思切り突飛  
なことを言ふんですの——何か露西亞の歌の中にある小舟だの、楓の權だのつてね。わたしはあ  
の人を賞めて、詩人だつて言つて上げたの。さうするとあの人は、それを眞に受けてしまつたん  
ですよ。わたしはもうずつと前から、自分はほんの刹那だけで満足する事を承知してたから、そ  
れで思切つて決心しちやつたんです。ね、これつきりですの、だから、もう澤山、どうかもうこ  
の上の説明は止めにしませうよ。また喧嘩を押つばじめないともかぎりませんからね。誰も怖が  
る事はありません、何もかもわたし一人で責任を負ひますわ。わたしはやくざな、氣まぐれ女で  
すからね、歌劇の小舟に誘惑されたんですの。わたしどうせお嬢さんですもの……でもねえ、そ  
れでもやはりわたしはね、あなたが恐ろしく愛して下さる、とこんな事を考へてみましたの。ど  
うかこの馬鹿な女を輕蔑しないで下さい。今落ちた一しづくの涙を冷笑しないで。わたしは『我  
とわが身のいとほしさに』泣くのが、無性に好きなんですから。まあ、澤山、澤山、わたしも何

の役にも立たない女だし、あなたも何の役にも立たない男、つまり両方とも詰らない同志が、二人ぶつ突かつたのだから、それをせめてもの慰めにしませうよ。少くも、自尊心の悩みだけはありませんかからね。」

「悪夢だ、譫うたごとだ！」スタヴローギンは両手を揉みしだいて、部屋の中を歩き廻りながら、かう叫んだ。「リーザ、あんたは不幸な人だ！一體あんたは自分で自分に、何といふ事をしたのだ？」

「蠟燭の火で焼けどをしたの、それだけのことよ。まあ、あなたまで泣いてらつしやるぢやありませんか？ もつと紳士らしくなさい、もつと無神経におんななさい……」

「なぜ、一體なぜあんたは僕の所へ来たんだ？」

「まあ、本當にあなたそんな質問を口になされば、社交界の目から見ても、どれくらゐ滑稽な位置に立つかつて事が、お分りにならないんですの？」

「なぜあんたは自分を破滅させるやうな事をしたんだ、しかもそんなに醜くばかしく……一體これからどうする積りなの？」

「あゝ、それがスタヴローギンでせうか？ あなたに焦れ切つてゐるこの町のある婦人が言つた、『吸血鬼のスタヴローギン』でせうか！ ねえ、わたしはもうさつきも言つた通り、一生をたつた一時間に換算してしまつたから、落ちついたもんですわ。だから、あなたもご自分の生涯を換算しておしまひなさい……尤もあなたには、何のためといふ當もありませんわねえ。あなたな

ぞはこれから先、まだいろ／＼の『時間』や、『瞬間』がたくさん出来るでせうからねえ。」

「あんたと同じだけしか出来やしない。それはほく立派に誓つて置く、あんたより一つだつて餘計な『時間』は出来やしない！」

彼は絶えず歩き續けてゐたので、とつぜん希望に照し出されたかのやうに見える、電光の如く早い、刺すやうな女の視線に気がつかなくなつた。けれどその光は同時に消えてしまつた。

「あゝ、今の僕の不可能な誠實の値あたひを、あんたが知つてくれたらなあ！ リーザ、あんたに打明て見せる事が出来たらなあ……」

「打明けて？ 何かわたしに打明ようと、思つてらつしやるの？ あなたの打明けは眞平ですわ！」と彼女は殆ど憎えたやうにかう遮つた。

彼は言葉を止めて、不安げに待設けてゐた。

「わたし白狀しなくちやならない。まだあの瑞西にゐた時分から、あなたの心の中には何か恐ろしい、汚らはしい、血なまぐさいものがある、しかも……その癖、恐ろしく滑稽に見せるやうな處が隠れてゐる——かういふ考へが、わたしの頭にこびり附いてしまつたんですの。だから、もし本當なら、わたしに打明けるのは、氣をおつけなさいな。わたし笑ひぐさにしてさふから。一生涯あなたを笑つて上げますわ……あら、また蒼い顔をなさるのね。もう言ひません、もう言ひません、わたしすぐ行きますわ。」と彼女は忌はしげな、さげしむやうな身振りで、急に椅子から飛上つた。

「僕を苦しめてくれ、僕を罰してくれ、僕にその胸の鬱憤を晴らしてくれ。」と彼は夢中になつて叫んだ。「あなたは十分にその権利をもつてゐるのだ！ 僕は自分があんたを愛してゐない事も、あんたを破滅させた事も承知してゐる。さうだ、僕は『刹那を保留した』のだ。僕には希望があつたのだ……もうずっと以前から……希望があつたのだ……あんたがきのふ自分から先に、たつた一人で僕の部屋へ入つて来たとき、僕は自分の胸を照し出した一道の光明を、どうしても斥ける事が出来なかつたのだ。不意にその希望を信じてしまつたのだ……いや、事によつたら、今でも信じてゐるかも知れない。」

「さういふ潔い告白に對しては、わたしも同じもので報ひなくちやなりませんわね。わたしあなたの看護婦になりたくありません。もし今日うまく死ぬ事が出来なかつたら、本當に看護婦になるかも知れません。けれど、よしなるにしても、あなたの處へは行きやしない。あなたなんぞは勿論、足なしや手んぼが相應してゐますわ。わたしはね、何かまるで人間ぐらゐの脊丈をした、大きな蜘蛛の住んでゐる恐ろしい處へ、あなたに連れて行かれて、そこで二人は一生涯その蜘蛛を見つめながら、始終びく／＼して暮して行く、そいつた氣持がいつもしてゐましたの。さうして、わたしたち二人の戀も終りを告げてしまふんですわ。まあダーシエンカ(リヤ)に相談してご覧なさいまし。あの女おんなならあなたのお伴をして、どこまででも行きませうよ。」

「あゝ、あなたはこんな時にも、あれの事を思ひ出さずにゐられないんですね？」  
「全く可哀さうな犬ころだ！ どうかあの女おんなによろしく言つて下さい。あなたが老後のお傅役おしん

として、もう瑞西時分から、あの女おんなを選んでらつしやるのを、あの女おんなは自分で承知してらつしやるんでせうか？ 本當にあなたは何て用意周到な方でせう！ 何て先見の明に富んだ方でせう！ あら、あれは誰でせう？」

廣間ひろまの奥の方ではんの心もち戸が開いて、誰かの頭が覗いたかと思ふと、すぐ慌ただしげに隠れてしまつた。

「お前はアレクセイかい？」とスタヴローギンが訊ねた。

「なに、僕がちよつと。」またピョートルが半分ばかり頭を覗けた。「お早う、リザエータさん、なににせ、結構な朝と申さなくちやなりませんね。きつとこの廣間ひろまに、お二人がをられる事と思つてましたよ。ニコライ君、僕は全くほんの一分間だけ、お邪魔に上つたんですがね——是非ともたつた一ことお話ししたい事があつて、飛んで来たんですよ！」

スタヴローギンは立つて行つたが、三足ほどで引返して、リザエータの傍へ寄つた。

「リザエータ、いま何か變つた事が耳に入つたら、それは僕の責任だと承知して下さい！」  
彼女はびくりとして、慥えたやうに男を見上げた。が、彼は急ぎ足に出てしまつた。

## 二

ピョートルの首を覗けた部屋は、大きな楕圓形の控室だつた。そこには前にアレクセイがゐたのを、彼が使に出してしまつたのである。ニコライは廣間ひろまに通ずる戸をうしろ手に閉めて、待設

けるやうに立止つた。ピートルは試験するやうに、ちらと相手を見やつた。

「で？」

「つまり、あなたがもう知つてゐられるなら、」まるで目で魂まで刺通さうとするやうに、ピートルは急ぎ込んでかう言ひ出した。「勿論、僕ら二人は少しも責任がないんです。殊にあなたはさうですよ。なぜつて、これはつまり……偶然の一致……偶然の暗合なんですからね……手つ取り早く言へば、法律的にはあなたに關係する筈がない。それを知らせに飛んで來たんですよ。」

悪

「焼けた？ 殺された？」

靈

「殺されたが、焼けはしなかつたです。こいつがちよいと具合が悪いけれど、しかしぼく立派に誓つて置きますよ——あなたがどんなに僕を疑つても、僕は決してこの事件に罪はないんですよ。だつて、實際あなたは僕を疑つてゐるらしいんですよ、さうでせう？ お望みなら、あのまゝの事實を言ひますがね、かうなんです。全くの所僕の頭にさうした考へが浮かんだのです（それは、あなたが自分で僕に暗示したんですよ。尤も、眞面目にぢやなくて、からかひ半分にはれたんです。だつて、あなたが眞面目で僕にそんな事を言ふ筈がありませんものね）。しかし、僕は決心がつかなかつた。どうしてどうして、百ルーブリ貰つたつて、決行する筈ぢやなかつたんですよ——それに、有利な點は少しもないんだから。いや、これはこつちの話ですよ、僕一人の話ですよ……（彼は恐ろしく急ぎ込んで、南京花火のやうに喋り立てた）ところが、そこへ素晴らしい偶然の暗合が出來たんですよ。僕は自分の金をね（いゝですか、自分の金です

よ。あなたの金は一ルーブリだつてなかつたんですからね。第一、それはあなた自身よくご承知なんです）、自分の金を二百三十ルーブリ、あの酔拂ひの馬鹿者のレビヤードキンに、一昨日の晩くれてやつたんです——いゝですか、一昨日ですよ、昨日の朗讀會の後ぢやありませんよ、この點にご注意を願ひます。これは極めて重大な偶然ですよ。だつてその時あなたは、リザゼータさんが來られるかどうか、確な所は知らなかつたんですからね。ところで、僕が自分の金を出した譯は、ほかぢやありません。一昨日あなたがどえらい事を仕出かしたからです、皆に祕密を暴露しようなんて、飛んでもない氣になつたからです。いや、まあ、あなた……私生活に立入るのはやめませう……何しろ、騎士の考へは別ですからね……が、正直、驚きましたね、まるで棒で眉間をがんとやられたやうな氣がした。けれど、僕はあゝした悲劇がいと興醒めだつたので——ちよつとお断りしますが、僕はスラヴ言葉なんか使つてゐますが、本當は大まじめなんですよ——あゝいふ事は、どうも僕の計畫を毀すやうになるから、どんな事があつてもレビヤードキン兄妹を、あなたに知らせないで彼得堡へ送らうと、固く決心した譯なんです。殊にあの男、自身でも頻りに行きたがつてるんですからね。たつた一つ失策をやつたのです。ほかでもない、あなたの名で金をやつたんですが、失策ですかどうです？ 事によつたら、失策でないかも知れませんか、え？ ところで、どうでせう、ね、どうでせう、それが今度あゝいふ風に展開したんですからね……」

彼は話に夢中になつて、びたりとスタヴローギンに密添ひながら、フロックの胸を掴まうとし



た（實際、わざとした事かも知れない）。スタヴローギンは力一杯にその手を撲りつけた。「おや、一體どうしたんですよ……いゝ加減におしなさい……そんなにしたら、手が折れてしまふぢやありませんか……つまり肝腎なのは、どうしてあゝいふ風に展開したかといふ點なで。」撲られたのには聊かも驚く色なく、彼は再び嘔り始めた。「實は、昨日あいつに金をくれやつたんです、妹と一緒に、あす夜の引明けに出立する、といふ條件つきでね。僕はこの仕事をリプーチンの悪黨に頼んだのです。で、あの男が自分で汽車に乗せて、出立させるといふ譯になつた。ところが、あのリプーチンの畜生、なんの必要もないのに、聴衆相手に悪く巫山戯ようなんて、了見を起しやがつたんです——多分お聞きになつたでせうね？ 朗讀會の席で。ね、どうでせう、本當に……二人とも酔拂つて、詩なんか作つたんですよ。しかも半分はリプーチンの作なんですからね。あん畜生、大尉に燕尾服なんか著込まして置きながら、僕に向いては『けさ出立させた』と白を切つて、その間に大尉をどこか裏の小部屋へ隠したもんです。出し抜けに壇へ飛び出させようといふ寸法でね。ところが、大尉先生、思ひがけなく頗る機敏に、一杯きこしめして了つたのだから、その後でご存じの醜體を演じて、結局半分死んだやうな有様で、家へ送り歸されるといふ始末。ところで、リプーチンはそつとあいつの衣囊から、二百ルーブリ抜き取つて、はした錢だけ残して置いたんですさあ。けれど、運の悪い事に、大尉がもう朝の中に、その二百ルーブリを衣囊から引張り出して、場所がらも辨へず、大自慢で見せびらかしたんですよ。ところが、フェーヂカはキリーロフの處で、ちよつくら小耳に挟んだ事があるので（ほらね、あ

なたがちよいと句はしたでせう）、そればかり待ち構へてゐたもんだから、この機乗ぜざるべからずと決心した譯です。まあ、これが事實の全部なんです。しかし、フェーヂカが金を見つけなかつたのを、少くも僕は大いに悦んでゐますよ。何しろあの畜生、千留ぐらゐは當てにしてたんですからね！ どうやら恐ろしく慌てしまつて、自分でも火事に面くらつたらしいですよ……本當になさるかどうか知りませんが、僕もあの火事には、薪で頭をどやしつけられたほど、びつくりしましたぜ。實に何といつていゝか、全く僭越な振舞ですよ……ねえ、僕はあなたにあれだけ大きな期待を抱いてるので、何一つあなたに隠さうとしないです。そこでですね、僕の頭の中では、その火事といふ考へが、ずつと前から熟してゐたんです。この火事といふやつは實に國民的な、通俗的なものですからね。しかし、こいつはいざといふ時まで藏つて置いたんですよ、僕ら一同が蹶起する貴重な瞬間まで……ところが、やつらはとつぜん僭越にも、なんの命令もないのに、今のやうな、手で口を押へて、息を潜めるべき時に當つて、あゝいふ事を仕出かすぢやありませんか！ いや、實に言語同斷な僭越ですよ！ しかし、僕はまだ何も知らないです。いま町でシェピグーリンの職工が二人、どうかしたつて言つてますがね……あの事件に仲間の連中が交つてるとすれば——仲間の連中が一人でも手を染めるとすれば、そいつは禍なる哉ですよ！ ねえ、ご覽なさい、僅か少しでも手を緩めると、かういふ有様ですよ！ いや全く、あんな五人組なんかを頭に（かしこ）してゐる民主主義の有象無象は、餘り頼み甲斐がありませんね。我々に取つて必要なのは、たつた一人の堂々とした、偶像のやうな魅力を持つた専制君主です。片々たる偶

像でなしに、衆俗を超越したものを足場にしている人です……その時こそは、五人組も服従の尻尾を捲いて、いざといふ場合に、欣然と相當の役目を果すやうになるでせうよ。が、とにかく、いま町ぢうで、スタヴローギンは自分の女房を焼殺するために、町を焼拂つたのだと、大袈裟に吹聴してゐるけれど、しかし……」

「もうそんなに大袈裟に吹聴してますかね？」

「いや、實はそんな事は少しもないのです。正直な所、僕はまだ何も聞いた譯ぢやない。けれど、世間のやつつて仕方のないもんでね、殊に火事に遭つた連中と來たら…… Vox populi vox Dei(民の聲は神の聲)ですからな。馬鹿げた噂を蒔くのに、手間は要りませんや……が、實際のところ、あなたは決して何も恐れる事はないですよ。法律的に見れば、ぜん／＼潔白なんですよ。良心の方から言つたつて、同じ事ですよ。だつて、あなたは厭だと言つてたんですからね。厭だつたんでせう？ 證據といつては少しもありません、ただ暗合があるだけです……例のフェーデカが、あの時キリーロフの處で洩された、あなたの不用意な言葉を思ひ出しやしないか、といふ懸念もあります（一體なぜあなたはあの時あんな事を言つたのです？）それともまるで何の證據にもなりやしない。それに、フェーデカは僕が片づけますよ。今日にも片づけて了ひますよ……」

「死骸は焼けなかつたんですか？」

「ちつとも。本當にあの畜生、まるで何一つ氣の利いた仕事が出来ないんだ。けれど、僕は何にしても、あなたがさうして落ちついてゐられるのが嬉しいですよ。だつて、あなたはこの事件

にまるで責任がない——そんな意志さへなかつたとは云ふものの、それでもやはりねえ……それにまあ、考へてご覧なさい、今度の成り行であなたの方が都合よく運んで行くぢやありませんか。あなたは突然やもめとして自由な體になつたので、素晴らしい財産を持つた美しいお嬢さんと、今すぐにも結婚が出来るんですからね。しかも、その人はもうあなたの掌中にある。ねえ、下らない事情の巧まざる暗合が、かういふ結果を作り出し得るんですからね、え？」

「君は僕を脅かさうといふんだね、何て間拔けな男だらう？」

「まあ、何を言ふんです、澤山ですよ。僕はいま實際まぬけなんです、しかし何といふ調子でせう！ こんどの事などは悦んでもい／＼くらゐだのに、あなたは……僕は少しも早く知らせようと思つて、わざ／＼飛んで來たんぢやありませんか……それに、僕なぞどうしてあなたを脅かせるものですか？ 脅しであなたを納得さしたつて、仕様がなぢやありませんか！ 僕はあなたの自由意志が必要なのです。恐ろしさにい／＼承知して貰ひたくはないですよ。あなたは光です、太陽です……僕こそ心の底から、一生懸命にあなたを恐れてるんです、決してあなたが僕を恐れてるんぢやありません！ だつて、僕はマヴリーキイぢやありませんからね……實際どうでせう、僕がいま輕車ドロシキに乗つてこゝへ駈けつけると、マヴリーキイが庭の後の隅つこで、鐵柵に凭れてるぢやありませんか……外套がぐし／＼になつてる所を見ると、きつと夜つびてそこでぢつとしてたに相違ない！ 實に奇蹟ですなあ！ 人間てどのくらゐ性根を失くするものか、全く方圖が知れませんか！」

「マヴリーキイ！ 本當？」

「本當ですとも、本當ですとも。庭の鐵柵の傍にしゃがんでるんです。こゝから——こゝから三百歩くらゐしかないと思ひますね。僕は太急ぎで傍を通り抜けたんだが、やはり見つかつちやつた。ぢや、あなたは知らなかつたんですか？ さういふ事なら、忘れずにお知らせして、いゝ鹽梅だつた。全くあゝいふ男が一ばん危険ですよ。殊に拳銃ピストルでも持つてるやうな場合にはね。それに、夜ではあり、雲は降る、そのうへ、當然癩はたかぶつてる——實際、あの男の境遇は慘澹たるものですからね、はは！ あなたどう思ひます、あの男は何のためにあんな處にゐるんです？」

「勿論、リザゼータさんを待つてるのさ。」

「へーえ！ しかし、あの女ひとが先生の所へなんぞ、出て行く筈がないぢやありませんか？ それに……こんな雨の降る中を……本當に馬鹿なやつですなあ！」

「あの女ひとはいま先生の處へ出て行かうとしてるんだよ。」

「へえ！ そりやあ珍聞ですね！ して見ると……けれど、まあお聞きなさい、今度あの女の狀況は、すつかり變つたぢやありませんか。今さらマヴリーキイに何の用があるんでせう？ ねえ、あなたはもう自由な獨り者だから、明日にも早速、あの女ひとと結婚できるぢやありませんか。あの女ひとはまだ知らないんでせう——萬事よくに委せて下さい、僕があなたの代りに、巧く繕つて上げますから。どこにゐるんです？ あの女ひとだつて早く悦ばして上げなくちや。」

「悦ばせる？」

「當り前ですよ。さあ行きませう。」

「一たい君は、あの女ひとが二人の死骸の事を、悟らないでゐると思ふんですか？」スタヴローギンは何かかう特別に眉を顰めた。

「無論さとりやしないですよ。」ピョートルは思切り白つぱくれた調子で引取つた。「だつて法律的には……おやつ、あなたどうしたんです！ それに、よし悟つたからつてなんでせう！

女ひとてものは、そんな事うまく胡麻化して了ひますよ。あなたはまだ女の心を知らないんですね！ それにあの女ひとは、あなたと結婚するのが一番とくなんです。だつて、あの女ひとは何と言つても、やはり自分の顔に泥を塗つてしまつたんですからね。そのうへ僕はあの女ひとに『小舟』式の話をして、うんとして聞かせたんですよ。全くあの女ひとには『小舟』式の話が一番きゝめがあるんだから、どれくらゐの娘さんかつて事も、大抵わかつてまさあね。ご心配は要りませんよ、あの女ひとは平氣で鼻歌を唱ひながら、二人の死骸を跨ぎますよ——それに、あなたはまるで、全く清淨潔白なんですよ、ねえ、さうぢやありませんか？ たゞあの女ひとは結婚後二年目ぐらゐから、あなたをちくりちくり苛めるために、あの死骸を大切に藏つとくくらゐのもんでさあ。どんな女ひとでも結婚する時には、夫の過去からかういふ風なものを捜し出して、それを藏つときにするのが普通ですからね。しかしその頃にはまた……實際、一年たつたらすつかり具合が違ひますよ、ははは！」

「君、輕車ドロンキイに乗つて來たのなら、今すぐあの女ひとをマヴリーキイの處まで、連れてつてくれませ

んか。あの女は僕が厭で堪らないから、もう僕の傍を離れてしまうつて、たつた今さう言つたんですよ。だから、無論うちの馬車なんかに乗つて行きやしない。」

「へーえ！ ぢや本當に歸つてしまふんですか？ どうしてそんな事になつたのでせう？」ピートルは馬鹿げた顔つきをした。

「僕があんな女を少しも愛してないつて事を、ゆうべ何とかして察したんだらうよ……尤も、その事は前から承知してたんだがね。」

「へえ、一體あなたはあの女を愛してないんですか？」ピートルは仰天したやうな顔色を作りながら、かう引取つた。「さういふ譯なら、どうして昨日あの女がやつて来たとき、そのまゝ自分のところへ置いたんです？ どうして潔白な紳士のするやうに、自分はお前を愛してゐないつて、まつすぐに告白しなかつたんです。それはあなたとして、恐ろしく卑劣なやり方ぢやありませんか。それにあなたのお蔭で、僕はあの女に對して、陋劣きはまる人間にされてしまひますよ。」スタヴローギンは突然からりと笑ひ出した。

「僕は自分の猿を笑つたんだ。」と彼はすぐにかう説明した。

「あゝ！ 僕がちよつと道化の眞似をしたのに、氣が付きましたね。」とピートルもすぐに高笑ひした。「僕はちよつとあなたを笑はさうと思つて！ 實はねえ、僕はあなたが出て来るや否や、顔つきでもつて、何か『不幸』があつたな、と察しましたよ。事に依つたら、ぜん／＼失敗だつたかも知れませぬ、え？ あゝさうだ、間違ひない。」殆ど満足の餘り、むせ返らない

ばかりに、彼はかう叫んだ。「あなた方は一晩ぢう廣間の椅子に、行儀よく並んで坐つたまゝ、何かしら高遠な品性論でもしながら、貴重な時間を消費してしまつたんでせう……いや、失禮、失禮、何も僕の知つた事ぢやない。僕はもう昨日から、きつとあなたはこの一件を、ばか／＼しくおじやんにしてしまふに相違ないと、ちやんと見當をつけてましたよ。僕があんな女を連れて来たのは、たゞあなたを娛しませようと思つての事です。僕が附いてたら、退屈しないつて事を、證明しようがためなのです。こんな風な事なら、何百遍もお役に立ちますよ。僕は全體として、人によくするのが好きなんです。もし僕の豫想どほり、あの女があなたに不要だとすると（僕も實はそのつもりでやつて来たんですがね）、さうすると……」

「それぢや、君はたゞ僕を娛ませたいばかりに、あの女を連れて来たんですか？」

「でなくつて、なんのためでせう？」

「僕に女房を殺させるためぢやないんですか？」

「へーえ、一體あなたが殺したんですか？ 何といふ悲劇ずきな人だらう！」

「同じ事だよ、君が殺したんだから。」

「へえ、僕が殺したんですつて？ 僕はこれつばかりも關係がないつて、さつきから言つてるぢやありませんか。しかしあなたのお蔭で、僕はそろ／＼心配になつて来た……」

「さつきの續きを言つて見たまへ。君は『もしあの女が不要だとすれば』と言つたね。」

「無論、それなら僕に任せておしまひなさい！ 巧くあの女をマヴリーキイにくつ附けますよ。」

尤も、あの男を柵の傍へ立たしたのは、決して僕ぢやありませんよ。そんな事まで考へて貰つちや困りますからね。僕は今あの男が怖いんです。ところで、あなたはいま軽車ボロシキに乗つて来たかと言ひましたね。僕は丁度そばを駆け抜けて来たんだが……本當にもしあの男が拳銃ピストルを持つてたら、どうでせう？……いゝ鹽梅に、僕も自分で一挺もつて来ましたかね。ほら（彼は衣囊かぶさからピストルを出して見せて、すぐにまた藏つた）少し遠方だからと思つて、持つて来たんですよ……尤も、こんな事はすぐに丸く納めて上げます。あの女はいま少しばかり、マヴリーキイが戀しくなつてゐるんです……少くも、戀しくなるべき筈ですからね……全くのところ、僕は少々あの女が可哀さうなんですよ！ 僕あの女をマヴリーキイと一緒にしてやります。さうすると、あの女はすぐにあなたの事を思ひ出して、あの男の目の前であなたを褒めちぎり、當人の事は面と向つて貶すやうになります——それが女心でね！ ほう、あなたはまた笑ひますね？ あなたがそんなに浮々して来たのが、ぼく嬉しくつて堪らない。ぢや、どうです、行かうぢやありませんか。僕はまづマヴリーキイから始めませう。ところであの……殺された連中の事は……ねえ、いま黙つてた方がよありませんか？ 遅かれ早かれ知れるんだから。」

「何が知れるんですつて？ 誰が殺されたんですの？ あなたは今マヴリーキイさんの事を、

何と仰しやつたんですの？」突然リーザが戸を開けた。

「あゝ！ あなたは立聽たききしたんですか？」

「あなたマヴリーキイさんの事を何と仰しやつたの？ あの人が殺されたんですか？」

「あゝ！ それぢやよく聞えなかつたんだ！ ご安心なさい、マヴリーキイさんは生きて、びんぴんしてゐます。それはあなたご自身で、今すぐ確かられますよ。あの人はいま庭の鐵柵に近い、路ばたに立つてをられますからね……どうやら、夜つびてそこで明かされたいんです。外套を著て、體たいぢうくつしよりになつてね……僕がこゝへ来る時、あの人は僕を見たんですよ。」

「そりや嘘です。あなたは『殺された』と仰しやいました……誰が殺されたんです？」胸を搔か撈るやうな疑ひの調子で、彼女は執拗しつねくかう訊ねた。

「殺されたのはたゞわたしの家内と、その兄のレビヤードキンと、二人の使つてた女中つきりです。」スタヴローギンはきつぱりとかう言ひきつた。

リーザはびくりとなつて、みる／＼顔を蒼くした。

「奇怪な、殘忍な事件です、リザゼータさん、ばかげきつた強盜殺人の事件です。」ピョートルはすぐさま豆の爆はぜるやうに、かう口を入れた。「火事のどさくさ紛れにやつた強盜、それだけの事です。それは懲役人のフェーデカの仕事です。つまり、みんなに金を見せびらかした、レビヤードキンの馬鹿が悪いのです……僕はそのために飛んで来たんです……まるで、石で額かぶをがんとやられたやうな氣がしましたよ。スタヴローギンさんは、僕がこの事件を知らせると、危く卒倒そたうしないばかりでした。僕らはあなたにお知らせしたものでかどうかと、こゝでいま相談した所なんですよ。」

「ニコライさん、この方の言つた事は本當ですか？」リーザはやつとの事でこれだけ言つた。

「いや、嘘です。」

「どうして嘘です？」ピョートルはびっくりとした。「それはまた何の事です？」

「あゝ、わたしは気が狂ひさうだ！」とリーザは叫んだ。  
「まあ、あなたは少しは察しなくちやいけませんよ、この人はいま気が狂つてゐるんですよ！」とピョートルは一生懸命に叫んだ。「何と言つても、妻となつた人が殺されたんですからね！ ご覧なさい、何て蒼い顔をしてゐるんでせう……實際、この人は一晩中あなたと一緒にゐて、少しも傍を離れなかつたぢやありませんか。どうしてこの人を疑ふことが出来ます？」

「ニコライさん、どうか神様の前へ出たつもりで、あなたに罪があるのかないのか、本當の事を言つて下さい。そしたら、わたしはあなたの仰しやつたことを、神様の言葉として信じます。ええ、誓つてもいいわ、わたしは世界の果でも、あなたについて行きますわ、えゝ、行きますとも！ 犬つころのやうに随って行きます……。」

「何だつてあなたはさうこの女を苦しめるんです、本當に何て突飛な事を考へる人だらう！」ピョートルは憤然としてかう叫んだ。「リザゼータさん、ぼく誓つて言ひますよ、もし嘘だつたら、僕を臼の中へ入れて舂いてもいいです。ニコライさんは潔白です。かへつて自分が殺されたやうになつて、ご覽の通り謔ごとばかり云つてゐるんです。決して何一つ——心の中でさへ、罪を犯してはゐません……！……何もかも強盗どもの仕業です。きつと一週間も経つたら、捜し出されて、鞭でぶん擲られるに相違ありません……あれは懲役人のフェーヂカと、シュピグーリンの職工ど

ものした事です。この事は、町中大騒ぎして噂をしてゐます。だから、僕も言つてゐるんです！」  
「さうですか？ さうですか？」全身わな／＼と慄はせながら、リーザは最後の宣告を待つてゐた。

「僕は自分で手を下しもしなかつたし、そんな企てに反対もしてたんですが、しかしあの人達が殺されると知つてゐながら、下手人を止めようとしなかつたのです。さあリーザ、僕から離れて下さい。」と言つて、スタヴローギンは廣間へ歩み去つた。

リーザは兩手で顔を蔽ふと、そのまま家を出て了つた。ピョートルは後を追はうとしたが、すぐまた廣間へ引返した。

「あなたはさういふ氣なんですか？ 本當にさういふ氣なんですか？ ぢや、あなたは何物も恐れないんですね？」殆どいふべき言葉も知らないで、口の邊りへ泡を吹かせつゝ、忿怒の餘り、スタヴローギンに跳りかゝらないばかりの勢で、彼は聯絡もない言葉を口走るのであつた。

スタヴローギンは廣間の眞中に立つたまゝ、一ことも返事をしなかつた。彼は左手で一房の髪を握りながら、自失したやうな微笑を浮かべてゐた。ピョートルはぐいとその袖を引張つた。

「一體あなたは駄目になつてしまつたんですか？ あんな事を始める氣になつたんですか？ 大方あなたはみんなを密告して、自分は修道院か何かへ行つて了ふんでせう……しかし、僕はどつちにしたつて、あなたを殺してしまひますよ、いかにあなたが僕を恐れないたつて駄目だ！」

「あゝ、君だね、騒々しく喋つてゐるのは？」やつと、スタヴローギンは相手の顔を見分けた。

「あ、早く駆け出してくれ給へ。」とつぜん彼は我に返つた。「あの女おんなの後を追つかけてくれ給へ、馬車を云ひつけて。あの女おんなをうつちやつといちやいけな……早く、早く追つかけて！ 誰にも見つからないやうに、家まで送つてやつてくれ給へ。あの女おんながあすこへ……死骸を……死骸を見に行かないやうに……力づくで馬車へ乗せてくれ給へ……アレクセイ！ アレクセイ！」

「まあ、お待ちなさい、怒鳴らないで！ あの女おんなは今もうマヴリーキイに抱かれていますよ……大丈夫、マヴリーキイがあなたの馬車に乗せやしないから……お待ちなさいつて言ふのに！ 今は馬車より大切な事があるんですよ！」

彼は再び拳銃を取り出した。スタヴローギンは真面目な表情でそれを見やつた。

「仕方がない、殺したまへ。」静かな、殆ど諦めたやうな調子で、彼はかう言つた。

「ふう、ばか／＼しい、人間はどこまで虚偽の假面を被つてゐられるんだらう！」ピョートルは本當にぶる／＼と體を慄はした。「全く殺してしまひたいほどだ！ 實際あの女おんなも、君に唾を吐きかけずにゐられなかつたらう！……君は本當に何といふ『小舟』だ！ もう毀すより仕方のない、古い穴だらけの薪舟だ！……ちよつ、せめて面當てにでも、全く面當てにでも、目を醒したらよささうなもんだがなあ！ えゝつ！ 自分から額へ弾丸をぶち込んでくれと頼むくらゐなら、今はもうどつちにしたつて同じでありさうなもんだ！」

スタヴローギンは奇妙な薄笑ひを洩した。

「もし君がそんな道化でなかつたら、僕も今は諾イエスと言つたかも知れないんだ……ほんの少しばかりでも惘巧わうこうだつたら……」

「僕は道化です。しかしあなたが、僕の主な半身たるあなたが、道化になつてしまふのは厭です！ 僕の言ふ事が分りますか？」

スタヴローギンはその言葉の意味を悟つた。それは恐らく彼一人だけだらう。かつてスタヴローギンがシャートルフに向つて、ピョートルには感エンシージャクム激があると言つたとき、相手はすっかり呆氣に取られたものである。

「さあ、もう僕の傍を離れて、どこなと勝手に行き給へ。明日までには、ぼく何か自分の中から搾り出すかも知れないさ。あす來たまへ。」

「本當に？ 本當に？」

「そんな事が分るものか！……さあ早くとつと行き給へ！」

かう言つて、彼は廣間を出てしまつた。

『ふん、或ひはいゝ方に向くかも知れないぞ。』とピョートルは拳銃を隠しながら、口の中でかう呟いた。

## 三

彼はリザゼータの跡を追つて駆け出した。彼女はまだ餘り遠くまで行かないで、家から僅か十歩ばかりの處にゐた。跡をつけて行つた老僕のアレクセイが、今は恭しげに燕尾服の小腰を屈め

帽子も被らないで、一步あとからついて歩きながら、頻りに彼女を引止めようとしてゐた。馬車の出来るまで少し待つてくれと、根氣よく頼むのであつた。老人はすつかり慍むかえてしまつて、殆ど泣出さなばかりだつた。

「お前早く行かないか。旦那さまがお茶をくれと言つてらつしやるのに、誰も上げる人がないんだよ。」とピョートルは老人を撥ねのけ、いきなりリザゼータの手を取つて、小脇こわきに掻かい込んだ。

こちらはその手を振り解ほどかうとしなかつた。けれど、まだすつかり正氣に返つてゐないらしかつた。

「第一、あなたの歩いてらつしやるのは道が違ひますよ。」とピョートルが猫撫聲で言ひ出した。「こちらへ行かなくちやならないですよ。そんな庭について行くんぢやありません。それに、どうしたつて歩いて行かれやしませんよ。お宅まで三露里エラスグレイ(約三丁)からある上に、あなたは雨着も持つてらつしやらないぢやありませんか。ほんのちよつと、待つて下さるといふんです。なあ。實はぼく輕車ドロシキに乗つて來たので、馬はその裏庭に立つてゐるんですよ。今すぐこゝへ廻して、あなたをお乗せしませう、お宅までお送りしませう。さうしたら、誰も見る人はありません。」

「あなた本當にご親切ねえ……」とリーザはやさしく言つた。

「飛んでもない、かういふ場合には、誰だつて少し人情のある者は、僕みたいな立場に置かれ

たら……」

リーザはぢつと彼の顔を見て、思はずびつくりした。

「あらまあ、わたしやつぱりあのお爺さんだと思つてたわ。」

「ねえ、僕はあなたがさういふ態度で、この事件に接して下さるのが實に嬉しい。なぜつてかういふ事は、實際はかげ切つた偏見ですからね。まあ、かういふ事になつてしまつた以上、すぐあのお爺さんに云ひつけて、馬車の用意をされた方がよかないでせうか。ほんの十分ばかりです。その間ちよつと引返して、玄關の軒下で待つてようぢやありませんか、え？」

「わたしはまづ何よりも……あの死骸が見たいんですよ、どこにあるんでせう？」

「おや、まあ何て馬鹿げた考へでせう！ それを僕は心配してゐたんだ……いけません、あんなやくざなものは打つちやつときませうよ。それに、何もあなたなぞが見るものはありませんやね。」

「わたしどこにあるか知つてます、あの家も知つてます。」

「知つてらつしやればどうしたのです！ 冗談ぢやない、この雨に霧ぢやありませんか(ちよつ、何て神聖な義務を背負込んだもんだ……)まあ、お聞きなさい、リザゼータさん、二つに一つですよ。もし僕と一緒に輕車ドロシキに乗つてらつしやるなら、暫くこゝで待つて下さい。一あしも前へ出ちやいけませんよ。いま二十歩も前へ出ると、是非マヴリーキイ氏に見つかるんですから。」



「マヴリーキイさん！ どこに？ どこに？」  
 「ふん。もしあの人と一緒にいきたいんでしたら、もう少しあなたをお送りして、あの人のある所を教へて上げませう。僕はもう従順な下部しもべですからね。たゞ僕は今あの人を傍へ寄りたくないです。」

「あの人をわたしを待つてるんだ、あゝどうしよう！」とつぜん彼女は足を停めた。紅くれないがさつとその顔に漲つた。

「しかし、まあ考へてもご覧なさい、あれが下らない偏見のない人ならとにかく……ねえ、リザエータさん、こんな事はまるで、僕の知つたことぢやないですからね。僕はぜんく路傍の人です。それはあなた自身でも、よくご承知の筈でせう。が、それでもやはり、僕はあなたのためよかれと祈つてゐます……よし我々の『小舟』が失敗に終つたとしても、よしそれがぶつ毀すより仕方のない、古い、腐つた團平船に過ぎなかつたとしても……」

「まあ、痛快なこと！」とリーザは叫んだ。

「痛快だなんて言ひながら、ご自分は涙を流してらつしやるぢやありませんか。氣をしつかり持たなきや駄目ですよ。どんな事でも、男に負けんやうにしなきやいけません。現代の世界では婦人と雖も……ちよつ、ばかしくしい（ピョートルは本當に唾を吐き兼ねない様子だつた）。第一、くやしがる事は少しもありませんよ。かへつてあゝなつたのが、もつめの幸だつたかも知れないです。マヴリーキイ氏はあゝいふ……つまり、その、感情的な人ですからね。尤も、口數は

少いが……しかし、あの人に下らない偏見がなかつたら、といふ條件つきで、それもかへつていい事ではありますかね……」

「痛快なこと、痛快なこと！」とリーザはひすてり、つくに高笑ひした。

「あゝ、どうも仕様がないなあ……リザエータさん、不意にピョートルは改まつてかう言ひ出した。「僕は今あなたのために……いや、何も僕の知つた事ぢやない……僕は、昨日あなたが自分で望まれた時、あなたのために盡しましたが、今日は……ほら、こゝからマヴリーキイ氏が見えますよ。ね、あそこに坐つてるでせう。僕らに氣がつかないで。ときに、リザエータさん、あなた『ポーリンカ・サックス』（ドルジニン作、一八四七年）を讀みましたか？」

「何ですつて？」

「『ポーリンカ・サックス』といふ小説があるんですよ。僕はまだ學生時分に讀みましたがね、サックスといふ財産家の官吏が、不義した細君を別荘で捕まへたんですよ……ちよつ、ばかしくしい、こんな事なんか仕様ががあるもんか！ まあ、見てらつしやい、マヴリーキイ氏はまだ家まで行きつかない中に、あなたに結婚を申込みますよ。あの方はまだ僕らに氣がつかないんだ。」

「あゝ、氣がつかない方がいゝんですよ！」不意にリーザが、まるで氣ちがひのやうにかう叫んだ。「行きませう、行きませう！ 森の中へ、野原の方へ！」

かう言ひて捨て、彼女はもと来た方へ駆け出した。

「リザエータさん、それは餘り氣が狭すぎますよ！」ピョートルはその後を追つて行つた。「ど

うしてあなたは、あの人に見られるのが厭なんですか？ それどころか、大威張でまともに見ておやんなさい……もしあなたが何かその……處女の純……なんて事を氣にしてゐらつしやるのなら……それは全く古くさい偏見ですよ……一體どこへ行くんです、どこへ？ どうもあの走りやうはどうだ！ ねえ、いつそスタヴローギンの處へ引返さうぢやありませんか、僕の輕車ドロシキイに乗りませうよ……一體どこへ行くんです？ そつちは野つ原ですよ、あつ、轉んぢまつた！……」

彼は立止つた。リーザは自分で自分の行手も知らず、鳥のやうに飛んで行くので、ピョートルはもう五十歩ばかり遅れてしまつた。と、彼女は苔の生えた短い切株に躓いて、ぱたりと倒れた。その瞬間うしろの方から、恐ろしい叫聲が聞えた。それは彼女の走つて行く姿と、續いて地びたに倒れた様子を見て、野原を横切つて駈け寄るマヴリーキイの叫び聲だつた。ピョートルは忽ち踵を轉じて、スタヴローギン家の門内へ引返し、大急ぎで自分の輕車ドロシキイに乗つてしまつた。

マヴリーキイは恐ろしい驚愕に襲はれながら、リーザの傍に立つた。こちらはもう身を起してゐた。そして、上から屈み込むやうにして、女の手を兩の掌に包むのであつた。この邂逅の奇怪きはまる情景は、彼の頭腦を震蕩させてしまつた。涙は彼の顔を傳つて流れた。今まで自分の崇拜してゐた女が、こんな時刻に、こんな天氣に、外套もなく、昨日の華やかな衣裳を著けたまゝ（それも今は揉みくたになつて、しかも倒れたために泥まみれだつた）、原中を走つてゐる姿を、眼の前に見せられたのである……彼は一ことも口を利けないで、無言のまま自分の外套を脱ぎ、震へる手で女の肩に著せ始めた。不意に彼は思はずあつと叫んだ。彼女の唇が自分の手に觸つた

のに氣がついたのである。

「リーザ、」と彼は叫んだ。「わたしは何一つ能のない男ですが、どうかあなたの傍を追つ拂はないで下さい！」

「えゝ、えゝ。さあ、早くこゝを出てしまひませう。どうかわたしを打つちやらないでね！」

彼女は自分から男の手を取つて、先に立つてぐんぐんしよ引くのであつた。「マヴリーキイさん、」彼女は不意に聲を潛めた。「わたしあすこでは始終から元氣を出してたけれど、こゝへ來たら、死ぬのがこはくなつた。わたし死ぬの、もうすぐに死んぢまふの、だけど恐ろしい、死ぬのが恐ろしい……」固く男の手を握りしめながら、彼女はかう呟いた。

「あゝ、誰でもいゝから來てくれるといゝのになあ！」彼は絶望したやうに、邊りを見廻した。「せめて誰か通り合せの人でもあればなあ！ あなた足を濡らしてしまひますよ、あなたは……氣がちがつてしまひますよ！」

「大丈夫、大丈夫よ。」と彼女は相手を勵ました。「これでいゝの。あなたが傍についてゝ下さると、わたしそれほどこはくないわ。ぢつと手を握つて、わたしを連れてつて下さいな……そして、今わたし達はどこへ行くんでせう、家へ？ いゝえ、わたし殺された人達を先に見たいの。あの人の奥さんが殺されたんですとさ。そして、あの人の言ふのには、あの人が自分で殺したんですつて。そんな事は嘘だ。嘘だわねえ？ わたし殺された人達を自分で見たいの……わたしのためなんですもの……あの人はね、あの人達が殺されたために、一晚でわたしが嫌ひになつたん

ですつて……わたし自分で見に行つて、何もかも見抜いてしまふわ。さ、早く、早く、わたしあ  
の家を知つてゐるんだから……あの火事であつた所よ……マヴリーキイさん、ねえ、わたしを救し  
ちやいけませんよ、わたしは汚れた女なんですから！ え、わたしみたいなのが赦される筈  
はないわ！ 何だつてお泣きになるんですの？ さあ、わたしの頬つべたを打つて下さい、この  
原中で、野良犬みたいに殺して頂戴！」

「今、あなたを審くものは、たれもありません。」マヴリーキイはきつぱりとかう言ひ切つた。  
「神様は赦して下さるでせう。わたしなどは誰よりも一番、あなたを審く資格のない者です！」  
しかし、二人の會話を書續けたら、ずるぶん奇妙なものが出来たらう。その間に二人は手に手  
を取つて、まるで氣ちがひのやうに急き込みながら、足早に歩いた。彼らは眞つすぐに火事場を  
さして進んだ。マヴリーキイは、何か百姓馬車にでも出會ひさうなものだと、しじう一縷の希望  
をいただき續けたが、誰ひとり出會ふ人もなかつた。小粒な細い雨足はあたりを一面に包んで、あ  
らゆる光りと陰を呑みつくし、何もかもたゞ一色の煙のやうな、鉛色の、一さい無差別な塊に化  
してしまつた。もうだいたい前から晝の時刻になつてゐるのに、まだ夜が明けないやうに思はれた。  
突然この煙のやうな冷い霧の中から、奇妙な間のぬけた人影が浮かび出て、こちらへ進んで来る。  
今その當時を想像して見ると、もしわたしがリザエータの位置に立つたら、とても自分の眼を信  
じられなかつたらう。やがて彼女は歡喜の聲を上げた。すぐに近づいて来る人が誰か分つたので  
ある。それはスチエバン氏であつた。どんなにして彼が家を去つたのか？ どんな風にして家出

といふ氣ちがひじみた、机上の空想が實現されたのか？——それは後で話すことにしよう。こゝ  
ではただこれだけ言つて置かう。この朝、彼はもう熱病に罹つてゐたが、病も彼を引止める事は  
出来なかつた。彼はしつかりした足どりで、濡れた土の上を歩いた。察するところ、彼はこの計  
畫を、無經驗な書齋生活の許す限り、相談相手もなしにたゞ一人、出来るだけ一生懸命に考へ抜  
いたらしい。

彼は『旅裝』を調べてゐた。旅裝と云つても袖つき外套に、金具のついた漆塗りの巾の廣い皮  
帶を締め、それに新しい長靴を穿いて、洋袴をその中へたくし込んでゐた。たぶん彼はもうずつ  
と前から、旅行者といふのはこんなものと、想像してゐたのだらう。歩き憎いてら／＼光る輕騎  
兵式の深い長靴や帶は、四五日前から用意してゐたに相違ない。鏝の廣い帽子と、しつかり頸筋  
を包んだ毛糸の襟巻と、右手に持つた杖と、左手に提げた思切り小さな、そのくせ、思切りぎつ  
しり詰まつた鞆とが、彼の旅裝を完全なものにしてゐた。そのうへ、同じく右の手には、傘を擴  
げてさしてゐるが、この三つの物——傘と杖と鞆とは、始めの一露里は持憎くて窮屈だつたし、  
二露里めからは重くなつて來た。

「まあ、本當にあなたなんですか？」と彼女は相手を見廻しながらかう叫んだ。始めの無意  
識な悦びの突發は、すぐに愁はしげな驚きに代つた。

「リーズ！」これも殆ど夢中で飛びかゝりながら、スチエバン氏は叫んだ。「あなた、あなた、  
あなたもやはり……こんな霧の中を？ まあ、ご覧なさい、あの空あかりを！ あなたは不仕合せ

なんでせう、さうでせう？ いや、分ります、分ります、お話には及びませんが、わたしの事も聞かずに置いて下さい。Nous sommes tous malheureux, mais il faut les pardonner tous. Pardonnons, Lise. (わたし達はみんな不仕合せだ、けれどあの連中をみんな赦して、永久に自由になりませうよ。この世間の煩ひを振棄て、完全に自由の身となるためには、赦さなければなりません、赦すことです、赦すことです！)

「まあ、あなたはなぜ膝なんかお突きになるんですの？」

「それはこの世間と別れるに當つて、あなたを代表とするわたしの過去ぜんたいに、別れを告げるためなんです！」彼は急に泣き出しながら、リーザの両手を取つて、自分の泣腫らした目に押し當てた。「わたしは自分の生涯中で、美しかつたすべてのものの前に跪くのです、接吻するのです、感謝するのです！ いまわたしは自分を二つに裂いて了ひました。あちらの方には二十年間、空へ飛びあがる事ばかり空想し續けた、一個の狂人が残つてゐるし、こゝには打ちのめされて寒さに凍えはてた、商人の家の老耄れた家庭教師がさ迷つてゐます、もしどこかにそんな商人があるとするれば……しかし、あなたは何といふ濡方でせう、リーズ！」自分の膝も濕つた土で、ぐしよ／＼になつたのに氣がついて、急に身を起しながら、かう叫んだ。「まあどうしたと言ふんです、そんな著物をきて……しかも歩いて、こんな原中を……あなた泣いてるんですか？ あなたは不仕合せなんですわね？ あゝ、わたしもちよつと聞いた事がある……しかし、一體あなたは今どこからいらしたんです？」深い疑惑の念にマヴリーキイを見つめながら、臆病げな様

子で、彼は疊みかけてかう訊ねた。「mais savez-vous l'heure qu'il est ? (が、何時でせう、)」

「ステチパンさん、あなたはあの人殺しの事を、何かお聞きになつて？……あれは一たい本當なんでせうか？ 本當なんでせうか？」

「あの人達！ わたしは、あの人達の仕業が空に映るのを、一晩ぢう眺めてゐました。あの連中は、あゝよりほかに仕方がなかつたのです……(彼の目は再び輝き出した)。わたしは熱病やみの悪夢から遁れ出るのです、露西亞を捜しに行くのです、existe-t-elle la Russie ? (あゝ、果して露西亞は存在してゐるのだ) おや、大尉、あなたですか！ わたしはいつも固く信じてゐましたよ……だが、わたしの傘な善行をなさる所へ、いつかは必ず行會ふに相違ないと思つてゐましたよ……だが、わたしの傘を持つていらつしやい、それに——是非とも歩かなきゃならんといふ譯はないのです。ねえ、後生だからこの傘を持つてらしやい。わたしはどうせどこかで馬車を雇ひますよ。實は、わたしが歩いて出たのはね、もし Stasie (つまりナスターシャが)、わたしの出て行く事を知つたら、往來一杯に喚き散らすに相違ない、とかう思つたからです。それで、わたしは出来るだけ内緒に、こつそり家をぬけ出したんですよ。この頃どこへ行つても、強盜が横行してるとかつて、『聲』などで書き立てゝるのは承知してますが、しかしわたしの考へでは、街道へ出るとさつそく強盜が現れるなんて事は、まさかありやしないでせうよ？ Ohere, Lise, 今あなたは、誰かが殺されたとか言つたやうですわね？ おゝ神よ、あなた顔色が悪いですわね！」

「行きませう、行きませう！」またもや先に立つて、マヴリーキイを引立てながら、リーザは

ひすてりいのやうに叫んだ。「待つて頂戴、スチエパンさん。」出し抜けに彼女は後へ引返した。「待つて頂戴、あなたは本當にお氣の毒な人ね、さあ、わたしが十字を切つて上げませう。本當はあなたをお留めした方が、いゝのかも知れませんが、まあやはり十字を切つて上げますわ。だから、あなたも『不仕合せな』リーザのために、お祈りをして頂戴な——だけど、ほんのちよつとでいゝんですの。餘り一生懸命にならなくてもよござんすわ。マヴリーキイさん、この赤ちやんに傘を返してお上げなさい、ぜひ返して上げなくちやいけないわ。ええさうよ——さあ、行きませう！ さあ、行きませうつてば！」

彼らがかの運命的な家へ辿り着いた時には、その前へ群つた黒山のやうな群集が、スタヴローギンの事や、彼に取つて妻を殺すのがどれくらゐ有利だつたか、などといふことを、もうさんざん聞かされた後だつた。しかし繰返して言ふが、大多數の人間は依然として無言のまま、何の動揺も示さずに聞いてゐた。前後を忘れて騒いでゐるのは、たゞ口やかましい酔拂ひ連中と、例の手を振廻してゐる職人のやうな、すぐに激し易い手合ぐらゐなものだつた。この職人は不斷おとなしい男で知られてゐたが、もしなにかに刺戟を受けると、まるで綱でも切れたやうに、盲めつぱう飛んで行く性質であつた。わたしは、リーザとマヴリーキイがやつて來たのに、氣がつかなくあつた。初めて、餘り遠からぬ群集の中に、リーザの姿を見つけた時、わたしは驚きの餘り棒のやうになつて了つた。マヴリーキイには初め氣がつかなくあつた。たぶん雑沓が酷いので、どうかした拍子に一二歩おくれたのか、それとも、群集に隔てられるかしたのだらう。リーザは自分の

周りへは目もふらず、また何一つ氣もつかないで、群衆を押し分け押し分け進んだ。まるで、病院から抜け出した熱病やみのやうなその姿は、勿論すぐに人々の注意を惹いた。とつぜん人々は聲高に話したり、喚いたりし始めた。と、誰やらが大きな聲で、

『あれがスタヴローギンの情婦だ！』と叫んだ。  
するとまた一方から、

『殺したばかりで足りないで、のこ／＼見物に來やがつた！』

と見ると——うしろから誰かの手が、リーザの頭上つじやうに振上げられたと思ふと、さつと打ち下された。リーザは倒れた。その瞬間マヴリーキイの恐しい叫聲が聞えた。彼は救けに行かうと身をもがきながら、リーザと自分を隔てる一人の男を、力任せに撲りつけた。しかしその瞬間、例の職人が両手で後から彼を抱きしめた。暫くの間はあたり一面がや／＼と入亂れて、何が何やら見分けがつかなくあつた。リーザはそれからいまだ、起上つたやうに憶えてゐる。けれど、すぐにまた新しい打撃にばかりと倒れた。とつぜん群集はさつと分れて、倒れたリーザの周りにさ／＼やか空地が出来た。狂氣のやうになつた血みどろのマヴリーキイは、泣いたり、喚いたり、我とわが手を振ちたりしながら、彼女の上に立はだかつてゐた。それから先どうなつたか、精確な事はわたしも憶えてゐない。たゞ突然人々が、リーザをどん／＼擔ぎ出した事だけは記憶してゐる。わたしもその後から駆け出した。彼女はまだ生きてゐた。事によつたら、まだ意識があつたかも知れない。

後でこの群集の中から例の職人と、別に三人の者が検擧された。この三人は今日まで、自分らはあの兇行に何の關係もない、自分らが捕まつたのは誤解に過ぎない、と言張つてゐる。或ひは彼らの言ふ通りかも知れない。職人などは、明かな證據を握られてゐるにも拘らず、元來わけのわからない男の事だから、いまだに秩序だつて事件の説明が出来ないでゐる。わたしも少し離れてはゐるが、目撃者の一人として、豫審で申立てをしなければならなかつた。わたしの申立はかうだつた——この事件は極めて偶發的のものだし、それに関係者はみんな酔拂つて、事件の糸筋などはまるで見失つてしまつた連中だから、或ひは前から狂暴な氣分になつてゐたかも知れないが、殆ど自分で自分の行爲を意識してゐなかつたに相違ない。今でもわたしはかういふ意見を持してゐる。

#### 第四章 最後の決議

##### 一

この朝いろんな人がピョートルの姿を見た。さういふ人はみんな同じやうに、彼が恐ろしく昂奮してゐた事を、後で思ひ出した。午後の二時頃に、彼はガガーノフの所へ寄つた。彼はついその前日、田舎から出て来たばかりで、その家は訪問客で一杯になつてゐた。彼らは今度新たに出来た珍事を、一生懸命に熱くなつて論じ合つてゐた。ピョートルは誰よりも一番に喋つて、他人に自分の説を傾聴させた。彼はいつもこの町で『頭に穴の明いたお喋りの書生さん』といふ事になつてゐるが、いま彼はユリヤ夫人の事を言ひ出したので、町ぢう大騒ぎをしてゐる場合だから、この話題は忽ち一座の注意を擱んだ。彼はつい近頃までのごく親しい、隔てのない夫人の對談相手として、色々珍しい意想外な報道を齎した。その中に彼は何げなく(もちろん不注意に)、町でも名を知られた多くの人に關する、ユリヤ夫人の意見も少々もらして聞かせたが、無論それはすぐに一座の人の自尊心を傷つけた。彼の話は全體に曖昧で、ぢくはぐだつた。それは惡氣のない正直な人間が、一度に山のやうな誤解を解かねばならぬ苦しい破目になつて、單純な駈引のない性分のために、何から言ひ出して、どう締括りをつけたものか、自分でも分らないでゐるやうに見受られた。

彼はかなり不注意に、ユリヤ夫人はスタヴローギンの秘密をすっかり承知してゐて、あの陰謀を操つたのはつまりあの人のものだ——といふ意味をうっかり口から洩らした。つまり夫人が彼ピョートルに、あんな事をさせるやうに仕向けたのだ。なぜと言つて、彼自身あの『薄命なリーザ』に戀してゐたから、彼は殆ど自分でリーザを馬車に乗せて、スタヴローギンの家へ連れて行くやうに、うまく『持かけられ』てしまつた、とかう言ふのである。

『え、え、あなたの方は幾らでも嗤つて下さい。あ、僕も前から分つてたらなあ！——これがどういふ結果になるかつて事がちやんと前から分つてたらなあ！』と彼は語を結んだ。

スタヴローギンに關する様々な不安げな間に對して、彼はきつぱりとかう答へた。レビヤードキンの横死は彼の考へに依ると、本當に純然たる偶然の出來事で、金を見せびらかした當のレビヤードキンは、徹頭徹尾わるいのだ——かういふ風の事を、彼は格別あざやかに説明した。聽手の一人が何げなく、君はそんな豪さうな事を言つたつて駄目だ、君はユリヤ夫人の家で飲み食ひして、殆ど寝泊りしないばかりの關係だつた癖に、今となつて自分から音頭を取つて、夫人の顔に泥を塗つてゐる、そんなやり方は決して君の考へてるほど、見つともいゝものではない、と注意した。しかし、ピョートルはすぐに抗辯した。

「僕があすこで飲み食ひしたのは、何も金がなかつたからぢやありません。あすこの人が僕を招待したからつて、それは僕の知つた事ぢやありません。あれだけの事に對してどのくらゐ感謝したらいいか、それは僕自身の判断に任せて頂きたいもんですね。」

結局、全體として一座の受けた印象は、彼に取つて有利なものであつた。『まあ、あの男が無邪氣な、間の抜けた、そして勿論からつぽな人間だとしても、ユリヤ夫人の愚かな眞似に對して、あの男に責任のありやうがないぢやないか？ それどころか、かへつてあの男が夫人を引止めるやうにしてゐたんだもの……』

その日の二時ごろ、とつぜん新しい報知が傳つた。ほかでもない、あれほど喧しい噂のあつたスタヴローギンが、不意に正午の汽車で彼得堡へ發つてしまつた、といふのである。この報知は多大の興味を惹き起した。多くの人は眉を顰めた。ピョートルは極度の驚きに顔色まで變へて、『誰があの男を逃がしてしまつたんだ？』と奇妙な叫びを發したとの事である。彼はすぐにガガノフの家を駆け出した。とは云へ、彼はそれからまた二三軒の家で姿を見せた。

日暮れごろ、彼は非常な困難を排して、ユリヤ夫人の家へも首尾よく入り込んだ。夫人は斷じて彼に會はないと言つてゐたのだ。この事は、三週間後夫人が彼得堡へ出發する前に、當の夫人の口から始めて聞いたのである。夫人は詳しい事は言はなかつたが、『あの時はもう、お話にならないほど脅しつけられましたの。』と彼女は胸を慄はせながら語つた。察するところ、彼はもし夫人が何か『口を辻らさう』などといふ氣を起したら、夫人をも連類者にしてしまふぞと、脅しつけたものらしい。夫人威嚇の必要は、もちろん當の夫人などには分らない當時の彼の陰謀と、密接な關係は持つてゐたが、どういふ譯で彼が夫人の沈黙いかんをあゝ氣づかつたか、またどうして新しい夫人の憤激の爆發をあゝ恐れたか？ それを夫人自身が知つたのは、それから五日ば

かり經つて後の事である。

もうすゝかり暗くなつたその晩の七時すぎに、町はづれのフオマア横町の歪みかゝつた小家——少尉補エルケリの住まひに、五人組の『仲間』がすつかり顔を揃へて集つた。この總會は、當のピョートルが決めたのだが、彼は不都合千萬にも、すつかり遅刻してしまつた。會員の連中は、もう一時間から待呆けを食はされた。この少尉補エルケリは、ギルギンスキイの命名日に、鉛筆を手にし手帳を前に控へて、しじう無言のまゝ坐り込んでゐた、例のよそ者の若い將校だつた。彼はつい近頃この町へやつて来て、町人うまれの老姉妹の住んでゐる、淋しい横町の家の間借りしてゐたが、もう近い中に轉任しなければならなかつた。かういふ譯で、彼の家は仲間の集りに一ばん目立たない、安全な場所であつた。この奇妙な少年は、並はづれて無口な性質で知られてゐた。どんなに一座が騒ぎたつてゐようと、どんなに異常な事柄が話題に上つてゐようと、自分からは一ことも口を利かないで、一生懸命に注意を緊張させ、子供らしい目つきで話手を注視して、耳を傾けながら、十晩でもぶつ續けに坐り通す事が出来る。彼は極めて愛くるしい、殆ど利口さうに見えるくらゐな顔だちをしてゐた。

彼は五人組に入つてゐなかつたが、ほかの人は多分なにか實行的の方面で、特別な任務を帯びてゐるのだらう、と想像してゐた。しかし、今では特別任務を帯びてゐるところか、自分の位置さへ碌々わきまへてゐなかつたことが、明瞭になつた。たゞ彼は、つい先頃はじめて會つたピョートルに、深く心酔してゐたに過ぎないのである。もし彼が、時を過つて墮落した社會主義かぶれ

の怪物に出會つて、何か社會的かつ浪漫的な口實のもとに、強盜の寄合のやうな徒黨を作り、まづ試験のために、誰でも出會ひ次第の百姓を殺して、有金を強奪しろと焚きつけられたら、彼は必ずのこ／＼出かけて行つて、言はれた通りをするに相違ない。彼はどこかに病身な母親を持つてゐて、月々登しい俸給の半ばを割いて送つてゐた——あゝ、彼女はこの亞麻色をした可愛い頭に、どんなに熱い接吻をした事だらう、どんなにわが子の上を思つて慄へた事だらう、どんなにわが子の上を神に祈つた事だらう！ わたしがこの男の事をこんな長々と書いたのは、この少年が可哀さうで堪らないからである。

『仲間』は昂奮してゐた。昨夜の出來事は彼らを顛倒させた。一同はどうやら臆氣づいてゐるらしかつた。彼らが今まで熱心に加擔してゐた單純な、とはいへ一定の系統のある醜惡事件は、遂に彼等にとつて意想外な結果を來したのである。夜の火事、レビヤードキン兄妹の慘殺、リィザに對する群集の暴行——かういふ事は彼らが番組の中で、夢にも豫想しなかつた意外事であつた。彼らは專制と擅横をもつて自分たちを操る人間を、熱くなつて非難した。手短かにいふと、彼等はピョートルを待つてゐる間に、互に調子を合せて、もう一ど彼にはつきりした説明を求めよう、もし彼がもう一度この前のやうに、曖昧な事を言つて胡麻化さうとするなら、もう斷然五人組を打毀して了つて、その代り『理想宣傳』の新しい秘密結社を創立しよう。が、それはもう自分たちの發意に係るもので、同等の權利に立つ民主的なものでなくてはならない、といふ事に決心したのである。



リップチンとシガーレフと民情通とは、殊にこの説を主張した。リヤームシンは同意らしい顔つきをしながら、沈黙を守つてゐた。ギルギンスキイは何とも決し兼ねて、まづピョートルの言分を聞かうとした。で、一應ピョートルの説明を聴く事に決つた。けれど、彼はいつまで経つてもやつて来なかつた。かうした人を眼中に置かぬやり方は、一さう彼等の心に毒をそゝいだのである。エルケリはぜん／＼沈黙を守つて、たゞ茶を出す方ばかり、一生懸命に斡旋してゐた。彼は湯沸も持込まなければ、女中も入れないで、杯コップに注いだのを盆に載せて、主婦の處から自分で運んで来るのであつた。

ピョートルはやつと八時半に顔を出した。彼は、一同の座を構へてゐる長椅子の前の圓卓へ、づか／＼と早足で近寄つた。手には帽子を持つたまゝで、茶も辞退して飲まなかつた。彼は毒々しい、いかつい、高慢げな顔をしてゐた。きつと人々の顔つきで、皆が『謀反』を起してゐるな、と悟つたに相違ない。

「僕が口を開く前に、一つ君たちの思つてゐる事をぶちまけてくれ給へ。君たちは何だか妙に取濟ましてゐるぢやないか。」一同の顔をじろりと見廻しながら、意地悪げな冷笑を浮かべて、彼はかう言ひ出した。

リップチンは『一同を代表して』口を切つた。憤慨のあまり聲を慄はせながら、『こんな調子で續けて行つたら、かへつて自分の脳天をぶち割るやうな事になるかも知れない』と言放つた。無論、自分たちは脳天をぶち割らうと、どうしようかと、少しも恐ろしいとは思つてゐない、否、

寧ろそれを覺悟してゐるくらゐだが、しかし、それはたゞ／＼共同の事業のためのみである（一座に動揺と賛成の氣配が感じられた）だから、どうか自分達に對して、赤裸々にやつて貰ひたい、いつでも前もつて知らせて貰ひたい、さうしなかつたら、どんな事になるか分つたものぢやない（またもや一座が動揺して、幾たりかの喉を鳴らす聲が聞えた）、あんな風に仕事をするのは、自分たちに取つて屈辱でもあれば、危険でもある……こんな事を言ふのは、決して臆氣がついたためではない。たゞ一人の人間が自分だけの一了見で働いて、ほかの者が將棋の歩の役廻りをしてゐたのでは、その一人の者がやり損なつたら、ほかの者までみんな引つかゝらなきやならない（然り、然りといふ叫び、一座の聲援）。

「ちよつ、ばか／＼しい、一體どうしろと言ふんだらう？」

「一體あのスタヴローギン氏の下らない陰謀が、リップチンはかつとなつた。「共同の事業にどういふ關係を持つてゐるんです？ あの人中央本部と、何か秘密の關係を結んでゐるのは勝手です。たゞし、その昔嘶めいた中央本部なるものが、實際に存在してゐるとすればだが、そんな事は別に知りたくもありませんよ。ところで、今度あの殺人が遂行されて、警察が騒ぎ出した。糸を手繰つて行けば、了ひにや糸巻まで探り當てる道理ですからね。」

「あなたがスタヴローギンと一緒に捕まへられたら、我々も同様にやられることになるんですよ。」と民情通が言ひ添へた。

「そして、共同の事業のためには、ぜん／＼無益なことですからね。」とギルギンスキイが大

儀さうに語を結んだ。

「何て下らないことを！ あの人殺しは全くの偶発事件だよ。フェーヂカが強盗の目的でやつたことぢやないか」

「ふん！ しかし、妙な暗合ですね。」とプリーチンは體をもぢくさせた。

「お望みとあれば言つて了はう、あれはみんな君の手を通して行はれた事なんだよ。」

「どうして僕の手を通して？」

「第一にね、リプーチン君、君自身この陰謀に加擔してたぢやないか。また第二には、レビヤードキンを送り出すやうに命令を受けて、金を渡されたのは君ぢやないか。ところが、君は何といふ事を仕出かしたのだ？ もし君があつた男を出發させたら、何も起らないで済んだんだよ。」

「しかし、あの男を演壇に出して、詩を讀ませたら面白からう、といふ暗示を與へたのは、あれはあなたぢやありませんか？」

「暗示は命令ぢやありません。命令は出發させろといふ事でした。」

「命令？ ずあぶん奇妙な言葉ですなえ……それどころか、あなたは出發を中止するやうに命令したのです。」

「君は思違ひをしたのです。そして、自己の愚劣と僭越を暴露したのです。ところで、あの殺人事件はフェーヂカの仕業で、下手人はあの男一人、つまり強盜の目的でやつた事だ。君は世間の噂を聞込んで、それを信じてしまつたんだ。君は臆氣がついたんだ。スタヴローギンはそんな

馬鹿ぢやない。その證據には、あの人は今日ひるの十二時に、副知事と會見した後で、彼得堡へ立つてしまつた。もし何か君のいふやうな事があつたとすれば、晝の日中、あの人を彼得堡へ立たす筈がないぢやないか。」

「そりや僕だつて、スタヴローギン氏が自ら手を下したと、斷言しやしませんよ。」毒を含んだ無遠慮な調子で、リプーチンはかう引取つた。「スタヴローギン氏は僕と同様に、なんにも知らなかつたかも知りませんさ。ねえ、僕は羊肉が鍋へ打込まれるやうに、この事件に引込まれたかも知れないが、入譯は少しも知らなかつた。それはあなたにも、分り過ぎるほど分つてゐる筈です。」

「ぢや、君は誰が悪いと言ふんです？」ピョートルは沈んだ目つきで相手を見つめた。

「つまり、町を焼く必要を感じた連中ですよ。」

「しかし、君がたが胡麻化さうとするのが、何よりも一ばん悪いんだよ。だが、一つこれを讀んで見て、ほかの人にも見せたらどうです。たゞ参考までにね。」

彼は、レムブケーに宛てたレビヤードキンの無名の手紙を、衣囊から取出して、リプーチンに渡した。こちらはそれを讀んで見て、大分びつくりしたらしく、何やら考込みながら、隣へ廻した。手紙は迅速に一座を一廻りした。

「これは本當にレビヤードキンの手ですか？」とシガーレフが訊ねた。

「あの男の手です。」リプーチンとトルカチェンコ（例の民情通）が、かう斷言した。

「僕は君がたがレビヤードキンの事で、だいぶ後生氣を起したのを承知してるから、それでもよつとご参考までに。」手紙を受取りながら、ピョートルはかう言つた。「さういふ譯でね、諸君、フェーヂカなんてどこの馬の骨とも知れぬやつが、全く偶然に我々から、危険な人物を除いてくれた譯なんです。偶然てやつはかういふ仕事もするからねえ！ 全くいゝ教訓ぢやないか！」會員連はちらりと顔を見合はせた。

「ところで、諸君、今度は僕の方から、君がたにお訊ねする番が廻つて來ましたよ。」とピョートルは開き直つた。「ほかぢやないが、どういふ譯で諸君は許可も受けずに、町を焼くやうな事を敢てしたのです？」

「そりやまた何の事です！ 僕らが、僕らが町を焼いたつて？ そりや自分の罪を人に塗付けると言ふもんだ！」といふ人々の叫び聲が起つた。

「なに、僕にはよく分つてる、君がたは餘り圖に乗りすぎたんだ。」とピョートルは頑強に語を次いだ。「しかし、これはユリヤ夫人相手の悪戯とは、事が違ひますからね。僕がこゝへ諸君のお集りを願つたのは、つまり諸君が愚かしくも、自分からつゝき出した危険の程度を、説明するためなんです。實際、それは君がたばかりでなく、いろんな事に對して、重大な脅威となるんですからね。」

「飛んでもない、それどころか、たつたいま我々の方から、會員に一言の相談もなく、あれほど重大な、同時に奇怪な手段を採られた、その専横と不公平の程度を、君に指示しようと思つて

たんですよ。」今まで沈黙を守つてゐたギルギンスキイが、憤然としてかう切出した。

「ぢや、諸君は否定するんですね？ ところが、僕はかう斷言する、町を焼いたのは諸君です、諸君ばかりです、ほかに誰もありません。諸君、嘘をついちやいけな。僕には正確な報知が手に入つてるんだから。あゝいふ専横な行爲によつて、諸君は共同の事業さへ危殆に陥れたのです。諸君は無限な結社の網の、僅か一つの結び目に過ぎない。そして、中央本部に絶對盲従の義務を有してゐるんです。ところが、諸君のうち三人まで、何の通牒も受けなで、シユビグーリンの職工に放火を煽動した。かうして火事が起つたのです。」

「三人とは誰です？ 僕らのうち三人とは誰の事です？」

「をとゝひの夜三時すぎに、君は——トルカチェンコ君は『忘れな草』で、フォームカ・ザギヤーロフを焚附けたぢやないか。」

「冗談ぢやない。」とこちらは跳上つた。「僕はほんのひとこと云つたか云はないかだし、おまけに、それも何の氣なしだつたのです。たゞあの朝やつがぶん擲られたからですよ。ところが、奴があんまり酔拂つてるのに氣がついたので、そのまゝ打つちやつてしまつたんです。今あなたがさう言はれなかつたら、僕はまるで忘れてしまつたくらゐるでさあね。たつたひとことのために、町が焼けるなんて事があるもんですか。」

「君は一粒の火の粉のために、大きな火薬庫がすつかり爆破してしまつたのを、びつくりする人間によく似てゐるよ。」

「僕は隅の方で、小さな聲であいつに耳打したのに、どうしてそれがあなたに知れたんです？」  
トルカチェンコは不意に気がついて、かう訊ねた。

「僕はあすこの卓の下に隠れてたのさ。ご心配にや及びませんよ、諸君、僕は諸君の一舉一動  
ことごとく承知してゐますからね。リプーチン君、君は毒々しさうな笑ひ方をしてるね。ところが  
が僕はね、先をとゝひの夜中、君が寢室で臥りながら、細君を抓つた事まで知つてるからね。」

リプーチンはぽかんと口を開けたまゝ、眞蒼になつた。

（このリプーチンの手柄話は、彼の使つてゐるアガーフィヤといふ女中が喋つた事が、後にな  
つてやつと判明した。ピョートルはそも／＼の始めから、この女に金を握らして、間諜の役を命  
じてゐたのである。）

「僕は事實を證明していゝですか？」突然シガーレフが席を立つた。

「證明し給へ。」

シガーレフは腰を下して、身繕ひした。

「僕の了解した所によると（それに了解しない譯に行かない）、あなたは最初に一度と、それか  
ら後にもう一度、きはめて雄辯に——尤も、餘り理論的ではありませんが——いかに無限の結社  
の網で、露西亞が蔽ひ盡されてゐるかを、我々に説明して下すつた。ところで、一方から言ふと、  
現に活動しつゝあるこれ等の結社は、おの／＼絶えず新しい黨員を作つて、様々な支社によつて  
無限に擴つて行きながら、絶間なく地方官憲の權威を失墜さして、住民の間に懷疑の念を呼び起

し、破廉恥と、醜行と、一切の物に對する絶對の不信と、善に對する渴望を醸し出し、遂には火  
事といふ國民的性質を帯びた方法をもつて、もし必要と認められたら、豫定されたある瞬間に、  
一國を擧げて絶望の淵に沈めてしまふといふ、系統的な破邪の宣傳を目的とすべきである。とか  
ういふ風なお話でした。僕はあなた自身の言葉を、一語々々違はないやうに努めながら繰返した  
のですが、どうです、違つてゐますかしらん？ これは確かあなたが、中央本部から送られた代  
表者として、僕らに報告された豫定の行動なのです、さうぢやありませんか？ 尤も、その中央  
本部とやらも、今日までまるで得體の知れない、我々に取つて殆ど夢みたいな存在物なんです  
ね。」

「その通りです。尤も、君の言方は少し冗漫だがね。」

「人は誰でも自由の發言種を持つてゐます。ところで、あなたの言葉から推測するところ、露  
西亞全國を網目のごとく蔽うてゐる結社の數は、いま既に百といふ數に上つてゐるさうです。さ  
うして、あなたの假定を敷衍すると、もし各人が自分の仕事を完全にやり遂げたら、露西亞全國  
は與へられたる時期までには、一發の信號を合圖に……」

「えゝつ、面倒くさい、さうでなくつてさへ、仕事は澤山あるんだ！」ピョートルは肘椅子に  
坐つたまゝ、くるりと向を變へた。

「よろしい、ぢや僕は簡略して、單なる質問をもつて結びませう。我々は既にさまざまの醜行  
を見ました、住民の不滿を見ました、この地の行政官の没落を目前に見たばかりか、自らそれに

手を下しました。そして、最後にこの目で火事さへ見たのです。その上、あなたは何が不満なのでせう？ これはあなたの豫期した番組プログラムぢやありませんか？ 如何なる點に於て、我々を譴責しようとするんですか？」

「君らの専横を責めるんだ！」ピョートルは猛然として叫んだ。「僕がこゝにゐる間は、僕の許可なしに行動は出来ない筈だ。もう澤山。もう密告の用意は出来てるんだから、明日といはず今夜にも、君等はみんなふん捕つてしまふんだ。これが君らの受ける報りだ。これは確かな情報なんだよ。」

悪

これにはもうみんな、開いた口が塞らなかつた。

「しかも、單に放火指喉の件ばかりでなく、五人組としても捕るんだ。密告者には結社の秘密な聯絡が、よく分つてるんだからね。さあ、君たちの悪戯がかういふ事になつたんだよ！」

賢

「きつとスタヴローギンだ！」とリプーチンが叫んだ。

「何だつて……なぜスタヴローギンだ？」不意にピョートルはへどもどしたやうな風だつた。

「ちよつばかりしい。」彼はすぐ我に返つた。「それはシャートフだよ！ 恐らく諸君も今はご承知だらうけれど、シャートフは一時われわれの仕事に加つてた事があるんです。僕は何もかも打明けなきやならない。僕は、あの男の信用し切つてゐる二三の人を通じ、絶えずあの男を監視してゐる中に、驚いた事には、あの男が各結社聯絡の秘密もその組織も……つまり何もかも知抜いてゐる、といふ事を發見したのです。以前自分が加擔してゐた罪を免れるために、あの男

は我々一同を密告しようと思つた。が、今まで躊躇してゐたので、僕もあの男を大目に見てゐた。ところが、こんど君方はあの火事でもつて、やつ心の綱を切つて放したのだ。彼はあのために極度の震撼を受けて、もう躊躇の念を棄ててしまつた。だから、明日にも我々は放火犯および國事犯として、捕縛されなきやならないのだ。」

「本當だらうか？ どうしてシャートフが知つてるんだ？」

一座の動搖は名狀すべからざるものがあつた。

「今いつた事はすつかり本當です。僕は自分の足跡を諸君に啓示して、發見の道筋を説明する権利を持たないけれど、差當りこれだけの事は、諸君のために出来るのです。ほかぢやない、僕はある人間を通して、シャートフに影響を及ぼす。すると、あの男は自身そんな事を夢にも悟らないで、密告を延す事になる。しかし、それも僅か一晝夜きりで、一晝夜以上の猶豫はもう僕の力に及ばない。さういふ譯で、君がたも明後日の朝までは自分の安全を保障されたものと思つて差支へないのだ。」

一同は押黙つてゐた。

「もういよくあいつをやつつけなきやいかんぞ！」最初にトルカチェンコが怒鳴つた。

「疾づくにしてはなきやならなかつたんだ！」リヤームシンが拳固で卓をとんと叩きながら、毒々しい聲でかう言つた。

「しかし、どういふ風にやるんだ？」とリプーチンが呟いた。

ピョートルはすぐこの間の尻を押へて、自分の計畫を述べた。それはかうである。シャートフの保管してゐる、祕密の印刷機械を引渡すといふ口實の下に、明日の晩、日が暮れてから間もなく、機械の埋めてある寂しい場所へおびき出し、『そこで片づけてしまはう』といふのである。彼はいろいろ必要な微細デテイルに立入つて説明し（それはいま略して置かう）シャートフの中央部に對する曖昧な態度を詳しく話した。が、これもやはり讀者にはもう分つてゐる事だ。

「それは全くさうに違ひないけれど。」リプーチンが思切りの悪い調子で言ひ出した。「しかし、また……同じやうな性質の異變が重なる譯だから……餘り人心を脅やかし過ぎやしないかしらん。」

「無論、」とピョートルは合槌を打つた。「しかし、それもちゃんと見抜いてあるんだ。完全に嫌疑を避ける方法が講じてあるんだよ。」

彼は依然として正確な語調で、キリーロフの事を話して聞かせた。彼が自殺を決心したこと、合圖を待つと約したこと、死ぬる前に書置を遺して、口授される事を全部わが身に引受ると言つたこと——つまり、讀者の既に知悉してゐる事ばかりである。

「自殺しようといふ彼の決心——哲學的な、といふより、寧ろ氣ちがひめいた決心が、——あちら本部の知る所となつたのです（とピョートルは説明を續けた。）何しろ、あちらでは髪の毛一筋も、塵つば一本も見失はないで、それをみんな共同の事業のために利用するんだからね。本部ではこの決心の齎す利益を見抜き、かつ彼の覺悟の徹頭徹尾まじめな事を確めたので、露西亞

まで歸る旅費をあの男に送つて（あの男はなぜか是非とも露西亞で死にたいと言ふのだ）、ある一つの任務を託したところ、彼はその遂行を誓つた（そして、實際遂行したのだ）。その上に、本部から命令のあるまでは、決して自殺を決行しないと、既に諸君もご承知の誓ひを、あの男に立てさせたのだ。すると、彼はすべてを約束した。こゝでちよつとご注意を願ひたいのは、彼がある特別な事情で、結社に入つてゐる事業のためになつたことをしたいと、望んでゐることです。しかし、これ以上打明ける譯に行かない。そこで明日シャートフの後で、僕はあの男に口授して、シャートフの死因は自分にある、といふ手紙を書かせるつもりだ。これは非常に尤もらしく思はれるんだ。なぜつて、あの二人は始めごく仲がよくつて、一緒に亞米利加へも行つたんだが、後に喧嘩をおつ始めたんだからね。かういふ事はすつかり遺書の中に書込む積だ……それに……それの場合によつては、まだ他にも何か、キリーロフに背負しよはしてやつてもいい。例へば檄文の事だとか、放火の責任の一部分だとか……尤も、この事は僕もつとよく考へて見るがね。ご心配にや及びませんよ。あの男は下らない偏見を持つてゐないから、何でも承知してくれませうよ。」

一座に疑惑の聲が起つた。話があまり突飛で、小説じみてるやうに思はれたのである。尤も、キリーロフの事はみんな多少とも耳にしてゐた。殊にリプーチンなどは、一ばん深く知つてゐたのである。

「もしあの男がとつぜん考へを變へて、厭だと言ひ出したらどうです。」とシガールフが言つた。「その話が本當としたところで、あの男は全く氣ちがひなんだから、その希望は不確かなも

の言はなきやなりませんよ。」

「ご心配はいりませんよ、諸君、あの男は厭だなんて言やしない。」とピョートルは断切るやうに言つた。「契約に依ると僕は前日、つまり今日ですな、あの男に豫告しなきやならないのです。そこで僕はリプーチン君を誘つて、今すぐ一緒にあの男の處へ出かけよう。さうするとリプーチン君は、僕の言つた事が嘘か本當か確めた上で、必要とあれば、今夜すぐ諸君に報告するでせう。尤も、こんな人間どもを相手にして、かうまで一生懸命に説いて聞かせるのは、光榮すぎて罰が當るとでも感じたらしく、急に凄まじい憤懣の色を浮かべて、ぶつりと言葉を切つた。「尤も、諸君のご随意に行動し給へ。もし諸君が決心しなかつたら、この結社はこなくに粉碎されてしまふのだ。それもたゞ諸君の反抗と、裏切が原因なのですぞ。さうすれば我々はこの瞬間から、めい／＼自由行動を取る事になる。しかし、前もつて承知して貰ひたい事があります。もしさういふ風になれば、シャートフの密告と、それに關聯する不快事のほかに、もう一つちよつとした不快事を背負はなちやなりませんよ。それは結社組織の際に固く宣言した事だからね。ところで、僕自身に到つては、僕はね、諸君、あまり諸君を恐れちやあませんよ……どうか僕が諸君にしつかり結びつけられてる、などと思はないでくれ給へ……尤も、そんな事はどうでもいいや。」

「いや、僕等は決心します。」とリチャムシンは言明した。

「ほかに仕方がないからね。」とトルカチェンコが呟いた。「もしリプーチンが事實を確めた

ら……」

「僕は反對です。僕はそんな残忍な決議には極力反對します！」突然ギルギンスキイが席を立つた。

「しかし？」とピョートルは聞き返した。

「しかしとは何です？」

「君がしかしと言つたので、僕はその次を待つてるのさ。」

「僕はしかしなどと言はなかつた筈です……たゞ僕が言ひたかつたのは、もし皆がそんな決議をすれば……」

「その時は？」

ギルギンスキイは口を噤んだ。

「僕の考へでは、自己の生命の安全を等閑に附するのは構はないが、」出し抜けにエルケリが口を開いた。「もし共同の事業を傷けるやうな場合には、自己の生命の安全を等閑する事は出来な

いと思ひます……」  
彼は間諜ついで顔を赧くした。一同は自分の想念に没頭してゐたけれど、それでもみんなびつくりしたやうに彼を見つめた。この男が同じやうに口を開かうなどは、まるで思ひがけなかつたのである。

「僕も共同の事業に組するものです。」不意にギルギンスキイがかう言つた。

一同は席を立つた。明日はもう一ところに集らないで、午までにいまど一同の情報を綜合した上、いよいよ最後の打合せをしようとして決定した。そして、印刷機械の埋めてある場所が指示せられ、めい／＼の役割が決められた。リプーチンとピョートルとは相ともなつて、早速キリーロフのもとへ赴いた。

## 二

シャートフが密告するといふ事は、『仲間』のもの一同かたく信じ切つてゐた。しかしピョートルが自分らを、まるで将棋の歩のやうに翻弄してゐるといふ事も、やはり信じ切つてゐた。それから、明日は何と言つても、一同が揃つて指定の場所へ集り、シャートフの運命を決してしまふのだといふ事も、また覺悟してゐた。とにかく、彼等はまるで蠅のやうに、大きな蜘蛛の巣にかつたのを感じて、口惜しがつたけれど、それでも恐怖に震上つてゐた。

ピョートルは疑ひもなく、彼等に對して拙い事をしたに相違ない。彼がほんの心もち現實に色どりを施したら、萬事はもつと穩かに、もつとやさしく運んだ筈なのである。ところが、彼は事實を穩かな光に包んで、古代羅馬の市民らしい行爲とか、何とかそんな風に説明しようとしないうで、單に粗野な恐怖と、自己の生命に關する威嚇のみに力點を置いた。これなどは、もう全然禮儀を蹂躪した仕方である。もちろん萬事が生存競争の世の中で、ほかに何の自然律もないのは分り切つてゐるけれど、しかし何と言つても……

けれど、ピョートルは彼らの『羅馬市民』らしい心に觸れる暇がなかつたのだ。彼自身からして、常軌を逸したやうな心持になつてゐた。ほかでもない、スタヴローギンの逃亡は彼を仰天させ、壓倒してしまつたのである。スタヴローギンが副知事に面會したといふのは、彼の出たら目である。それどころか彼は誰一人、母親にさへ會はないで、出發したのだ。實際、誰も彼を止めるものなかつたのが、不思議なくらゐである。(その後、地方長官はこの點に就いて、特別な辯明書を徴された)。ピョートルは一日探し廻つたけれど、差當りこれといふ手蔓もなかつた。彼がこんなに心配したのは、これまでにない事である。實際さう急に綺麗さつぱりと、スタヴローギンを諦める譯に行かないではないか！それがために彼は『仲間』に對しても、餘り優しく出来なかつたのである。それに、彼はいま自由な體ではなかつた——猶豫なくスタヴローギンの後を追はうと、決心したのである。ところが、シャートフの一件が彼の足を止めた。萬一の場合のため、五人組をしつかり固めて置かなければならない。『あれだつてたゞ打つちやつてしまふ譯はない。或ひはまた何かの役に立つかも知れないからなあ。』かういふ風に考へたものと、わたしは想像する。

シャートフの方はどうかといふと、ピョートルは彼の密告を固く信じて疑はなかつた。尤も、『仲間』に話した密告書などといふ事は、みんな出たら目なのである。彼はそんな密告書など、かつて見た事も聞いた事もなかつたが、それが拵へてある事は、二二ヶ四といふほど確かなものと信じてゐた。シャートフはどんな事があつても、今度の事件——リーザの死、マリヤの慘殺を、



我慢することは出来ない、今この瞬間にこそ、密告の計畫を斷行するに相違ない、とかう信じ切つてゐたのである。事によつたら、案外かれはこの想像に確かな根據を持つてゐたかも知れない。また彼が個人的にシャートフを憎んでゐたのも、やはり我々の間に知れ渡つた事實である。嘗て彼ら二人の間には諍いさかひがあつたが、彼は決して侮辱を忘れるやうな男ではない。わたしはこれこそ重なる理由ではないか、とさへ信じてゐるのである。

町の歩道は煉瓦だたみの狭くするしもので、通りによると板張りの處さへあつた。ピョートルはその歩道を一杯に占領しながら、眞中を無遠慮に歩いて行つた。そして、リプーチンが並んで歩く場所がなくて、時には一歩うしろからついて來たり、時には並んで話しながら歩くために、往來のぬかるみへ駆け下たりしてゐるのに、彼は一顧の注意さへ拂はうとしなかつた。ピョートルはふと思ひ出した——ついこのあひだ彼自分も、スタヴロギンの後からついて行くために、これと同様にぬかるみの中をちよ／＼駆け出したものだ。すると、スタヴロギンは丁度自分の自分のやうに、歩道一杯に幅をしながら眞中を歩いて行つた。あの時の光景をまざ／＼と思ひ浮かべると、彼は狂暴な憤怒に息がつまるやうな氣がした。

けれど、リプーチンも憤懣に息を窒らせてゐた。たとへピョートルが『仲間』の者を、思ふ存分に扱ふとしても、自分に對しては……なぜと言つて、自分は仲間の中の誰よりも、一番よく事情を知つてゐて、この事件に就ても一ばん密接な關係をもつてをり、誰よりも一ばん深く立入つてゐるそして、今まで間接とは言ひながら、絶間なくこの事件に力を添へてゐたのだ。あゝ、彼

は立派に分つてゐる——ピョートルは今でさへ絶體絶命の場合には、彼リプーチンを亡きものにするに相違ないのだ。しかし、彼はもうとうから、ピョートルを憎んでゐた。それは何も、一緒に仕事をするのが危険なからではなく、その傲慢な態度のためだつた。今度かういふ慘虐を決行せねばならぬ破目になつたので、彼は仲間をみんな一緒にしたより以上に、業を煮やしたのである。けれど悲しい事には、明日の晩かれは間違ひなく『奴隷のやうに』、第一番に約束の場所へ出かけて行くばかりか、ほかの者さへ引き立て、連れて來るに相違ない。それは彼自身にも分つてゐた。が、もし明日までにどうかして、わが身を亡さずにピョートルを殺す事が出來たら、彼は必ず殺して了ふに違ひないのだ。

かうした想念に没頭して了つて、彼は無言のまま暴君のうしろから、ちよ／＼と小刻みに歩いて行つた。こちらは彼の事などすっかり忘れた様子で、とき／＼不注意に、肘で彼を突つつくばかりだつた。突然ピョートルは、町でも一ばん賑かな通りに立止つて、ある料理屋へ入つて行つた。

「一體どこへ行くんです？」リプーチンはかつとなつた。「こゝは料理屋ぢやありませんか。」

「僕はビフステーキが食ひたいのさ。」

「冗謎ぢやない、こゝはいつも人で一杯ですよ。」

「いゝぢやないか。」

「しかし……遅れるぢやありませんか。もう十時ですからね。」

「あすこへ行くのに、遅れるの遅れないのつて譯はないさ。」  
 「しかし、僕は遅くなつちや困りますよ！ 仲間が僕の歸りを待つてるぢやありませんか。」  
 「構ふもんかね。君、あんな連中の所へ行くのは、ばか／＼しいぢやないか。今日は君たちが騒ぐもんだから、僕まだ食事をしてないんだよ。キリーロフの所なら、遅ければ遅いだけ確かなんだから。」

ピョートルは別室に陣取つた。リプーチンは腹立たしげな、侮辱されたやうな顔つきで、わきの方の肘椅子に腰を下しながら、相手の食事をぢつと見つめてゐた。かうして、三十分以上も経つた。ピョートルは泰然と落ちつき拂つて、さも甘さうに舌を鳴らしながら喰べ始めた。そして、二度も芥子を取寄せたり、その後で麥酒を註文したりして、そのあひだ一言も口を利かなかつた。彼は深い物思ひに沈んでゐた。彼は一どきに二つの仕事をする事が出来た——つまり、物を味ひながら喰べると同時に、深い物思ひに沈めるのであつた。リプーチンはたうとう彼が憎くて堪らなくなつて、どうしてもその顔から目が放せない程だつた。それは一種の神経的發作とも云ふべきものであつた。彼は相手の口へ抛込むビフステーキの切れを、一つ／＼數へながら、その口がぱくつと開いて、脂ぎつた肉のきれをさも甘さうにむしやく／＼噛んだり、汗を吸つたりするのが、憎くてならなかつた。了ひにはビフステーキその物までが憎らしかつた。彼は何だか眼がちらちらするやうに思はれて來た。頭が心持ふらく／＼して、脊中は急に熱くなつたり、寒くなつたりするのであつた。

「君は何もしてゐないんだから、一つこれを讀んで見たまへ。」出しぬけにピョートルが、一葉の紙きれを彼に抛り投げた。

リプーチンは蠟燭の方へ近寄つた。紙きれは拙い字で一杯に細かく書きつめられ、一行毎に消しがあつた。やつと彼が讀み終へた時、ピョートルはもう勘定を済まして、出かけようとしてゐる所だつた。歩道へ出ると、リプーチンはその紙きれを彼に突き出した。

「まあ、君持つてる給へ。後で話すから。ところで、君はどう思ふね？」  
 リプーチンは全身をわなく／＼と慄はした。

「僕に言はせれば……こんな檄文なんか……たゞ馬鹿げたお笑草に過ぎないですよ。」  
 憤怒は堰を破つて出た。彼は誰かに體を鷲掴みにされて、どこかへ連れて行かれるやうな氣がした。

「もし我々が、彼は全身をびり／＼と小刻みに慄はせながら、「こんな檄文の撒布を決心したら、それこそ馬鹿な物事をわきまへない人間として、人の輕蔑を招くばかりですよ。」  
 「ふむ！ 僕はさうは考へないね。」ピョートルはしつかりした足どりで歩いた。  
 「僕こそさうは考へない。一體これはあなたが自分で作つたんですか？」  
 「それは君の知つた事ぢやないよ。」

「僕は『光輝ある人格』——あの想像する事も出来ないほど愚劣きはまる詩も、やはりヘルツェンの作だとはどうしても思はれませんよ。」

「ばか言つちやいけない。あれは立派な詩だよ。」

「僕はまだ、不思議な事があるんです。」 リプーチンは勢にかられながら、どん／＼まくし立てた。「どうして我々は、一切の破壊を目的とする行動を宣傳するんでせう？ 歐羅巴でこそ労働階級が存在してるから、一切の破壊を望むのは自然だけれど、露西亞には我々のやうな愛好家しかゐらないんだから、たゞ埃を立てるばかりでさあね。」

「僕は君をフリエ派かと思つてたよ。」

「フリエ説は違ひます、まるで違ひます。」

「まるでノンセンスだつて事は、僕も承知してるさ。」

「いや、フリエ説はノンセンスぢやありません……失敬ですが、僕は五月に叛亂が起らうとは、どうしても信ずる事が出来ませんよ。」

リプーチンは上衣の釦まではづした。それほど熱かつたので。

「いや、澤山、ところで、今ちよつと忘れないやうに言つとくがね、」とピョートルには恐ろしく冷靜な調子で、いきなり話題を變へてしまつた。「君はこの檄文を自分の手で文選して、印刷しなくちやならないんだよ。シャートフに預けた印刷機械を、あす僕らが掘出すから、君はその日から保管を引きうける事になるんだ。そして、出来るだけ急いで活字を拾つて、一枚でも餘計に刷つてくれ給へ。この冬ぢうかゝつて、それを撒散らすんだからね。資金の出所に就ては、指令がある筈だ。とにかく、出来るだけ餘計に刷つて貰はなきや。ほかの地方からも註文があるんだから。」

「だから。」

「いやです、それは眞平ご免かうむりますよ。僕はそんな……事を引きうける譯に行きません……お断りします。」

「それでも、やはり引きうけるやうになるよ。僕は中央委員會の命令で行動してるんだから、君はそれに服従する義務があるんだよ。」

「ところが、僕の考へでは、外國にある露西亞の中央委員會は、現實の露西亞を忘れて、一切の連絡を破つてしまつたのです。彼らは夢を見てるに過ぎない……いや、それどころか、露西亞に何百といふ五人組があるといふのは嘘で、僕らの組がたつた一つしかないのぢやないか、連絡網なんてものはまるでないのぢやないか、とかう思はれるくらゐですよ。」 もう了ひには、リプーチンは息をつまらせて來た。

「事實の眞偽さへ辨別しないで、輕卒に雷同した君たちこそ、かへつて輕蔑に價するぢやないか……今だつてまるで野良犬みたいに、僕の後から走つて來るぢやないか。」

「いや、走つて行きやしませんよ。僕らもあなたの傍を離れて、新しい結社を組織する權利を、十分にもつてるんですからね。」

「ばかッ！」突然ピョートルは眼を輝かしながら、凄じい勢でかう怒鳴りつけた。

二人は暫く相對して突立つてゐた。ピョートルはくるりと踵を返して、恃むところありげな足どりでもとの方角へ進んで行つた。

『このまゝくると向きを變へて、歸つてしまはうかしら。いま引返さなかつたら、永久に後戻りは出来ないだらう。』かういふ考へがリプーチンの頭の中を、まるで稲妻のやうに閃いた。彼はちやうど十歩だけ歩く間、かういふ事を考へてゐたが、十一歩めにまた新しい自暴自棄的な想念が、彼の頭の中にぱつと燃上つた。彼は引返しもしなければ、あとへ戻らうともしなかつた。

二人はフィリップスの持家へ近づいたけれど、そこまで行き著かない中に、横町——といふより寧ろ垣根に沿うた、人目に立たない徑へそれた。暫くのおひだ二人は溝つぶちの、急な傾斜を傳つて行かねばならなかつた。足がずる／＼と滑るので、垣根に掴まつて歩いた。曲りくねつた垣根の一ばん暗い角の所で、ピョートルは板を一枚ぬき取つた。そしてそこへ開いた穴の中へ、すぐさま潜り込んだ。リプーチンはちよつと面くらつたが、やがて自分も後から這込んだ。それから、板は元のやうに嵌められた。これは、フェーヂカがキリーロフの所へ忍込む、例の祕密な通路だつた。

「僕らがこゝへ來た事を、シャートフに知らせちやいけないんだよ。」ピョートルはリプーチンに向つて、いかつい調子でかう囁いた。

## 三

キリーロフはいつもこの時刻にするやうに、例の革張りの長椅子に坐つて、茶を飲んでゐた。

彼は腰をあげて、出迎へようとしなかつたが、何だか妙に全身をびくりと躍らして、入來る人々を不安げに見上げた。

「まさにご想像の通り。」とピョートルは言つた。「僕は例の用事で來たんです。」

「今日ですか？」

「いや、いや、明日ですよ……これくらゐの時刻にね。」

彼は、急に落ちつかなくなつたキリーロフの様子を、いくぶん不安げな表情で覗込みながら、忙しげに卓の傍へ腰を下した。とはいへ、こちらはもうすつかり落ちついて、前と同じやうな顔つきをしてゐた。

「どうも仲間の連中が本當にしないのでね……僕がリプーチンを連れて來たからつて、君別に怒りやしないでせうね？」

「今夜は怒りやしないが、明日は一人きりでゐたいもんですなあ。」

「しかし、僕が來る前にやつちやいけませんよ。僕が立會の上でね。」

「君の立會は望ましくないがなあ。」

「君おぼえてるでせう。僕が口授する事をそつくり書いて、それに署名すると約束したぢやありませんか。」

「僕はどつちだつていゝのだ。ときに、今夜は長くゐますか？」

「僕ある男に會はなくちやならないから、三十分ばかりお邪魔したいんですよ。その後はどう

などご勝手ですが、三十分だけは坐つてますよ。」

キリーロフは押黙つてゐた。その間にリプーチンはわきの方の、主教の肖像の下に陣取つた。先ほどの自暴自棄な想念は、次第々々に彼の頭腦を領して行つた。キリーロフは殆ど彼に目もくられなかつた。リプーチンは前から彼の人生觀を知つてゐて、いつもたゞそれを冷笑してゐたが、今はむつつりと押黙つて、陰氣らしい顔つきで邊りを見廻してゐた。

「お茶を頂いても悪くないですな。」とピョートルは椅子を摺寄せた。「たつた今ビフテキを喰べたんですがね、お茶は多分あなたの所に出てるだらうと思つて、當てにして來たんですよ。」

「お飲みなさい、ほしかつたら。」

「もとは君の方から欸待もてはしてくれただやありませんか。」ピョートルは酸つばさうな顔をしてかう言つた。

靈

「そんな事はどつちだつて同じだ。リプーチン君にも飲ましたらいゝでせう。」

「いや、僕は……飲めません。」

「飲めませんか、それとも欲しくくないですか、どつちだらう？」いきなりピョートルがくるりと振向いた。

「僕はこの人の處では飲まないです。」思ひ入れたつぷりな調子で、リプーチンは斷はつた。

ピョートルは眉を蹙めた。

「神祕くさい匂がするかね。本當に君らは譯の分らない人たちだ何といふ連中だらう！」

誰も返事をする者がなかつた。まる一分、沈黙がつゞいた。

「しかし、僕はたつた一つ知つてる事があります。」とつぜん彼は言葉するどくかう言ひ足した。「いかなる偏見といへども、人が自分の義務を果すのを、妨げる譯に行かないですよ。」

「スタヴローギンは行つてしまつたんですか？」とキリーロフは訊ねた。

「行つてしまひましたよ。」

「それはいゝ事をした。」

ピョートルはちよつと眼を光らしたが、すぐに自制した。

「僕は、君が何と思はうと、平氣ですよ。たゞめいゝが約束を守りさへすればいゝんです。」

「僕は約束を守りますよ。」

「尤も、僕は不斷から信じてましたよ。君は獨立不羈の進歩的な人だから、自分の義務は履行されるだらうとね。」

「君は滑稽な人だ。」

「ぢや、さう云ふ事にしときませう。僕は人を笑はすのが、愉快で堪らないんです。僕は人様のお氣に入れば、いつでもそれを愉快に思ふのです。」

「君は僕に自殺させたくて堪らないので、ひよつと急に厭だなんて言ひ出しやしないかと、びくびくしてるんぢやありませんかね？」

「しかし、考へてご覧なさい、君は自分から進んで、我々の行動と自分の計畫を、結び合はし

たんぢやありませんか。僕らはもう君の計畫をあてにして、色々方法を立てたんだから、君はもう今さら厭だといふ譯に行かない筈ですよ。君の方が僕らを誘き出したんですからね。」

「そんな事を強ひる権利は少しもない。」

「分つてます、分つてます。無論それは全然あなたの自由意志で、僕らはなんの意義もない人間です。たゞその君の自由意志が、實行されさへすりやいゝんです。」

「で、僕は君らの醜行を、すっかり引受けなきゃならない？」

「ねえ、キリーロフ君、君は臆氣おどけがついたんぢやありませんか？ もし斷はりたいなら、今すぐさう言つて下さい。」

「僕は臆氣なんかつきやしない。」

「實は君が餘りいろんな事を聞くから、それでちよつと言つて見たんですよ。」

「君はもうすぐ歸りますか？」

「また聞きますね？」

キリーロフは卑しむやうに相手を眺めた。

「ねえ、」次第に腹を立て、落ちつきを失ひながら、どういふ語調を取つたものか分らないで、ピョートルは言葉を續けた。「君は一人になつて、思想を集中するために、僕の去るのを望んでをられるが、しかしそれは君に取つて——誰よりも一番に君に取つて、危険な兆候ですよ。君はたくさん考へたがつてをられるが、僕に言はせれば、考へたりなんかしないで、たゞ簡単にやつ

て了つた方がいゝですよ。君は全く僕を心配させますぜ。」

「僕がたゞ一つ厭なのは、その瞬間に、君みたいな汚けがらはしい蟲けらが、僕の傍にゐるといふ事なんだ。」

「ふん、そんな事はどうだつて同じぢやありませんか。なんなら、僕そのとき外へ出て、玄關口に立つてゝもいゝ。君が死を覺悟しながら、そんなに虚心坦懐でゐられないのは……それは非常に危険な事です。僕は玄關口に立つてゐますよ。そして、僕はなんにも分らない男で、君より無限に低い人間だと、かう假定したらいゝぢやありませんか。」

「いや、君は無限といふ譯ぢやない。君には才能があるんだが、非常に多くの事物に理解を缺いてるのだ。それは、君が下劣な人間だからです。」

「結構です、實に結構です。僕は今も言つた通り、人に氣ばらしをさせるのが、非常に愉快なんです……こんな瞬間にね。」

「君はなんにも分らないのだ。」

「と言つても、僕は……なんにしても、僕は敬意を表して謹聴しますよ。」

「君はなんにも出来ない。今でさへ、その淺はかな怒りを隠すことが出来ないのだ。そんなものを顔に出すのは、君に取つて不利益なんだがなあ。もし君が僕に痼癩こじを起させたら、僕は急に半年くらゐ先と、言ひ出すかも知れませんか。」

ピョートルは時計を眺めた。

「僕は今まで一度も、君の理論を理解しなかつたが、しかし君がその理論を考へ出したのは、我々のためぢやないのだから、僕らがあつても、實行されるに相違ない、それだけは分つてゐます。それから、また君が思想を呑んだのでなく、思想が君を呑んで了つたのだから、延期する譯に行かない、といふ事もやはり承知してゐますよ。」

「何だつて？ 思想が僕を呑んでしまつたつて？」

「さう。」

「僕が思想を呑んだのぢやないつて？ それは面白い。君には小つぽけな智性があるんだね。たゞ君が幾らからかつても、僕は誇りを感じるだけだ。」

「結構ですよ、結構ですよ。全くさうなくぢやならない。君は誇りを感じなくぢやならない筈です。」

「もう澤山、君も茶を飲んでしまつたから、もう歸つてくれ給へ。」

「畜生、本當に歸らなきやなるまいて。」とピョートルは腰を上げた。「しかし、それにしてもやはり早過ぎるなあ。ねえ、キリーロフ君、たぶんミヤスニチーハ(淫賣婦の名)の所へ行つたら、あの男に會へるでせうね、誰の事か分るでせう？ それとも、あの女も嘘をついたか知らん。」

「會へやしませんよ。あの男はこゝにゐるので、あつちぢやないからね。」

「え、こゝだつて、あん畜生、一體どこにゐるんです？」

「臺所に坐り込んで、飲んだり食つたりしてる。」

「何て生意氣な奴だ！」ピョートルは赤くなつて怒り出した。「あいつはあすこで待つてなきやならない筈だつたのに……いや、そんな馬鹿な事はない！ あいつ旅券もなければ、金もないんぢやないか！」

「どうだかね。あの男は暇乞ひに來たんですよ。ちやんと著替へをして、用意が出來てたつて。もう行つてしまつたなりで、歸つて來ないんださうだ。何でも、君は悪黨だから、君の金なんか待つてゐない、とか言つてた。」

「ははあ！ あいつ僕がなにするのが怖いんだな……もしそんな事があつたら、僕は今だつてあいつを……どこにゐるんです、臺所？」

キリーロフは、小さな暗い部屋へ通ずる脇戸を開けた。この部屋から三つ段々を下りると、眞つすぐに臺所へ下りられるやうになつてゐた。こゝにはさゝやかな穴みたいな部屋が仕切つてあつて、いつも下女の寢臺が据ゑてあつた。今この部屋の片隅にある聖像の下に、荒削りのまゝで布クロスのかゝつてゐない卓を控へて、フェーヂカが陣取つてゐた。卓の上には、ヨートカの小壘が据ゑてあつて、皿の中には麵麩、素焼の器には一片の冷肉と、馬鈴薯が入つてゐた。彼は悠々と下物を平らげてゐた。もう半分酔拂つてゐたが、それでも毛皮の半外套を著込んで、もうすつかり旅支度が出來てゐるらしかつた。仕切りの向側では、湯沸サモワールが煮立つてゐたが、それはフェーヂカのためではない。フェーヂカはかへつてその火を起したり、加減を見たりして、もうこれで一週間ばかり、『アレクセイ・ニールイッチ』のために、毎晩世話をやいてゐるのだつた。『どうも毎

晩お茶を飲むが、すっかり癖になつてらつしやるのでね」と彼は言つた。冷肉と馬鈴薯は、下女が居ないところから見ると、あるじのキリーロフがフェーヂカのために、朝から炊いて待つてたものに相違ない——かうわたしは固く信じてゐる。

「一たい貴様は何を考へ出したんだ？」とピョートルは下へ飛びおりた。「どうして云ひつけた場所待つてないんだ？」

かう言ひながら、彼は勢込んで拳を固めながら、卓を撲りつけた。

フェーヂカはぐつと反身になつた。

「お前さん、ちよつと待ちなせえ、ピョートルさん、ちよつと待つておくんなせえ。」一語一語氣取つて刻み／＼發音しながら、彼はかう言ひ出した。「お前さんはまづ第一に、これだけの事を腹に入れなきやならないんだ。お前さんは今キリーロフさんの處へ、お客に來てるんだよ。お前さんなどは、始終あの人の靴を磨いてもい／＼くらゐだ。なぜたつて、あの人はお前さんなぞに較べたら、教育のある賢いお方だからな。ところが、お前さんなぞと來たら——ちよつ！」

彼は氣取つた様子で、出もしない唾を、わきの方へべつと吐いた。彼の態度には傲慢な決然たる様子と、取つてつけたやうな落ちつき拂つた、理窟つばい處が窺はれた。尤も、これは破裂の前の静けさで、極めて危険な性質を帯びたものなのだ。けれど、ピョートルはそんな危険に氣のつく餘裕もなかつたし、またそんな事は彼の人間觀にふさはなかつた。この日に生じた様々な出來事や失敗は、すつかり彼の頭腦を昏迷させてしまつたのである……リプーチンは三段うへの小

部屋から、好奇の目を光らせながら、見おろしてゐた。

「一たい貴様は確かな旅券と、おれの言つた所へ高飛びするたんまりした旅費が、ほしくはないのか、應かいやか？」

「まあ聞きなせえ、ピョートルさん、お前さんはそも／＼の始めから、わつしを騙しにかゝつたんだ。なぜつて、お前さんは正真正銘の悪黨だからね。わつしはちやんと見込をつけちやつたよ。お前さんはまるで人間の體にくつつく、けがららしい虱も同じこつた——まあこんな風に、わつしやお前さんの事を考へてるのさ。お前さんは罪もない人間の血に、大枚の金をわつしに約束した上、スタヴローギンさんに代つて誓ひまで立てた。ところが、本當はお前さんの圖々しい出たら目だつたんだ、それつきりだ。わつしや一滴だつて、あの血に關係はないんだからね。千五百留どころの騒ぎぢやありやしない。ところでスタヴローギンさんは、さつきお前さんの頬つべたを食らはしたさうぢやないか。わつしはもうちやんと知つてるからね。今度またお前さんはわつしを脅かして、金をやらうと約束しなざるが、どういふ仕事かつて聞くと、お前さんも返事をしないぢやないか。わつしは腹の中でかう疑つてるんだ——お前さんがわつしを彼得堡へやらうといふのは、わつしの早呑込をあてにして、手だてはどうだつて構はない、とにかくスタヴローギンさんに恨みを霽すためぢやないか。して見ると、お前さんが一番の下手人だ、といふ事になるのさ。それにね、お前さんがその腐つた心のために、本當の神様を——眞の創造主を信じなくなつたといふ事だ、どういふ物になりさがつたか分つてるかい？ お前さんは偶像崇拜者だ、



だから、韃靼人やモルドヴ人と同一列なんだ。キリーロフさんは哲學者だから、お前さんに本當の神様——つくりぬし様の事や、この世の始りや、來世の運命や、黙示録に出て來る獸や、そのほか様々な生物(いさまもの)の造り變への事などを、幾度となくお前さんにして聞かしたのだ。ところが、お前さんは譯の分らない木偶(でく)の坊だから、啞響(えい)みてえに頑張つて、あの無神論者といふ極悪非道の誘惑者みてえに、少尉補のエルテレフ(エル)を、同じ道へ引き込んでしまつたのだ……」

「え、この酔拂ひの畜生め？ 自分で聖像を剝いで歩いてる癖に、まだ神様の説教なんかしてやがる！」

「そりやあね、ピョードルさん、なるほどお前さんの言ふ通り、わつしは剝いで廻つたよ。だが、ありやたゞ眞珠を剝がしただけなんだよ。それに、お前さんにや分るまいが、事によつたら、わつしの涙がその瞬間に、神様の爐にかゝつて、眞珠になつたのかも知れないぜ。神様がわつしの受けた苦しみを憐れんで下すつてね。なぜつて、わつしやこれといふ決つた隠家のない、三界(みやう)に寄る邊のない孤兒(みだしの)だからね。お前さんは本を讀んで知つてるだらうが、昔ある處に一人の商人(あきん)が、やはりわつしとおなじやうに、涙を流して溜息をつきながら、お禱りを上げ、聖母マリア様の後光についた、眞珠を盗んだもんでさあ。それから後、大勢の目の前で膝を突いて、盗んだ金をすつかりマリヤ様の臺の下へお返しした。ところが、マリヤ様は多くの人の目の前で、その商人(あきん)を被衣(かぶせ)の下へお匿(かく)しなされた。かういふ奇蹟(ふしぎ)がそのとき現れたので、お役人(かみ)がお政府の本へも、その通り書き込むやうにと、お云ひつけになつたくらゐだ。ところが、お前さんは二十日

鼠を放すやうな眞似をする。つまり神様の思召にたいして、悪口をついたことになるのだ。もしお前さんがわつしに取つて、生れながらのご主人でなかつたら——わつしが餓鬼(うが)のときこの手に抱いて歩いた人でなかつたら、わつしは今この場を去らすに、お前さんをばらしてしまふ所なんだよ」

ピョートルは名狀し難い憤怒に襲はれた。

「白狀しろ、貴様は今日スタヴローギンに會つたな？」

「そんな事は、お前さんわつしに聞く権利はないぜ。スタヴローギンさんはまるつきし、お前さんに呆返つてゐらつしやる、あの方は命令するの、金を出すのといふどころか、あの事件に就いちやあ、どうしたいといふ考へさへ、持つてゐらつしやりやしなかつたんだ。あれは、お前さんがわつしを引掛けたのさ。」

「金はやるよ、二千留(ルイ)の方も、彼得堡へ著いたら、すぐにその場で、そつくり耳を揃へて渡してやる。まだその上にもつと出してやるよ。」

「おい、大将、出たらめ言ふもんじゃないよ。わつしやお前さんを見るのも可笑しくてならねえ。ほんにお前さんは、何てえ淺はかな考へを持つた人だらう。スタヴローギンの旦那などは、お前さんから見ると、高い階子段の上に立つてゐらつしやるやうなものだ。お前さんが下の方で、間の抜けた犬ころみてえに、心細い聲できやん／＼吠えてるとな、あの方は上からお前さんを見おろして、唾をひつ掛けるのさへ、お情のやうに思つてゐらつしやらあね。」

「やい、覚えてろ。」とピョートルは形相を變へながら怒鳴つた。「貴様のやうな畜生は、ここから一あしも外へ出さないで、いきなり警察へ突出してくるんだ。」

フェーヂカはいきなり飛上つて、物凄く兩眼を輝かした。ピョートルは拳銃を取り出した。と、その瞬間、咄嗟のあひだに、忌はしい光景が演出された。ピョートルが拳銃を向ける暇のない中に、フェーヂカは忽ち身を跳して、力任せに彼の横面を撲りつけた。と、同じ瞬間に、また一つ恐ろしい拳の音が聞えた、續いてまた一つ、また一つ……みんな頬の上だつた。ピョートルはぼかんとしてしまつて、目を剝出しながら、何やらぶつ／＼言つたと思ふと、突然ぱたりと枯木倒しに床の上へ倒れた。

「さあ、こいつを進上しまさあ、勝手に連れて行きなさい！」勝誇つたやうに身をかへして、フェーヂカは忽ち帽子を取つた。そして、床几の下から包みを取り出すと、そのまゝ姿を消した。

ピョートルは正氣を失つて、喉をごろ／＼鳴してゐた。リプーチンは、本當に殺されてしまつたのかと思つた。キリーロフは一散に臺所へ駈け下りた。

「水をかけろ！」と彼は叫んだ。

バケツの中から、葉鐵の柄杓で一杯くみ出して、頭へさつとかけた。ピョートルはびくりと身を動かして、頭を持ち上げると、やがて身を起して坐りながら、無意味に前の方を見つめるのであつた。

「え、どんなだね？」とキリーロフは訊ねた。

こちらはまだやはり氣がつかないで、ちつと穴の明くほど、彼の顔を見入つてゐたが、ふと臺所から顔を突き出してゐるリプーチンが目に入ると、例の厭らしい笑ひ方にてたりとして、とつぜん床から拳銃を拾ひ上げながら、飛び起きた。

「君があゝのスタヴローギンの畜生のやうに、明日にもこゝを逃げ出さうなんて了見を起したら、」彼は不意に眞蒼になつて、言葉さへはつきり發音が出來ないで、吃りながら夢中になつて、キリーロフに食つてかゝつた。「僕は世界の涯まで追つかけて行つて……蠅のやうに吊し上げて……おし潰してしまつてやるから……分つたか！」

さう言つて、彼はキリーロフの額に、びたりと拳銃を押しつけた。しかし、殆どそれと同じ瞬間に、やつとすつかり我に返つて、その手を引つ込め、拳銃を衣囊へ突つ込んだ。そして、もう一ことも物をいはないで、そのまゝ外へ駈け出してしまつた。リプーチンもそれに續いた。二人は以前の潜り穴を抜けて、またもや垣根につかまりながら、溝つぶちの傾斜を傳つて行つた。ピョートルは、リプーチンがついて行くのに骨が折れるほど、足早に路次をどん／＼歩いて行つた。始めての四辻へ來たとき、彼はとつぜん立止つた。

「おい？」と彼は挑むやうに、リプーチンの方へ振向いた。

リプーチンはまだ拳銃の事を憶えてゐて、さつきの活劇を思ひ出しては、ぶる／＼慄へてゐたが、答へは何だかかうひとりでに、抵抗し難い力をもつて、舌を迂り出てしまつた。

「僕の考へでは……僕の考へでは、『スモレンスクからタシケントまで、』それほど一生懸命に

學生を待焦れてもゐないやうですな。」

「君はフェーデカが臺所で、何を飲んでたか見たらうね？」

「何を飲んでたつて？ ヲオートカを飲んでたんでさあ。」

「ところで、いゝかね、あれはあの男のこの世に於ける、ヲオートカの飲み納めなんだよ。これから先のご参考までに、ちよつと知らせとくよ。さあ、もうどこなと勝手に行き給へ。明日まで君は用のない人間だ……だが、氣をつけ給へ、馬鹿な眞似をしちやいけないぜ！」

リプーチンは一目散に、わが家をさして駈け出した。

悪

#### 四

彼はもうだいぶ前から人の名義で、旅券パスポートを用意してゐた。この几帳面な俗物で、家庭内の小さな暴君で、官吏で（フリーエ派の社會主義者とは言へ、やはり官吏に相違ない）、しかも資本家で、金貸のリプーチンが、萬一の場合いつでも外國へ逃げ出せるやうに、この旅券を用意して置かうなどといふ突飛な考へを、ずつと前から起してゐるとは、思つたばかりでも奇怪千萬であつた。けれど、彼はこの萬一の可能を認容してゐたのである！ 尤も、この萬一が何を意味するか、もちろん彼自身も、はつきり分らなかつたのだ……

ところが、いま突然、しかも極めて意想外な形を取つて、この萬一が實現されたではないか。先ほど歩道でピョートルから、かの「馬鹿！」を聞かされた後、キリーロフの所へ入るまで抱き

續けてゐた、かの自暴自棄的な想念はほかでもない、つまり明日にもさつそく夜の引明けに、何もかもおつぽり出して、外國へつつか走るといふ事だつた。そんな突飛な話が、今の露西亞の日常生活に、やたらに起る筈がないと、疑を抱く人があつたら、外國にある本物の露西亞の亡命客の傳記を、調べて見るがいい。一人として、これより以上に氣の利いた、實際的な逃げ方をしたものはないのだ。どれを見ても、途徹もない空想の世界である。それつきりなのである。

家へ駈けつけると、彼はまづ第一番に部屋の戸を閉めて、靴を取り出し、痙攣でも起したやうな手つきで、荷造りを始めた。彼のおもな心づかひは、金の事だつた。どんなにして、どれくらゐ助け出せるだらう、といふ事だつた。實際、助け出すのである。なぜと言つて、彼の考へでは、もう一刻の猶豫も出来ない、夜明けまでには、ぜひ街道へ出てゐなければならぬからである。それからまた、どうして汽車に乗つたものか、これもまだよく分つてゐなかつた。けれど、どこか町から二つ目か、三つ目あたりの停車場で、乗らなければならぬ、そこまでは歩いてなりとも行き著けない事はない——かう腹の中で漠然と決心してゐた。かういふ風に、本能的に、機械的に、まるで旋風のやうな想念を頭の中に感じながら、彼は一生懸命に靴の始末をしてゐたが……急にふと手を止めた。そして、何もかも抛り出したまゝ、深い呻聲を立てながら、長椅子の上はどうと倒れてしまつた。

彼は突然はつきりと感じた——自分は恐らく逃げるには逃げるに相違ない。しかし、シャツトフを片づける前にしたものか、それとも後にしたものか、この問題を解決する事は、もう今の自

分にはたうてい不可能だ——とかう自覺したのである。今の彼はたゞ粗雑な感覺のない體、惰力で動いてゐる肉の塊りに過ぎない。彼はいま恐しい外部の力に操られてゐるのだ。たとへ外國行の旅券があるにもせよ、またシャートフ事件から逃げ出す自由があるにもせよ（それでなかつたら、こんなに急ぐ必要はない筈だ）、それでも彼が逃げ出すのは、シャートフの事件の前でもなければ、その中途でもなく、どうしてもシャートフ事件の後に相違ない。それはもう決定され、署名されて、ちやんと判がしてあると同じ事なのだ。堪へ難い悵悶に、絶間なく身を慄はせたり、自分で自分に呆れたり、呻聲を上げたり、痲痺したやうに靜まりかへつたりしながら、彼は戸を閉めきつて、長椅子の上に倒れたまゝ、翌朝の十一時まで、どうにかかうにか時を過した。と不意に、それとなく期待してゐた一つの事件が持上つて、それが彼の決心をかためさず動機となつた。

十一時に彼が部屋の戸を開けて、家族の居間へ出て行くや否や、彼はとつぜん家の者の口から、意外な事實を聞きこんだ。ほかでもない、今まで人々に恐毛を慄はせてゐた教會強盜、懲役人のフェーデカ——これまで警察が一生懸命に追跡してゐたけれど、どうしても捕まへる事の出来なかつた、ついこの間の殺人放火事件の犯人が、けさ未明に、町から七露里ほど離れた縣道から、ザハリノへ出る村道の分岐點で、何者かに殺されてゐるのを發見されて、もう町ぢうその噂で大騒ぎだ、といふのである。彼は早速あとも見ずに家を飛び出して、詳しい話を聞かうと努めた。第一に探り出したのは、フェーデカは頭を割られて倒れてゐたが、あらゆる點から見ても、金を剽

がれたものらしいといふ事と、それから、警察側ではこの犯人を、元シェビグーリン工場にゐたフォームカらしい、といふ強い嫌疑を抱いてゐるばかりか、さう斷定するに足る確かな證據さへ握つてゐる、といふ事だつた。フォームカといふのは、レビヤードキン兄妹を殺して、火を放した共犯者と推測される男で、きつとレビヤードキンの所で盗んだ大金の事で、途中二人の間に爭論が起つたに相違ない……

リプーチンはピョートルの住まひへも馳けつけて見た。そして、ピョートルは昨日かれこれ夜中の一時頃に歸宅したが、それからずつと朝の八時頃まで、穩かに自分の部屋でお休みになつたといふ事を、裏目から内緒で聞きこんだ。勿論、強盜フェーデカの横死には、少しも不思議な點はない、かうした大團圓は、あゝいふ場合ありがちの事だ、それは疑ふ餘地もない。しかし、『フェーデカは今夜が火酒の飲納めだ』といふ恐ろしい豫言の言葉が、即座に事實となつて的中したのが、如何にも意味ぶかく思ひ合されるので、リプーチンは急に迷ふのを止めてしまつた。衝動は遂に與へられた。それは丁度大きな石が上から落ちかゝつて、永久に彼を壓し挫いだやうな鹽梅だつた。家へ歸ると、彼は無言のまま、靴を寢臺の下へ蹴込んでしまつた。そして、晩に定め時刻が來ると、第一番に約束の場所へ出かけて、シャートフを待合はした。尤も、例の旅券は相變らず衣囊に潜んでゐたけれど。